

入ラハ、福井前國越。城主松平慶永前守越。ハ御殿山武藏國荏原郡。ニ、徳島阿波國。
 城主蜂須賀齊裕波守阿。ハ鐵炮洲佃島京橋區。ニ、高松岐國。城主松平頼
 胤岐守讚。ハ濱殿京橋區。ニ、姫路播磨國。城主酒井忠寶樂頭雅。ハ高輪芝邊市
 内芝内芝。ニ、柳河後國筑。城主立花鑑寛將監左近。ハ本所深川内市。ニ兵ヲ出ス
 可シト命ス。慎徳院殿御實紀。藤岡屋日記。嘉永明治年間。錄。立花家譜。松平家譜。

江戸戒嚴事

江戸戒嚴

亞墨利加合衆國使節彼理ノ來航ニ由リ、江戸戒嚴ス。

十二日嘉永六年六月。異國船渡來によつて、細川越中守齊。立花左近將監鑑。松平
 大膳大夫慶親毛利。松平安藝守齊野。松平讚岐守胤頼。酒井雅樂頭寶忠。松平越
 前守慶。ハ深川洲崎の邊警衛の事命せらる。
 十五日略。中松平肥後守保容。松平下總守國忠。松平越前守慶永。松平阿波守睦。
 須賀。松平讚岐守胤頼。細川越中守護齊。松平大膳大夫慶親毛利。酒井雅樂頭寶忠。
 立花左近將監寛胤。鑑おの。異國船渡來によつて心力を盡せしかば、御前にめ
 して御詞を加へらる。また井伊掃部頭松平誠丸おさじく御詞をつたへらる。
 慎徳院殿御實紀

六月七日嘉永六年。御達。

細川越中守護齊

異國船内海に乘入ハ義も難計ハ之付、本牧邊に人數可被差出ハ。尤武器用意
 致し、火事具可有着用ハ。且又松平大膳大夫義ハ、大森村大筒町打場ハに人數差
 出ハ様相達ハ間可被得其意ハ。
 但、場所受取之義ハ、御勘定奉行に可談旨達之。

松平大膳大夫慶親毛利

右同文言。大森村大筒町打場ハに人數差出、且細川越中守義も本牧邊ハに、人數差
 出ハ様相達ハ間可被得其意ハ。

同日御達。

御殿山

松平越前守慶永

鐵炮洲佃島

松平阿波守賀齊須

濱御殿

松平讚岐守胤頼

高繩芝邊

酒井雅樂頭寶忠

本所。深川。

立花左近將監寛鑑

右考異國船内海に乘入の義も有之のり、場所々之固又被仰付の義之付、不
時之出張の義も可有之のり、且出張以前、大筒武器類相廻りの義も可有之の事、

六月

六日嘉永六年六月

異國船浦賀表に渡來之付、諸方海陸御固場所左之通り。

浦賀奉行戸田伊豆守榮氏 井戸石見守道弘

同所御助力。
右本家筋故也。

誠丸松平典則幼年ニ付名代

戸田采女正正氏

相州大津

家老沼田左京

多賀谷伊織

三浦三崎共。

井伊掃部頭碓直

相州小田原出張。

大久保加賀守慈忠

伊豆海岸出張。

水野出羽守良忠

伊豆下田

御代官 江川太郎左衛門龍英

房州富津山。

松平肥後守保容

同北條崎。

松平下總守國忠

房州館山

稻葉兵部少輔巳正

同勝山

酒井安藝守一忠

上總貝淵

林播磨守旭

同海防

松平備中守内正和河

同同斷

黒田豊前守靜直

同姉ヶ崎

水野壹岐守寶忠

同勝浦

大岡兵庫頭恕忠

同一ノ宮

加納備中守徹久

同八幡

阿部駿河守身正

同濱野

森川出羽守民俊

下總寒川

堀田備中守睦正

同銚子

松平右京亮内輝河

伊豆海防

本多豊前守寛正

武州金澤

米倉丹後守壽昌

御代官 齋藤嘉兵衛

竹垣三右衛門

林部善左衛門

勝田次郎

藤岡屋日記

略。上武州大森羽田御臺場松平大膳大夫同本牧細川越中守品川御殿山並同所妙國寺前同洲先獵師町海岸松平越前守但し妙國寺宿陣芝高輪邊酒井雅樂頭但し泉岳寺宿陣佃島並鐵炮洲松平阿波守深川邊立花左近將監但し永代寺宿陣濱御庭松平讚岐守並御鐵炮方田付井上兩組之者。

○異國船萬一内海へ乗入らば其方共も直に可被致出馬は武州金澤米倉丹後守壽昌神奈川松浦壹岐守囉。房州館山稻葉兵部少輔已。同勝山酒井

安藝守一。忠同洲先林播磨守旭。忠上總久留里黒田豊前守靜。同一之宮加納

備中守徵。久同佐貫阿部駿河守身。正同大田喜松平備中守和。正同鶴牧水野壹

岐守寶。忠同勝浦大岡兵庫頭怒。忠下總濱村森川出羽守民。後同銚子松平右京

亮。輝伊豆下田水野出羽守良。忠同大島中川修理大夫昭。久相模國三ヶ所大

久保加賀守慈。忠相州御臺場へ田付四郎兵衛井上左太夫組並に御代官江

川太郎左衛門齋藤嘉兵衛竹垣三右衛門林部善太左衛門勝田次郎等仰を蒙

りて相越す但し何れも出張の人数火事具着用なり其中にも長州家人数ハ

歩士以下足輕迄各甲冑を脊負ひ弓鎗鐵砲等列伍相整を馬の先に押立惣勢三千餘人下々に至る迄老人子供一人も無之武備格別に彬彬たり大將ハ井原豊前也。略。中

此日。嘉永六年六月十六日。嘉祥の御賀畢ハ亞人滯船中御固諸侯へ上意松平阿波守齊裕松平讚岐守頼胤松平越前守慶永松平肥後守容保井伊掃部頭直弼。名代井

少松平誠丸。平日。越。名代。松。松平下總守忠國細川越中守齊護松平大膳大夫慶親

酒井雅樂頭忠實立花左近將監鑑寛等を御黒書院へ被爲召何れも拜謁今般

浦賀表へ異國船渡來に付何も早速人数差出家來とも迄一同骨折ハ段達御

聽御満足之旨上意これ有右畢て於白書院縁頼松平大膳大夫へ今度爲御固

羽田表へ人数早々差出家來共に至る迄骨折ハ段達御聽依之西丸御普請御

用御免被仰出ハ此末非常の儀有之節ハ猶御用筋も可有之條可被得其意ハ

——嘉永明治年間録

鑑寛。從四位上少將。左近將監。飛驒守。幼名淳次郎。次郎。

嘉永六年癸丑六月亞墨利加船來泊浦賀九日奉命發江戶在邸之士卒屯成

于武州深川十三日撤成。

——立花家譜

同永。嘉六年癸丑六月四日未ノ中刻比相摸國浦賀へ亞墨利加船四艘渡來ニ

付速ニ同所兩陣屋詰合ノ人數ヲ繰リ出シ警衛ス。然ルニ同六日蒸汽船一艘

追々内海ノ方へ乘リ入處々測量イタシ内情ハカリ難ク容易ナラサル體ニ

ツキ川越表ヨリ二番手人數ヲ繰リ出ス。同三番手人數ハ誠丸名代トシテ家

老引圓ヒ江戸邸へ出張ス。炎暑ノ節ニツキ總人數へ幕府ヨリ暑氣拂ノ藥ヲ

賜ル。同九日相摸國久里濱ニ於テ應接ノ節同所へ人數サシ出シ警固ス。同十

二日四艘共退帆ス。

同月望老中連名ノ奉書ニ付名代登城セシメル處今度浦賀表へ異船渡來ニ

付テハ家來共迄一同骨折満足ノ旨幕命ヲウク。

〔參考〕 某聞書○通航一覽續輯收。ニ。

嘉永六年

浦賀奉行持場

龜甲岸

明神崎

見魚崎

松平大膳大夫持場

千代崎

千駄崎

松輪崎

長井村出崎

安房崎

細川越中守持場

猿島

鳥ヶ崎

鳶巢

十石

旗山

海岸巡視

十八日辛卯○嘉永六年紀元二五三 若年寄泉○磐城國 邑主本多忠德○越中守

海岸ヲ巡視ス。○柳營日次記。慎徳院殿御實紀。

海岸巡視事

海岸巡視 八、

六月十八日○嘉永六年

御座間

本多越中守○忠徳

此度海岸爲見分可罷越ハ。

右於御前被仰付之。

御勘定奉行 川路左衛門尉○聖 戶川中務少輔○安

此度本多越中守海岸見分として被差遣ハニ付附添罷越ハ様被仰出之。

幕府時代ノ港灣

右於新番所前溜伊勢守

正弘。阿部

申渡之。但馬守

胤。遠藤

侍座。

大御番頭

九鬼式部少輔都。隆

本多越中守近海爲見分被差遣ハ之付其節罷越可申ハ。

右於新番所前溜伊勢守申渡之。

六月十九日

御座間

本多越中守

右海岸爲見分被差遣ハ之付御目見御手自御召之御羽織被下ハ之。

御代官

江川太郎左衛門龍。英

今度本多越中守海岸爲見分被差遣ハ之付附添可罷越ハ。

右於新番所前溜伊勢守申渡之。

柳營日次記

十八日年。嘉永六少老本多越中守海岸檢視として赴くへく御前にして命せ

らる。大番頭九鬼式部少輔は海岸防禦の事命せられ勘定奉行川路左衛門尉

護。聖目付戸川中務少輔安は越中守に添て赴くべく命せらる。

十九日少老本多越中守海岸檢視御いとま下され黄金十枚時服五を賜ひま

た手づから御羽織を下さる。代官江川太郎左衛門殊に勘定吟味役格とあり

積

迄海岸九拾六里餘

御内本郷村迄海岸九拾里程

右湾測量

測量内梅

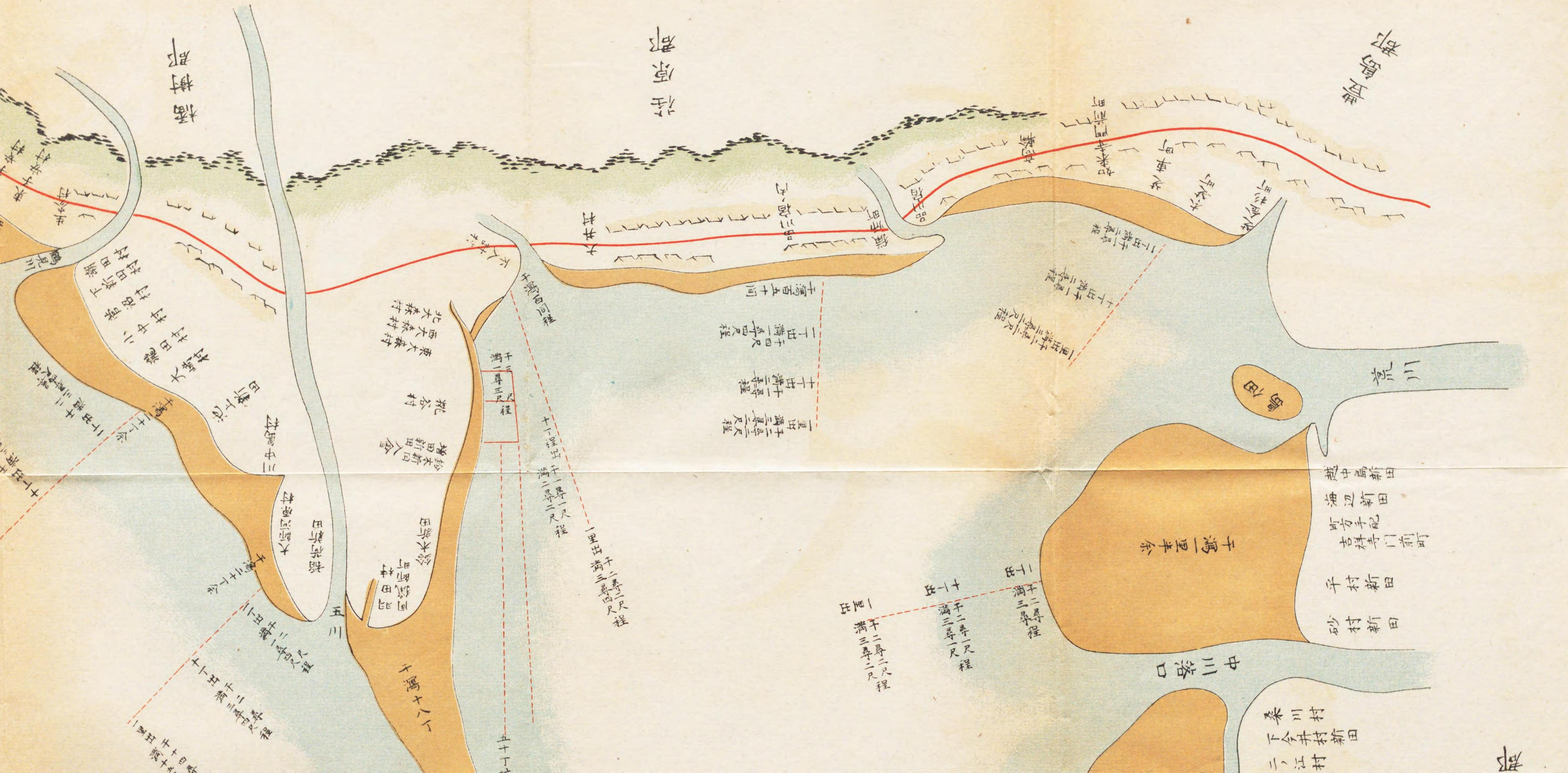
走

所花

豐原郡

往原郡

橋樹郡



越中島新田
 油辺新田
 町方手配
 吉祥寺門前町
 千村新田
 砂村新田

桑川村
 下今井村新田
 二江村

千瀨一里半余
 中川河口

田一 千二里二尺程
 田二 千二里一尺程
 田三 千二里程

一里出 千二里二尺程
 十出 千二里程
 十出 千二里四尺程
 十出 千二里四尺程

一里出 千二里一尺程
 十出 千二里一尺程
 十出 千二里一尺程

北大森村
 西大森村
 東大森村
 北大森村

千瀨一里
 千瀨二里
 千瀨三里

千瀨一里
 千瀨二里
 千瀨三里

武藏國葛飾郡

下総國葛飾郡

同千葉郡

千村新田
砂村新田

桑川村
下今井村新田
二江村

長崎村新田

桑川村
下今井村新田
二江村

芝茂川村

千瀧里半合

中川河口

江戸川河口

千瀧里半合

江戸川村

当猫

新代

新井

又真

漆新田

漆村

押切村

新井

如藤

長行

上放

上放

高田

久木

二保

西海

松島

松島

九日

布

船橋五百村

谷津村

久々田村

カバ沼村

馬如村

福島川村

黒毛川村

六丁

人

中川村

海

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋一尺程

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋一尺程

田一
満十二尋一尺程

田一
満十二尋一尺程

田一
満十二尋四尺程

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋八尺程

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋二尺程

田一
満十二尋二尺程

一里出満十一尋四尺程

一里出満十一尋四尺程

一里出満十一尋四尺程

一里出満十一尋四尺程

五丁杭

丸山杭

字番洲

九津間村

千瀧十八丁

一里出満十一尋四尺程

一里出満十一尋四尺程

一里出満十一尋四尺程

北

十九日、少老本多越中守海岸檢視御いとま
九手づから御羽織を下さる代官江川太郎左



下谷郡

橋部

水野
水野
水野

一里出 淵二十三尋三尺程
十里出 淵八尋四尺程
一里出 淵九尋四尺程
十里出 淵二尋六尺程

水野
水野
水野

十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程

十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程

十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程

十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程

十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程

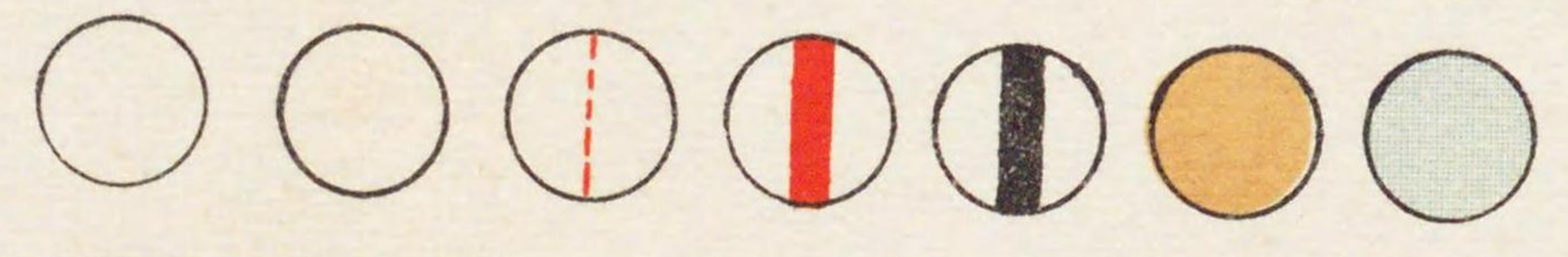
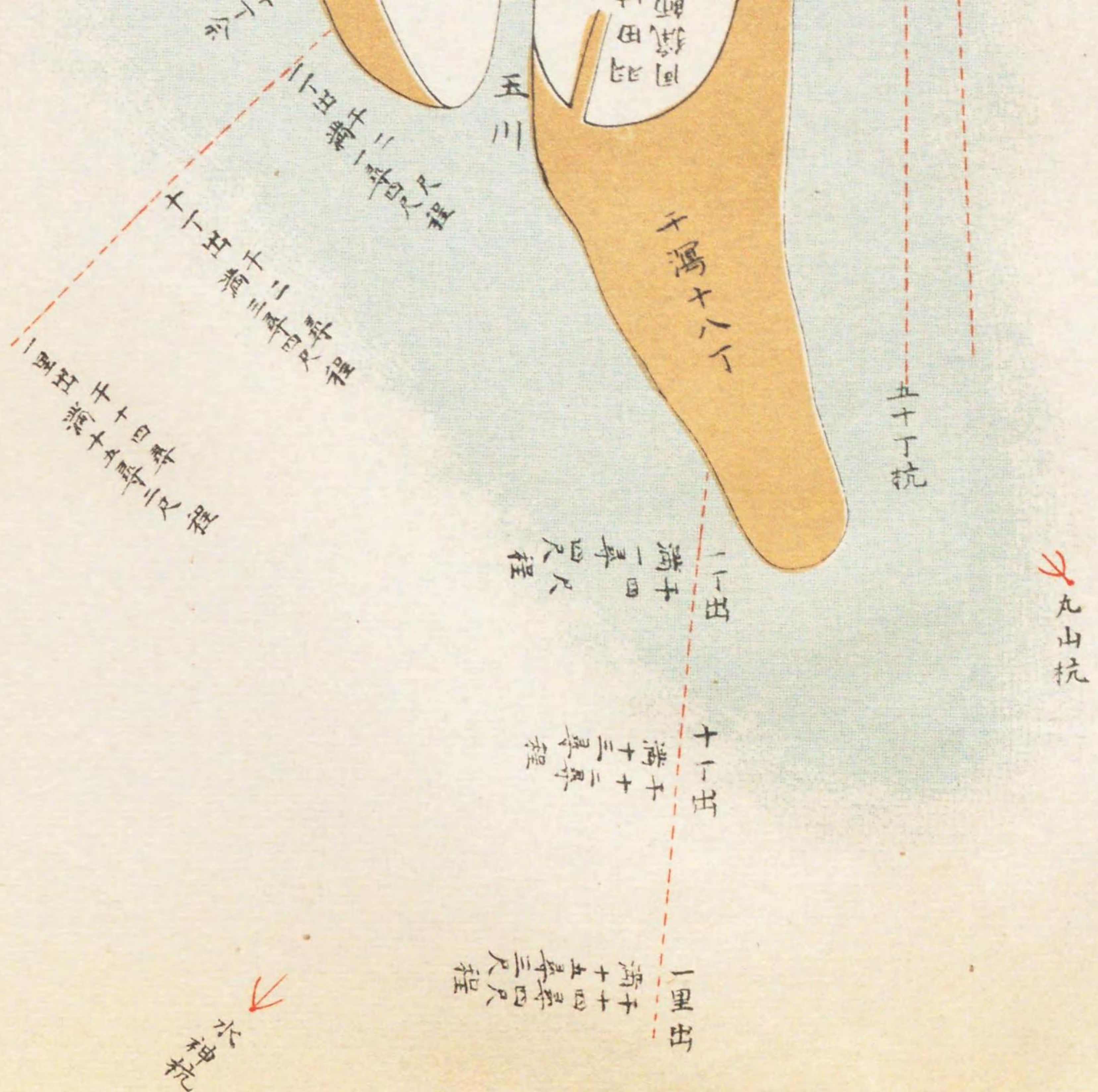
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程

十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程

十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程

十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程

十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程
十里出 淵二尋二尺程



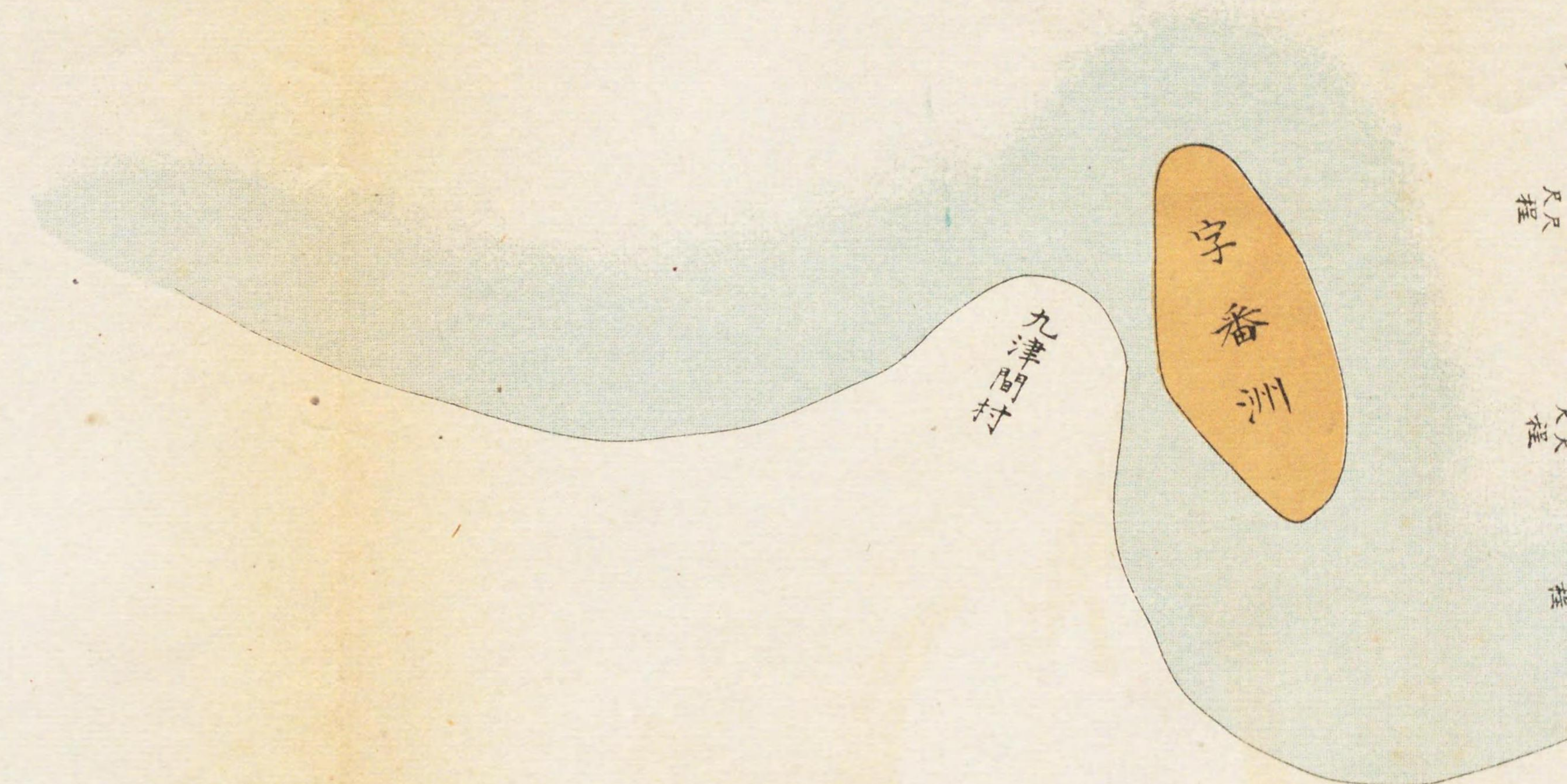
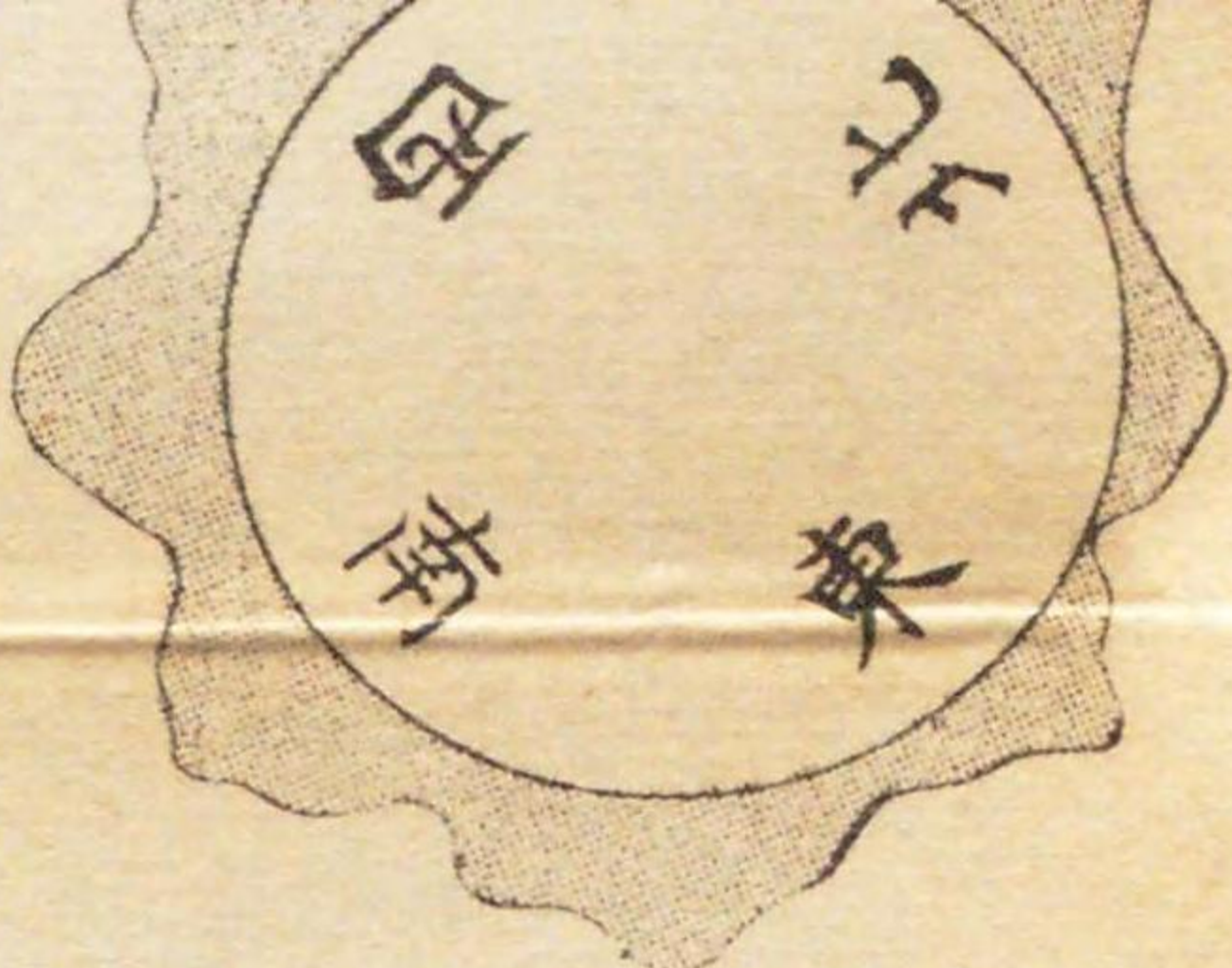
海川
 干瀉
 國境
 郡境并
 港深見通
 堯尋曲尺五
 越中島ヨリ推津
 芝金杉町ヨリ本

嘉永六年夏末人始開入テ
 海底淺探於是幕府亦
 此圖是初形者也

森

章

六
花
六



- 海川
- 干瀉
- 國境
- 郡境并道
- 港深見通筋
- 港尋曲尺五尺積

越中島ヨリ推津村迄海岸九拾六里餘
芝金杉町ヨリ本牧郷内本郷村迄海岸九拾里程

嘉永六年夏末人始開入于江左灣測量
海底淺深於是幕府亦大測量内海
此圖是初形者也

森
重
花

越中守に添て海岸檢視に赴くへく命せらる。

—— 慎徳院殿御實紀

江戸内海測量

廿八日辛丑

○嘉永六年(紀元二五一一)六月○辛丑三正綜覽。

幕府江戸内海ヲ測量ス。

○内海測量御普

請御用留。

江戸内海測量事蹟

江戸内海測量 内海御臺場御普請御用留ニ、

(朱) 丑○嘉永六年六月廿八日伊勢守殿に荒井甚之丞を以上ル。

江戸内海淺深海岸測量之儀ニ付申上候書付

石河土佐守(○政平) 松平河内守(○近直)

大久保市郎兵衛 堀 織 部(○利忠)

松井助左衛門(○恭直)

鵜殿甚左衛門(○長銳)
竹内清太郎(○保徳)

江戸内海淺深之儀先年御代官之取調候處右者海岸より町數ニ隨ひ淺深取調候迄ニ付此度干潮之節全干上り附洲之廣狹草生又之干潮之節も水中ニ候得共水丈ク纔之多大船通行難相成場所等武州本牧前上總國久津間新田地先畔洲迄品川芝鐵炮洲築地佃島洲崎中川江戸川落口之洲ニ至ル迄廣狹淺深測量ハ多し巨細取調候積本多越中守申聞候趣川路左衛門尉戸川中務少輔申越ハ間海岸筋諸家屋敷有之ハ分も家來呼出申渡其餘夫々

霸都時代ノ港灣

申達町方村方にて町奉行並最寄御代官が相達ひ様可仕奉存ひ依之此段申上ひ以上。

丑六月

嘉永六癸丑年七月朔日町觸

今度内海御備向之義之付海面之淺深差改附洲之廣狹波打通迄分間測量有之此事。町觸留

右之趣町御奉行様より被仰渡ひ間其旨可相心得ひ。

是月○嘉永六年(紀元二五〇三年)六月相模國三浦郡ノ炮臺ヲ増築シ浦賀奉行ヲシ

テ之ヲ管掌セシム。○通航一覽續輯。

相州炮臺増築 通航一覽續輯ヲ左ニ抄ス。

同○嘉永六癸丑年六月明神崎に新規臺場を築かれ奉行○浦賀にあつけらる。また龜甲岸の炮臺を増築せられ見魚崎にも造立ありて奉行持とされり。○中略。

嘉永六癸丑年六月

明神崎御臺場

二十四ホントカノン

三挺。

同 斷

一挺。

十八ホントカノン

一挺。

四貫五百目南蠻鐵

一挺。

六貫五百目カルロンナーテ

一挺。 舶來同斷

一挺。

右之通二段之西洋風に新規造立あり浦賀奉行持場あり。

同浦賀奉行持龜甲岸御臺場築増六挺据とある。

八十ホントステエンモルチール

一挺。

十三貫七百目阿蘭陀ホーイツヘル

一挺。

六貫五百目ホーイツスル

一挺。

下曾根金三郎鑄立

十三貫目ホーイツスル

一挺。

神原式部大輔献上

一挺。

同

二挺。

同見魚崎新規御臺場造立。

六挺据。

一貫五百目南蠻鐵

一挺。

一貫三百目同

一挺。

一貫目同

二挺。

九百五十目

一挺。

五十ホントエンモルチール

一挺。

右之通浦賀奉行持とある。或留書。

七月十三日丙辰○嘉永六年(紀元二五〇三年)丙辰三正綜覽。是頃幕府旗山十石崎○相模國三浦郡。

富津上總國周准郡。間ノ海堡築造ヲ計畫シテ果サズ。○内海御臺場御普請御用留。

旗山十石崎富津間炮臺計畫 内海御臺場御普請御用留云フ。

霸都時代ノ港灣

旗山十石崎富津間炮臺計畫事蹟

旗山十石崎富津間炮臺計畫

相州炮臺増築

相州炮臺増築事蹟

(丑) ○嘉永六年七月十三日越中守殿(○本多忠徳)御直左衛門尉(○川路聖謨)太郎左衛門(○江川英龍)に御渡

異船防禦之付、富津之出洲に向、旗山十石崎先キより海中に新築御臺場、雁行之飛々御取建有之に得、永世之御備之相成先ッの御安心之事之に、乍去何分大業よて急速之御成功之程も難計に得共、何れ之も要所之儀歸府之上御取建之儀と申立に積之に、然ル處富津暗礁之儀之、兼々埋立之儀、人々之唱へに儀之も有之、前文旗山之件より却、暗礁ニ隨ひ埋立に方可、然など議論生哉も難計に、因、富津暗礁之儀、且右暗礁より内海之より淺き場所等埋立之儀、縱令御成功罷成に、御要害之も罷成不申哉否、且是邊之利害得失等篤と被申談、耽と被仰聞に様、いゝし度、事。

七月十三日

(奉) 丑七月廿五日越中守殿へ御直左衛門尉上ル 岡田利喜次郎(○忠養)

富津埋立御臺場御取立之儀之付御書付之趣御答申上に書付

川路左衛門尉○聖 江川太郎左衛門○英

異船防禦之付、富津之出洲に向、旗山十石崎先キを海中に新築御臺場雁行之飛々御取建有之に得、永世之御備之罷成先ッの御安心之事之に、乍去何

分大業よて急速之成功之程も難計に得共、何れ之も要所之儀、御歸府之上御取建之儀、人々唱に儀も有之、前文旗山沖の却、暗礁ニ隨ひ埋立に方可、然哉、あど、之議論可生哉も難計に、因、富津暗礁埋立之儀、右暗礁の内海之より淺場所等埋立之儀、縱令御成功罷成に、御要害之も罷成不申哉否、且是迄之利害得失等篤と申談、耽と可申上旨、御書取之趣、御尤之奉存に、於私共も内所に嚴重之御備相立に見込之付、巨細見分之上、實地測量爲致取調に處、富津臺場を五町出水中、貳間、三拾五町目之、深拾六間、夫々次第之深く、旗山前迄平常汐之差引貳里程之處、纔之汐路を明ケ一筋之埋立に、考、干満逆浪強く、保方無覺束、天風高波等之節、元切等之患も難計に、間、旗山之方五町築出、夫々富津迄大小御臺場八ヶ所切々、よも築立に、いゝ、汐之満干之逆シ、儀も薄く、先ッ之成功も可致哉と、御普請仕様取調に處、御臺場九ヶ所水中埋立に石坪千六百拾萬三千貳百拾坪餘之相成、然ル處右體之御普請に、絶、見合無之大業之、不容易御入用高、及ひ其上何ヶ年之、全成就可致哉、更之見居も附兼、富津隱洲之儀之、御沙汰之通衆人之唱へ、後有之に場所之付、埋立

以方之も可有之哉と、是又巨細見分測量淺深相改、土地之様子相辨、松平肥後守家來、並年來洲之模様研究いゝし、老練之獵師共をも承糺取調、以處、右暗礁之儀、字トヒコシヤ大塚脇之塚、大水塚、小水塚、黒塚、大六と唱へ、切々之相成居、其間之濬筋相立、洲元を脇之塚迄、凡貳拾四五町之處、干汐之節、顯れ所、まは八尺深キ所、之あり七間半餘も有之、洲間之濬筋、勿論、洲之上、之ありも、漁船の干満とも、通船差支無之、既、同所御見分之節、大水塚、小水塚之間、小水塚、黒塚之間を乗試、以處、聊差支無之、尤大船之分、洲を除通船いゝし、由之、以得共、乗馴、以もの共、黒塚、大六之邊、之風順、之寄通船、致、以儀、間々有之、此程之、異船も、小水塚、黒塚之間を乗通、以由、併前書之通一體、之洲之上、水中、淺く、以間埋立、以石坪、以相減、以得共、此度測量之節、日々、淺深相改、以度、每、水丈相違、いゝし、一定不致、土俗活洲と唱へ、風波之次第、汐之差引、之を相變、以儀と相見、既、以寛文改之頃、是、ゴシヤ邊之洲上、之あり干汐之節、網干、以由、近來、之元之方、之低シ、相成、洲先、之追々相増、萬一、洲中、以通船、乘懸、以へ、暫時、以震込、押埋、以由、拾八、少年以前、八百石積、三艘、三州瓦積入、浦賀、湊出帆、大塚脇之塚之間、之乗掛、船敷、粘着、次第、之震込、今、以洲中、以沈有、之、以由、右様之儀、之付、御普請仕立、之濟不慮

之手戻等出來可致哉、縦洲中埋立、以手輕、之出來、以あり、右隱洲之儀、以夏島、之向ひ、尤大六と唱、以洲先、之猿島之方、之向ひ、以得共、同所、以壹里八町程、旗山之、壹里拾貳町餘、之相成、富津元洲、之洲先、迄埋立、以而已、之あり、玉利無之、御要害、之難相成、以間、同所、之猿島之間、以御臺場五ヶ所、猿島、之相州地方、之寄貳ヶ所、築立、不被、仰付、以あり、永世之御實備とは、難、申、左、以得、之却、御手重と相成、可、申哉、之付、前書之通、旗山之方、以築立、被、仰付、以積り、取調、以儀、之有之、且、右暗礁、より、内之方、之附洲、有之、藻草生立居、以場所埋立之儀も、淺深相改、取調、以處、淺、き所、之あり五尺深き處、之て、貳間半有之、此所、之地盤、草根、からみ有之、以間、埋立、之方、以手輕、之、以得共、字、小水塚と裏手、迄、之あり壹里餘、なら、て、以無之、是、又、洲先、以同様、之地模様、之あり、水中も、二十尋餘、有之、大六之洲先、より、十七八町、東北之、方、以寄、以間、猿島、以壹里廿町餘、之相成、右洲先、まで埋立、以而已、之あり、矢張、玉、利無之、夫、先、築立、以得、之、前同様、却、御手重、之相成、以間、富津表、以御備、被、立、以、之、あり、て、以三等之内、旗山、前、富津臺場、以向け、築立、以方、可、然哉と、奉、存、以、得共、御入用、之無御厭、年、を、經、以、以、格別、早急、之成功、無覺、東、然、ル、上、之、先、づ、同、所、以御見合、夫、内海之方、被、仰出、以通、早速、御臺場等、御普請、之積取調、申、上、以

様可仕、其上之富津洲先邊之義の尙能々再考可然、存付も御坐ひの、追ふ可申上ひ。依之御書取返上仕、此段申上ひ以上。丑七月凡入用積書、略。

江戸内海炮臺築造

八月廿八日庚子

嘉永六年(紀元二五一年)○庚子三正綜覽。

幕府江戸内海ニ炮臺ヲ築ク。

○外國雜件。内海御臺易御普請御用留。温恭院殿御實紀。幕府沙汰書。嘉永明治年間錄。東京通志。柳營日記。

江戸内海炮臺築造事蹟

江戸内海防禦ノ爲メ旗山十石崎富津間ニ炮臺ヲ設ケム

トシテ果サズ、改メテ品川海上ニ築造スルコトト爲リタルハ上記ノ如シ。而シテ之カ築造ハ、

丑(○嘉永六年)八月二日

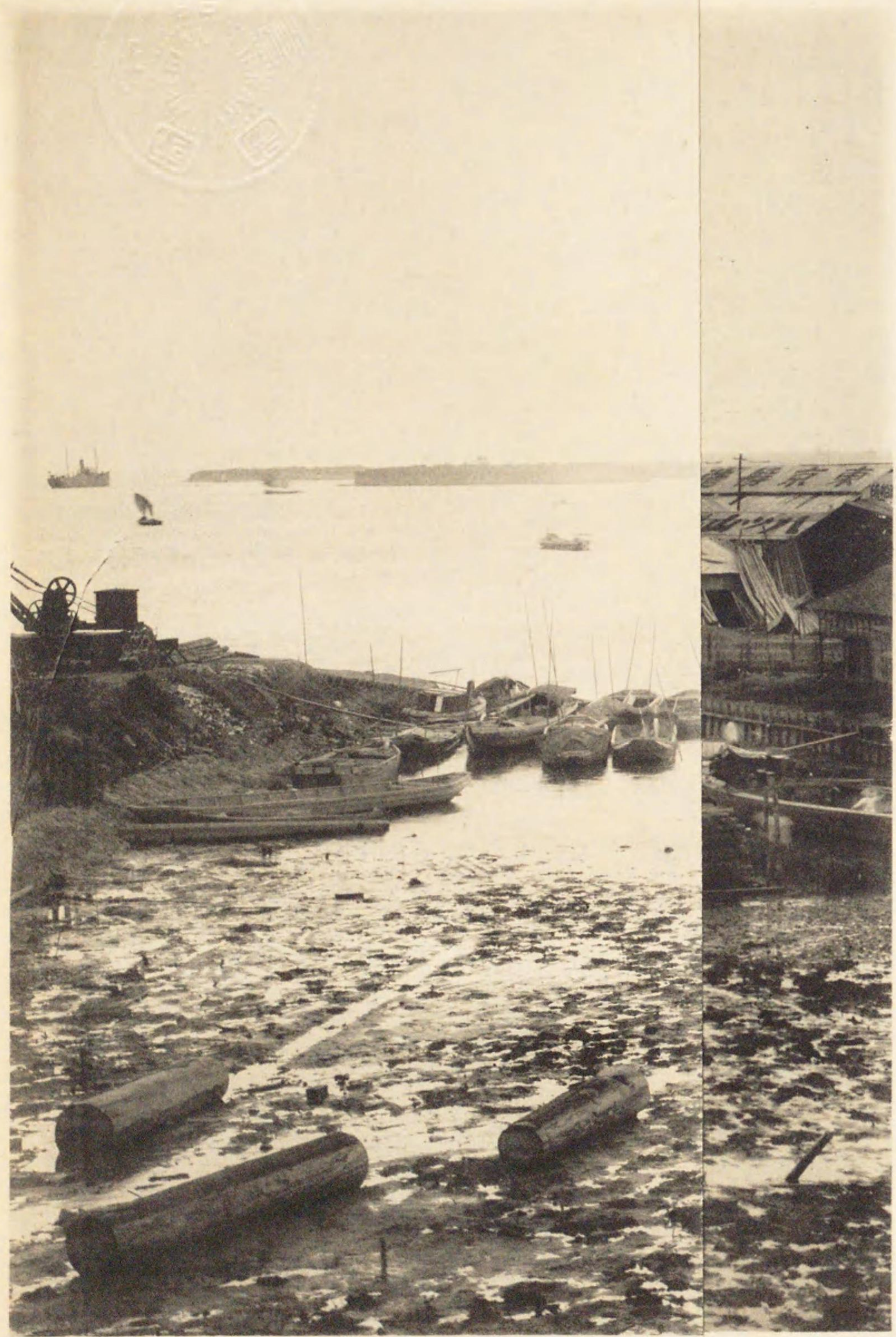
松平河内守○近直。 川路左衛門尉○聖謨。

竹内清太郎○保德。 江川太郎左衛門○英龍。

内海に御警衛御臺場御普請等之儀、急速取掛ひ様被仰出ひ。追々之夫々掛り、後可被仰付ひ得共、不容易御用筋如何之も大業之儀ニ付、取調方等一同通之有之、行届申間敷の間、何れ後引續取扱、一同精力を盡し、何れ之も成功致ひ様、可被相心得ひ。右御臺場取建方、且据付ひ大炮鑄立之儀、江川太郎左衛門に引受被仰付ひ間、御臺場形並御筒貫目挺數等、存念一抔之取調、見

品川炮臺址

大正十二年申ノ實況ヲ撮寫シタル者ニ係ル。



大正十一年六月十日
海軍省
海軍省



込に趣早々申聞に様可被致に。

海防掛に

同文言。

右之通申渡に間被得其意諸事申談に様可被致に。

右伊勢守弘○阿部正中申渡之。

戸川中務少輔安に

内海御警衛御臺場御普請等之儀急速取掛に様被仰出に。追々之夫々掛りも可被仰付に得共不容易御用筋大業之儀之付諸事松平河内守川路左衛門尉竹内清太郎江川太郎左衛門申談凡積其外品々取調差出に様可被致に。右御臺場取建方且据付に大砲鑄立之儀之太郎左衛門に引請被仰付に間可被得其意に。尤其方病氣之中之堀織部引受取扱に様可被致に。

御目付堀織部利忠

海岸防禦筋之御用取扱可申に。

右於新番所前溜遠藤但馬守申渡之。

丑八月廿八日

霸都時代ノ港灣

御勘定奉行 松平河内守直○近

堀目付 堀織部忠○利

同格御代官 江川太郎左衛門龍○英

川路左衛門尉護○聖

御勘定吟味役 竹内清太郎德○保

内海御臺場御普請並大筒鑄立御用被仰付之。

右於芙蓉之間老中列座大和守申渡之。

御勘定組頭 後藤一兵衛

中村為彌萬○時

宮内菅太郎

鈴木大之進同吟味方改役並

山口小一郎

鈴木三平

上水傳一郎

岡田利喜二郎養○忠

御勘定 小島磯之丞

志賀六左衛門

大竹伊兵衛

野口鎌五郎支配勘定

日下部友之丞

同斷御用被仰付之。

右於御右筆部屋縁頼伊勢守正弘○阿部申渡之。本多越中守德○忠侍坐。

(朱) 右之外輕き者之至多者、多人數被仰付之事。

丑八月廿八日

松平相摸守慶○德

芝金杉下屋敷添地共、海岸防禦之筋御用之付、家作共可被差上爲代地、品川領下大崎村松平出羽守下屋敷家作共被下之、御普請奉行可被談營日柳

次記。温恭院殿御實紀同。

右於御黒書院溜老中列座、大和守久世○廣周申渡之。

同日夕

松平出羽守齊○貴

品川領下大崎村下屋敷御用之付、家作共可被差上代地之儀、追不可相達尤御普請奉行可被談

松平駿河守勝○道

下高輪下屋敷海岸防禦之筋御用之付、可被差上家作引取可被申。代地之儀追不可相達尤御普請奉行可被談

右大和守宅銘々家來呼出書付相渡之。

松平出羽守、松平相模守家來達。

此度下屋敷御用之付家作共差上様相達し得共右之内先代が持傳ひ建物等其家之否格別之存込ひ品其儘被返下し否後不苦ひ間其趣相伺ひ様可仕事。

右大和守宅之否書付相渡之。

——外國雜件

七日○嘉永六年九月○中略。

一、今般江戸内海御臺場御普請に付荷船等土砂取相成ひ船は御普請所引請人共より相對次第御普請所差出土砂運送可致し。

右之趣御料は御代官私領は領主地頭より不洩様可申渡し。

右之通關東筋在々海岸川附村々之内領分知行有之面々は可被相觸し。

——溫恭院殿御實紀

〔參考〕 異國船渡來一件ニ、

〔朱〕 寅○嘉永七年正月十七日向方差越入。

町奉行衆

松平河内守

堀 織部

竹内清太郎

内海御臺場御普請土取之付芝泉岳寺前が品川宿迄明六ツ時が暮六時迄

往來差留被仰付し處此度異國船渡來注進並御固之諸家人數等も差出ひ之付否考不便之儀も可有之ひ間渡來中往來明夕通ひ積伊勢守殿に相伺し處伺之通被仰渡し間竹矢來等取拂明十八日往來明夕積之付此段及御達し。 寅正月

〔朱〕 丑七月廿三日於新部屋伊勢守殿御直石河土佐守筒井肥前守鶴殿甚左衛門松井助左衛門に被渡寫取本紙を御徒士目付小田切清十郎に相渡ス。

海防掛に

松平河内守○近 川路左衛門尉○聖

竹内清太郎○保 江川太郎左衛門○英

内海御警衛御臺場御普請等之儀急速取掛り様被仰出し追ふ之夫々懸りも可被仰付し得共不容易御用柄如何にも大業之儀之付取調方等一ト通にて行届申間敷ひ間引請取扱一同精力を盡し何れも成功致し様可被相心得し右御臺場取建方且据附ひ大炮鑄立之儀り太郎左衛門に引請被仰付し間御臺場形並筒貫目挺數等存念一杯之取調見込之趣早々申聞ひ様可被致し。

右之通申渡の間、被得其意諸事申談の様可被致し。

江戸内海御臺場御普請仕立方之儀之付申上り書付

松平河内守 川路左衛門尉

堀 織 部 竹内清太郎

江川太郎左衛門

江戸内海警衛御臺場其外御普請御入用積之儀、御遣方可相成諸色者、關東筋御林木御遣方之いさし、石類者相州三浦岩伊豆石等伐出し相用ひ、右仕立方之儀者、樋橋切組方棟梁並江戸市中もの共又者在方村役人等、其筋相心得仕立方相望ひもの共之内、人物身元等相撰ひ引請爲取計の様可仕得共、如何之も大業之御普請之有之、御作事方、御普請方、小普請方棟梁共之内之、海面石垣築立等之儀相心得ひ者も可有之哉之付、右棟梁共呼出、保方之工夫等夫々見込をも相尋合考仕、仕様時宜之寄御入用積も爲仕度の間、私共斷次第無差支差出の様、御作事奉行、御普請奉行、小普請奉行に被仰渡可被下り、依之申上り以上。 丑八月

御作事奉行衆

松平河内守

御普請奉行衆

川路左衛門尉

小普請奉行衆

竹内清太郎

内海御臺場御普請水中埋立場所見分目論見として差配向差遣の間、御支配棟梁共明後十六日場所見届御入用之積入札として、品川宿御勘定方旅宿に御差出有之の様存り。 八月十四日

八月廿八日

御勘定奉行

松平河内守直○近

川路左衛門尉○聖

御目付

堀 織 部○利

御勘定吟味役 竹内清太郎○保

同格御代官 江川太郎左衛門○英

御殿詰御勘定組頭 後藤一兵衛

内海御臺場御普請大筒鑄立御用被仰付之。

右於芙蓉間、御老中御列座、大和守殿被仰渡。若年寄衆侍座。

御勘定組頭 岡田利喜次郎○忠

中村爲彌○時

御勘定 小島磯之丞

宮田菅太郎

清水安太郎

志賀六左衛門

鈴木大之進

大竹伊兵衛

山口小一郎

野口鎌五郎

鈴木三平
名代 葦名重次郎

支配勘定
日下部 官之丞

上川傳一郎
名代 松野三平二

同斷御用被仰付之。

右於御右筆部屋縁頗伊勢守殿○阿部正弘被仰渡……殿侍座。

御勘定組頭
岡田利喜次郎

御勘定
宮田菅太郎

清水安太郎

大竹伊兵衛

吟味方改役並
野口鎌五郎

鈴木三平

支配勘定
日下部 官之丞

上川傳一郎

右場所懸

御勘定
後藤一兵衛

中村爲彌

小島磯之丞

志賀六左衛門

鈴木大之進

吟味方改役並
山口小一郎

右大筒鑄立江戸掛兼

右之通相心得利喜次郎儀之御用辨之ため場所々御城にも罷出築立方仕法
得と相整ひ上之江戸掛太筒鑄立をも兼時々場所にも罷越ひ様可被致ひ。
右之阿伊勢守殿に伺之上申渡ひ間入念可被相勤ひ。

書面内海御臺場御普請場所割取調入御覽申ひ。

河内守

後藤一兵衛

左衛門尉

岡田利喜次郎

清太郎

中村爲彌

場所割

元小屋并總見廻り
宮田菅太郎

元小屋掛り
吉見健之丞

永倉政太郎

組頭附
石川周藏

宮本次郎左衛門

木石拂
蓮見音次郎

元小屋兼
清水安太郎

上川傳一郎

國又宗平

益頭俊次郎

壹番御臺場懸り

間宮鐵次郎 菊石仙之丞
田中龜次郎 鈴木三平

元小屋兼

日下部 官之丞

貳番御臺場懸り

上條 要助 小林大次郎
高原愛之助 大谷 太一

有坂 銓吉 大竹伊兵衛

元小屋兼

野口鎌五郎 佐藤友次郎

丹羽幸一郎

參番御臺場懸り

渡邊啓之助 近藤篤一郎
安藤三之丞

丑 八月廿八日

松平河内守殿
川路左衛門尉殿
竹内清太郎殿
江川太郎左衛門殿

内海御臺場御普請并江戸掛大筒鑄立御用

御徒目付組頭格

田中勘左衛門

御徒目付

小田切 清十郎

永持亨次郎

元小屋并揚場壹ノ手
出張共兼

河津三郎太郎

平山鎌次郎

御小人目付

山本文之助

齋藤 榮助

高橋金之助

栗島彦四郎

石崎鐵三郎

小島源兵衛

前田右太郎

藤田 幸藏

山田 八郎

吉岡 元平

内海御臺場御普請場所掛

御徒目付

永井 脇 太 參ノ手畑 藤三郎

御小人目付 高松彦三郎 松本 金七

貳ノ手 津田一三郎 稻田七郎左衛門

大筒鑄立御用掛り

御徒目付 稻垣藤一郎 横田新之丞
 御小人目付 天笠鉢太郎 須藤孫兵衛
 堀江六五郎 三浦銈之助

右之通申渡。此段申達。以上。

堀織部利忠

八月

(奉) 丑十月十一日伊勢守殿に原彌十郎殿を以上ル。
 同十二日伺之通可仕旨、承知の様、竹村七左衛門を以御下ダ、承知いたし、同十七日彌
 十郎を頼、七左衛門に遣返上。

後藤一兵衛 岡田利喜次郎
 中村爲彌 御勘定方
 御目付方 吟味方

内海御臺場築立御普請御入用積之儀相伺。書付

書面伺之通可仕旨被仰渡。奉承知候。

丑十月十二日

松平河内守 川路左衛門尉
 堀織部 竹内清太郎
 江川太郎左衛門

内海御臺場拾壹ヶ所之内、壹貳三御場所之義之、格別之御急キ之付不取敢水



内海御臺場築立御普請御入用積之儀相伺以書付

書面伺之通可仕旨被三仰渡一奉三承知一候。

丑十月十二日

松平河内守

川路左衛門尉

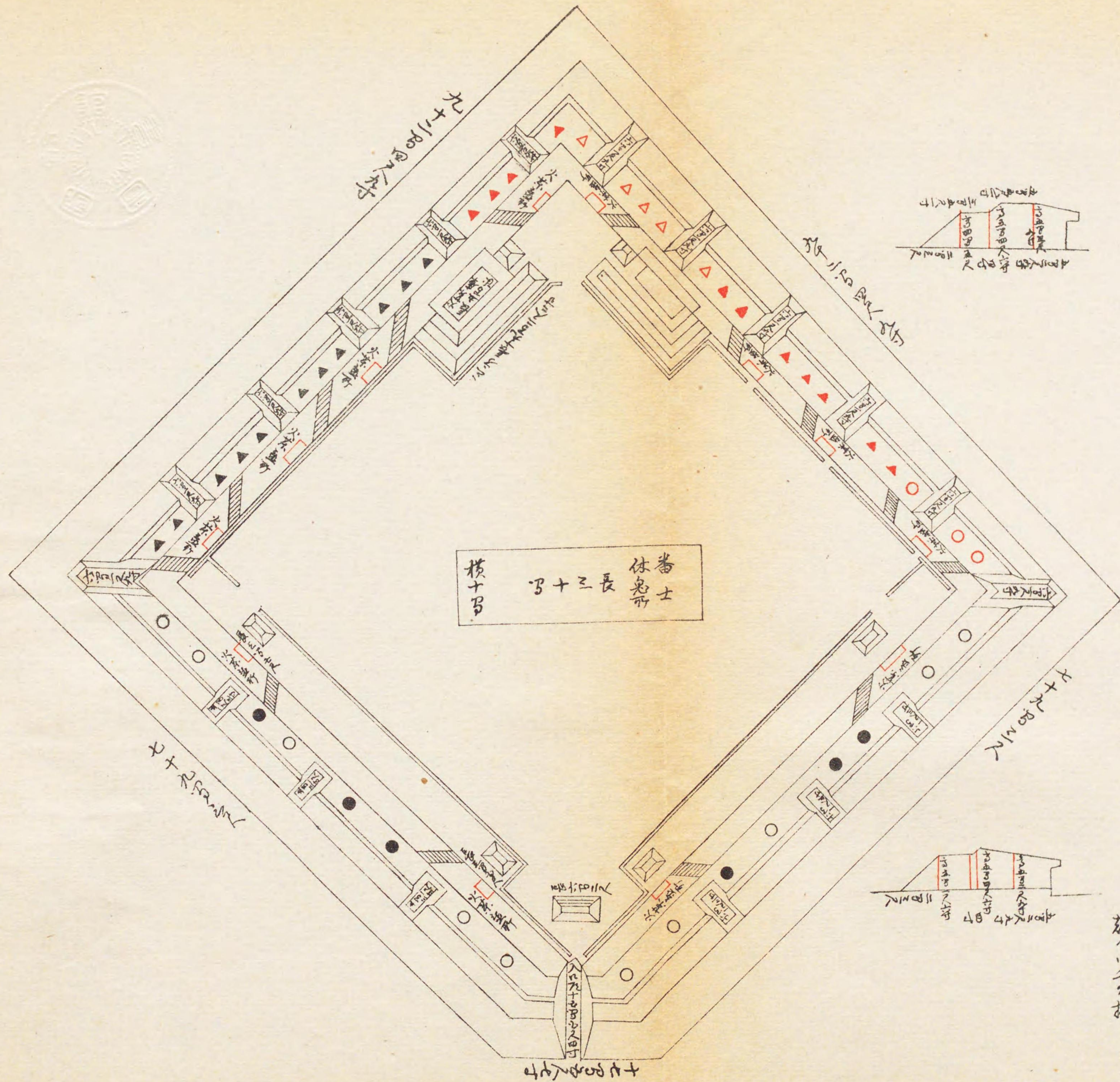
堀織部

竹内清太郎

江川太郎左衛門

内海御臺場拾壹ヶ所之内壹貳三御場所之義之格別之御急キ之付不取敢水

一番 御臺場總圖



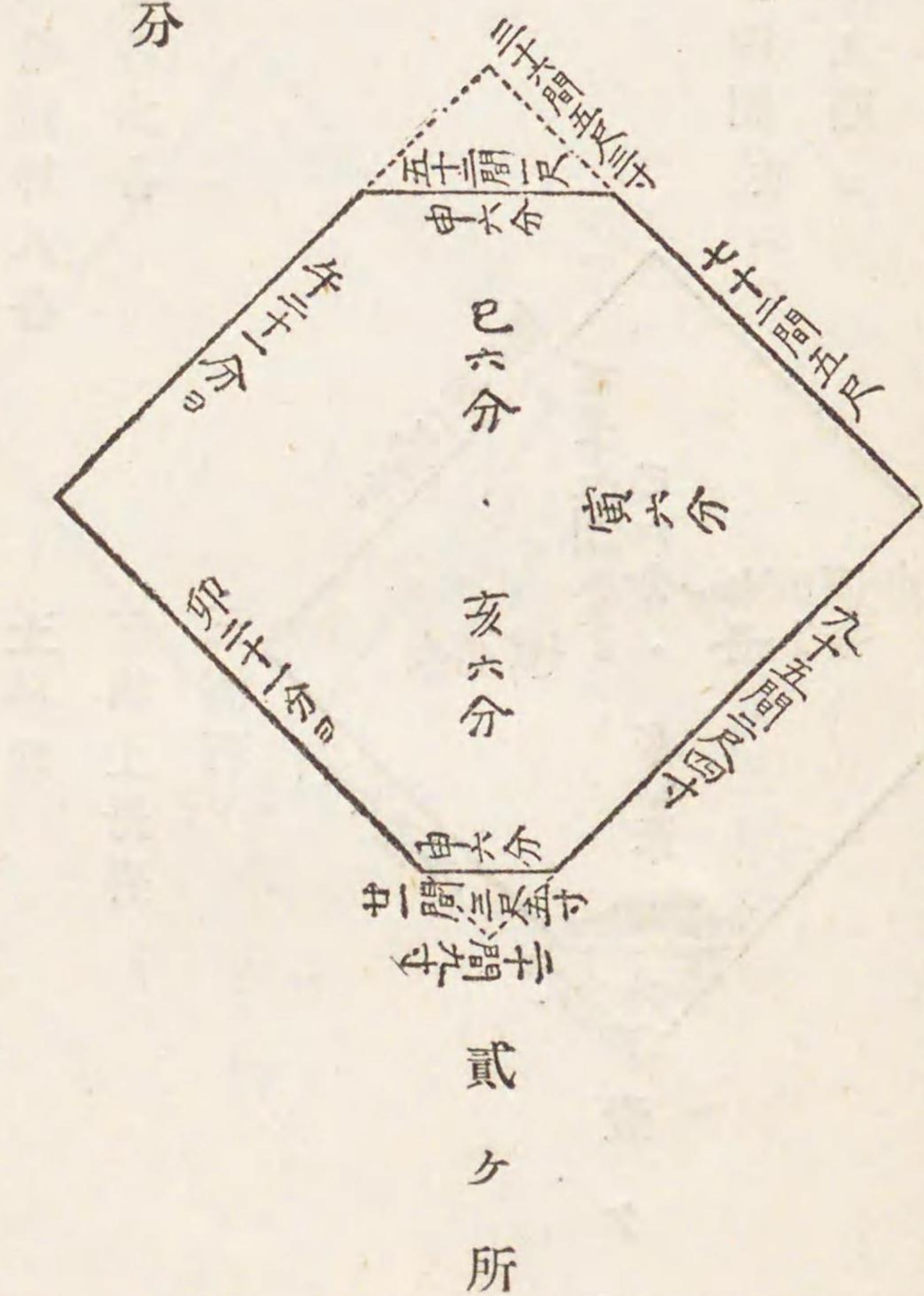
- 五間十二段九百三十三段一尺余余
- △ 七間七段七千九百七十九段一尺余余
- ▲ 二間多段七千四百四十四段一尺余余
- 十二間一尺余余
- ▲ 五間七段七千九百七十九段一尺余余
- ▲ 二間多段七千四百四十四段一尺余余
- 十二間一尺余余
- ▲ 五間七段七千九百七十九段一尺余余
- ▲ 二間多段七千四百四十四段一尺余余
- 十二間一尺余余
- ▲ 五間七段七千九百七十九段一尺余余
- ▲ 二間多段七千四百四十四段一尺余余
- 十二間一尺余余
- ▲ 五間七段七千九百七十九段一尺余余
- ▲ 二間多段七千四百四十四段一尺余余
- 十二間一尺余余



中埋立取掛候處右三ヶ所敷地炮臺其外御臺場形之義太郎左衛門見込別紙繪圖面之通御座也先つ右之形仕様取調右水中埋立御普請引請人御入用積方爲仕。

壹番
貳番

但一二三共
眞方真迄
四百九十四間
一ノ心迄 丑二十六分
二ノ心迄



六方五割法

滿潮面迄
深壹丈壹尺九寸

土砂坪

三浦土丹岩

御臺場水中埋立
坪貳萬六千貳百四拾壹坪
貳萬七百拾貳坪九合
内五千百三拾壹坪壹合

霸都時代ノ港灣

四百壹坪

貳番

同斷

坪壹萬九千八百拾八坪四合

壹萬六千六百六拾六坪八合

內三千貳百五拾坪六合

四百壹坪

三番

三浦石

右同斷

平均滿潮面迄
深九尺四寸

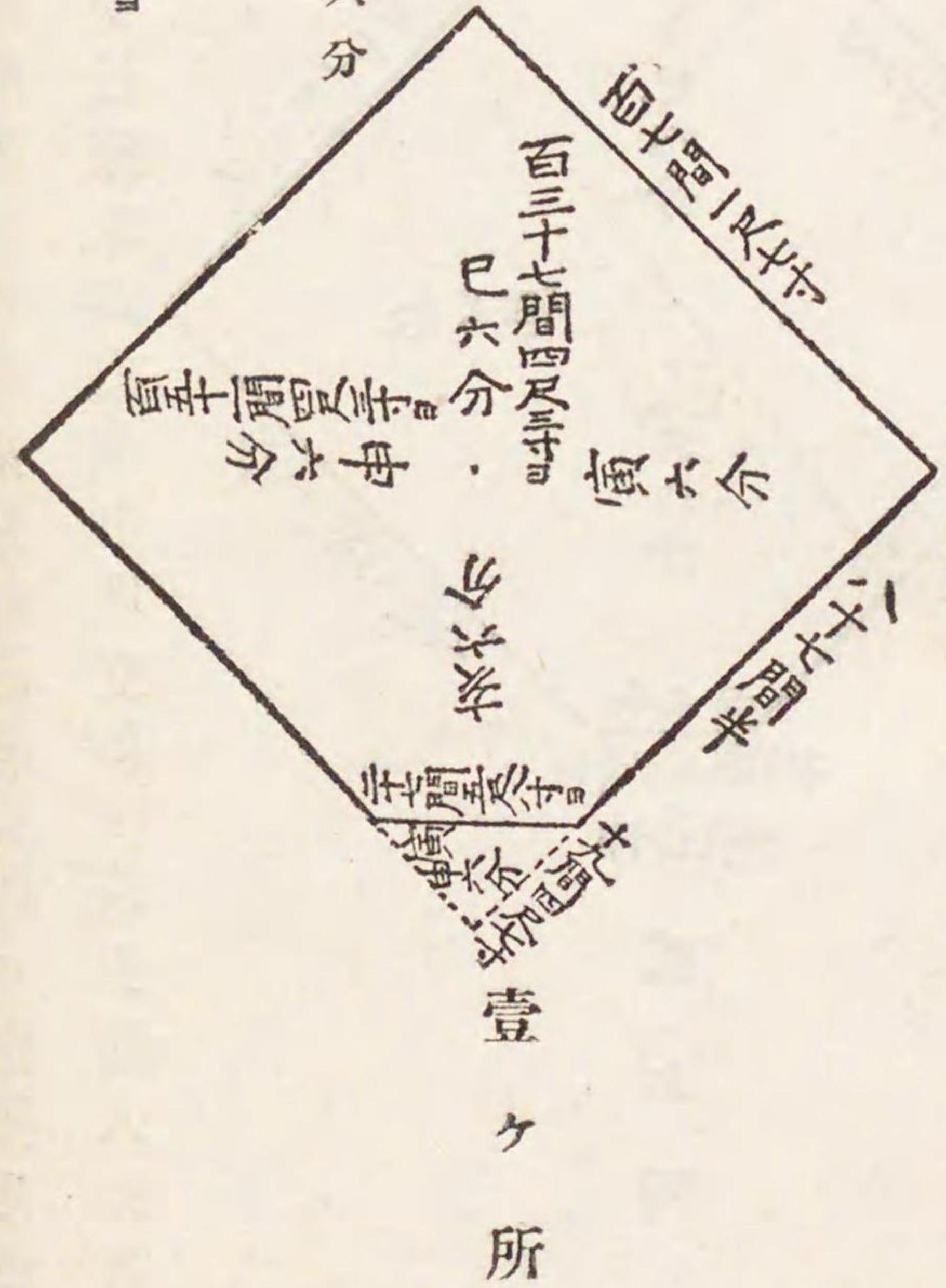
土砂埋

三浦土丹岩

三浦石

三番

(朱)
二ノ真迄 四百九十四間 寅六分
三ノ真迄 二百六十九間
六ノ真迄 二百六十九間
七ノ真迄 二百八十九間半



御臺場水中埋立

坪壹萬九千三百五拾壹坪

壹萬五千七百八拾八坪九合

內三千百四拾九坪壹合

四百拾三坪

四番

六番

五方五割法

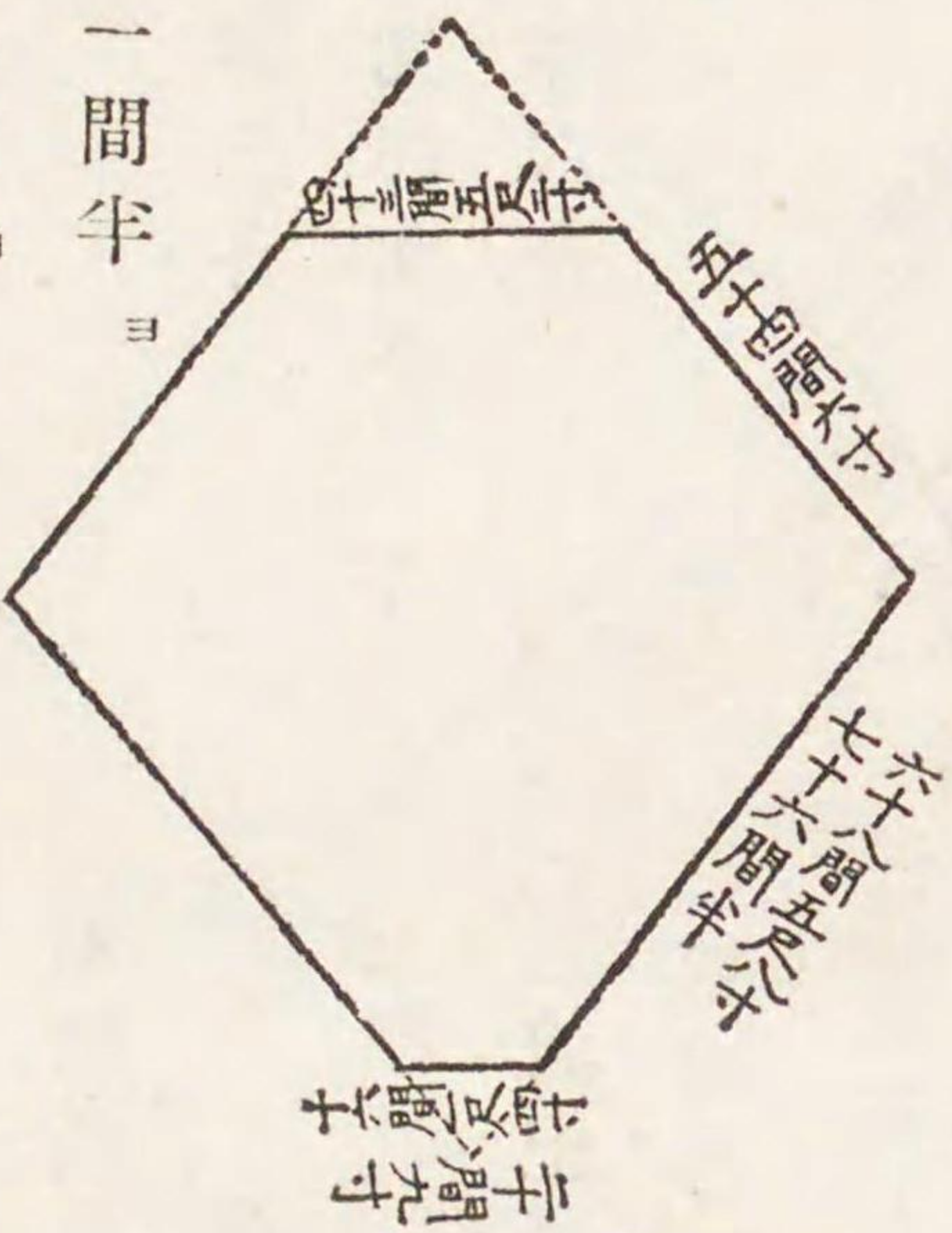
平均滿潮面迄
深九尺

土砂

三浦土丹岩

三浦石

貳ヶ所



(朱)
一ノ真迄 二百六十一間半
四ノ真迄 二百六十一間半
六ノ真迄 二百六十九間

四番

御臺場水中埋立

坪壹萬三千五百七拾三坪八合

六方右同斷

平均滿潮面迄
深九尺六寸

壹萬四千九拾貳坪貳合
內貳千七百六拾坪六合
三百貳拾壹坪

土砂
三浦土丹岩
三浦石

六番

同斷

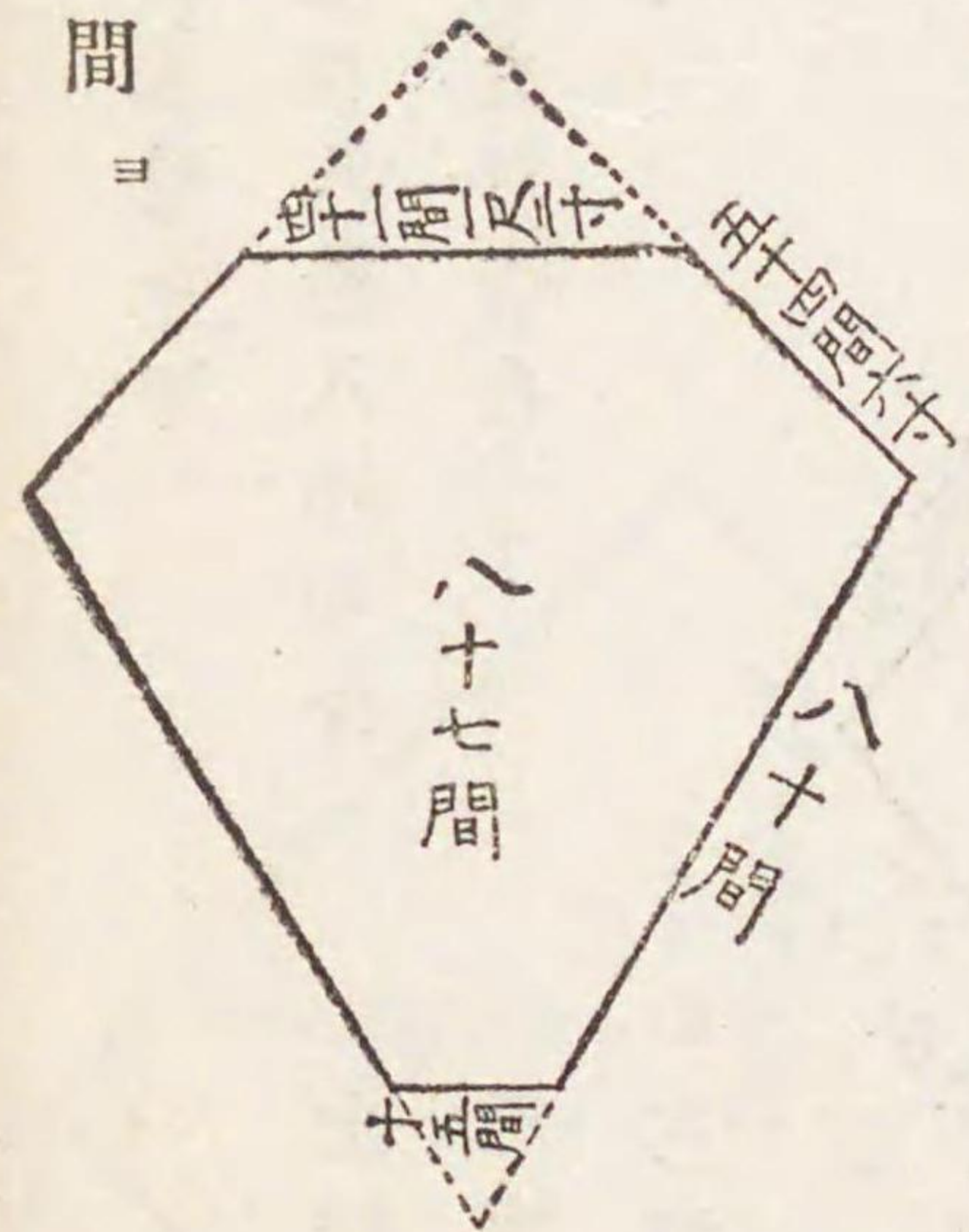
坪九千三百貳拾九坪五合
七千五百貳拾九坪九合
內千四百七拾八坪六合
三百貳拾壹坪

右同斷

平均滿潮面迄
深六尺九寸
土砂
三浦土丹岩
三浦石

五番

五ノ真迄 三百二間



壹ヶ所

五番

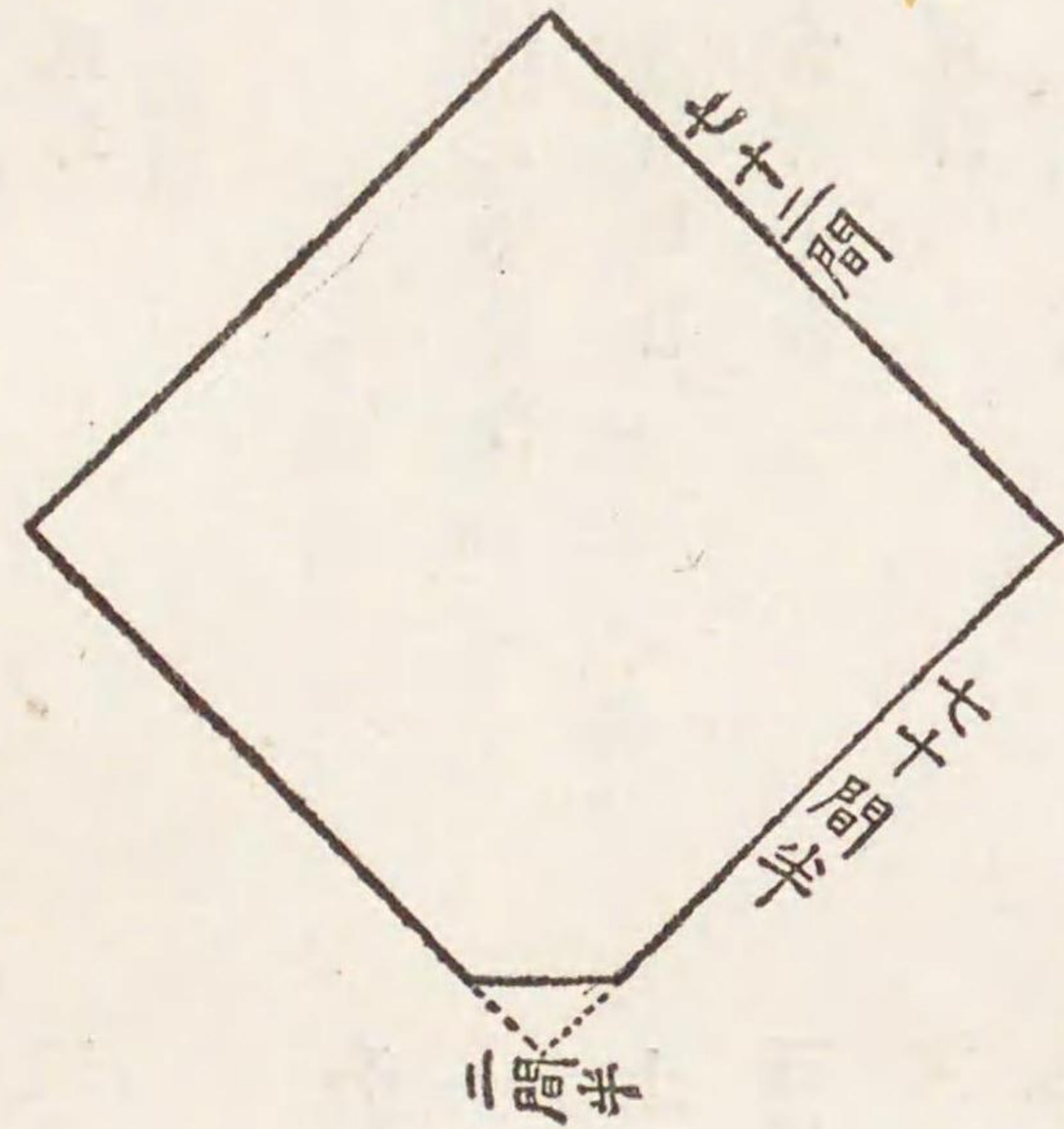
御臺場水中埋立

坪八千八百九拾五坪六合
六千八百九拾五坪九合
內千七百六坪七合
貳百九拾三坪

六方五割法

平均滿潮面迄
深七尺八寸
土砂
三浦土丹岩
三浦石

七番
八番
九番
拾番
拾壹番



五ヶ所

同斷

坪五千九百貳拾四坪壹合

五方三割法

平均滿潮面迄
深六尺三寸

霸都時代ノ港灣

四千八百六拾五坪六合

土砂

内七百七拾六坪五合

三浦土丹岩

貳百八拾貳坪

三浦石

八番

同斷

右同斷

坪六千六百四拾三坪壹合

平均滿潮面迄
深七尺

五千四百九坪四合

土砂

内九百五拾壹坪七合

三浦土丹岩

貳百八拾貳坪

三浦石

九番

同斷

右同斷

坪五千九百貳拾四坪壹合

平均滿潮面迄
深六尺三寸

四千八百六拾五坪六合

土砂

内七百七拾六坪五合

三浦土丹岩

貳百八拾貳坪

三浦石

拾番

同斷

右同斷

坪同斷

右同斷

内同斷

拾壹番

同斷

右同斷

坪同斷

右同斷

内同斷

合坪拾貳萬七千五百五拾四坪八合

拾萬四千四百五拾八坪四合

内貳萬千五百三拾六坪四合

三千五百六拾坪

右入用積書略。

土砂
三浦土丹岩
但壹貳尺迄大小取交。
三浦石
但三浦所持込相渡候積り。

土取場

八ッ山高三丈貳尺五寸。

霸都時代ノ港灣

町裏高三丈三尺五寸。

東海寺脇往還 高三丈四尺。

松平出羽守屋敷前大日山迄北緣長凡百八拾間。

東海寺脇往來大日山迄東緣長凡貳百七拾四間。

平均長貳百貳拾七間。

貳本榎道角東海寺西脇往來迄長凡貳百八拾間。

東海寺南脇往來通り長凡貳百三拾間。

平均長貳百五拾五間程。

此平均五萬七千八百八拾五坪程。

但高平均凡五間程。

此土坪凡貳拾八萬九千四百貳拾五坪程。

御殿山

東長凡百貳拾間程。 西長凡九拾六間程。

南長凡百拾貳間程。 北長凡百拾間程。

平均南北平均長百拾壹間。
東西平均長百八間。

此坪壹萬千九百八拾八坪程。

但、平均高五間程。

此土坪凡五萬九千九百四拾坪程。

貳番 御臺場敷地埋立

此埋坪壹萬八千九拾四坪。

壹萬七千百拾六坪三合

內四百拾貳坪貳合

八百六拾五坪五合

此譯

鋪地理立長百拾貳間四尺貳寸四方

平均深九尺參寸。

此坪壹萬九千六百八拾七坪

內千貳百九拾三坪

殘坪壹萬八千三百九拾四坪

內壹萬七千百拾六坪三合

四百拾貳坪貳合

八百六拾五坪五合

法埋立長延四百四拾七間壹尺五寸

前後欠方空坪引。

霸都時代ノ港灣

滿潮面長七拾參間四尺九寸

同前長七拾四間四尺宛

同後長九拾七間四尺八寸宛

土砂

三浦石

同岩

土砂

三浦石

同岩

深四尺六寸。 橫四丈六尺五寸。

此坪三千三百八拾八坪貳合。
杭木貳千八百七拾三本。

内

四百六本

貳百貳本

千拾參本

是ハ内側間之送り五本。

四百拾參本

七拾四本

參百參拾九本

是ハ中通間之送り貳本ツ。

八百參拾九本

百四拾八本

六百九拾壹本

是ハ外側間之送り三本ツ。

長四間。

同三間半。

同三間。

長四間。

同三間半。

長四間。

同三間半。

雜木千貳百三拾六本

四百拾貳本

是ハ豎布木長延平均八百貳拾四間寸之處貳間に壹本ツ。

布木

八百貳拾四本

是ハ横布木長延同斷之處間之送り貳本ツ。

繩五百四拾四房

是ハ豎布木結ヶ所貳千八百八拾四ヶ所横布木千四百七拾貳ヶ所。

合四千三百五拾六ヶ所壹房八ヶ所結

三番五方面

一御臺場鋪地埋立

此埋坪貳萬五百拾三坪八合

内壹萬六千六百七拾參坪壹合

四百貳拾壹坪五合

參千四百拾九坪貳合

滿潮面仕上

前八拾間壹尺八寸ツ、

脇八拾間壹尺四寸ツ、

後面貳拾八間四尺八寸ツ、

土砂

三浦石

同岩

此譯

鋪地埋立百拾間壹尺八寸四方

此坪壹萬八千貳百四拾九坪壹合

内參百拾壹坪

殘坪壹萬七千九百三拾八坪壹合

内壹萬六千六百七拾參坪壹合

平均深九尺

後面欠方空坪引。

土砂

霸都時代ノ港灣

四百貳拾壹坪五合
八百四拾參坪五合

三浦石
同岩

法埋立延長四百五拾七間五尺四寸

平均深四尺五寸
幅七間半。

此坪貳千五百七拾五坪七合

是ハ五方五割法凡書面之通埋立候積有之候得共、海中之儀ニ付、任立之模様
之寄、追勿増減可有之候。

右入用

御林廻
杭木貳千九百三拾六本

内八百貳拾八本

千六百七拾九本

四百貳拾九本

長貳間半。
末口參寸。
長三間。
末口三寸。
長四間。
末口四寸。
長五間。
末口五寸。

是ハ千六百五拾六本之五方面折廻内側長四百拾四間之處間之送り四本
打四百貳拾貳本之中側長四百貳拾壹間半之處間之送り貳本打八百五拾
八本之外側長四百貳拾九間之處間之送り三本打合三通分。

御林廻
雜木千五拾三本

長貳間半。
末口參寸。

是ハ五方面折廻し六百三拾貳本ハ内外中三側延長千貳百六拾四間半之

處貳間之壹本つゝ、豎布木、四百貳拾壹本ハ五方面折廻し、長平均四百貳拾
壹間半之處間之送り貳本つゝ、横布木。

繩五百貳拾五房

是ハ豎横布木結付四千九拾五ヶ所、但壹房八ヶ所結。

築石六萬九千八百九拾八本

野面
長三四尺。
面壹尺五寸方貳尺迄。
長四尺。
貳尺角。

隅石九拾壹本

長三尺。
壹尺五寸角。

隅石九拾壹本

長五尺幅壹尺。ア七八寸。

縁石六千八百拾貳本

長三尺幅貳尺。ア壹尺五寸。

押石貳千貳百七拾本

面壹尺五寸。
控貳參尺。

間知石四千五百五拾八本

長貳尺幅壹尺。
ア幅壹尺。

角石貳百九拾三本

長貳尺幅壹尺。
ア幅壹尺。

松平駿河守角方

八町餘。

四ノ御臺場

拾四町餘。

壹ノ同

拾六町餘。

五ノ同

拾六町餘。

松平相摸守角方

霸都時代ノ港灣

御濱御殿角

一 貳拾四町餘
 二 拾九町餘
 三 拾九町五拾間餘
 四 拾七町餘
 五 貳拾町四拾間
 六 貳拾五町三拾間
 七 貳拾貳町餘
 八 貳拾五町餘
 九 貳拾貳町半餘
 十 貳拾三町餘
 十一 貳拾六町餘
 十二 三拾三町餘
 十三 三拾町餘

佃島角

八 三拾町半
 九 廿三町餘
 十 拾七町餘
 十一 拾三町餘

三番
 前面貳方上長百八拾五間三尺八寸。下長百九拾間五尺八寸。

長平均百八拾八間壹尺八寸。

後面三方上長百七拾五間參尺八寸。下長百八拾間參尺。

長平均百七拾八間四寸。

一石垣延長三百六拾六間貳尺貳寸。

高四間壹尺六寸
 內壹間六寸埋込。

此平坪千五百六拾三坪壹合六勺四才。

內

五百九拾四坪壹合七勺貳才

貳百九坪貳合四勺壹才

七百五拾九坪七合五勺壹才

伊豆堅石五千貳百九拾壹本

長三尺
 貳尺角

前面角石坪。
 同埋込野面石坪。
 後面野面石坪。
 前面貳方滿潮面上築立。

是ハ前面隅石平均五百九拾四坪壹合七勺貳才之内、隅石平坪六坪三合三勺三才引殘平均五百八拾七坪八合三勺九才之處、平壹坪九本築。

同石千八百六拾四本

長三四尺 右同斷埋込野面石。同斷。

是ハ前面埋込野面石平均貳百九坪貳合四勺壹才之内、隅石平坪貳坪貳合引殘貳百七坪四勺壹才之處、平立坪九本築。

同石壹萬貳千三拾七本

野面石 長三尺 後面三方築立。面壹尺五寸

是ハ後面平坪七百五拾九坪七合五勺壹才之内、隅石平均七坪四合六勺七才、引殘七百五拾貳坪貳合八勺四才之處、平壹坪拾六本築。

同石三拾九本

長四尺 隅石。貳尺角

是ハ壹坪拾三本ッ、三坪分。

同石三拾四本

長三尺 壹尺五寸角 同。

是ハ壹坪拾七本ッ、後面入口貳坪分。

同石貳千貳拾六挺

長五尺 幅壹尺 緣石。ア七八寸

是ハ前面後面折廻長三百六拾壹間壹尺六寸之内、五隅緣石幅六間五尺六寸、引殘三百五拾四間貳尺之處、間之六枚ッ、但長五尺之内貳尺石垣外へ持出候積。

同石三枚

長五尺 幅五尺 三隅 同石。ア七八寸

是ハ前面壹坪並前面後面境貳隅分。但長五尺之内貳尺石垣外へ持出候積。

同石四枚

長五尺 ア七寸 貳隅 同石。

是ハ前面後面折廻長三百六拾壹間壹尺六寸之内、五隅緣石幅六間五尺六寸、引殘三百五拾四間貳尺之處、間之六枚ッ、但長五尺之内貳尺石垣外へ持出候積。

同石三枚

長五尺 巾五尺 三隅 同石。ア七八寸

是ハ前面壹隅並前面後面貳隅分、但長五尺之内貳尺石垣外へ持候積。

同石四枚

長五尺 厚七寸 貳隅 同石。

内貳本

幅手元壹尺八寸。

貳本

幅手元壹尺七寸。

是ハ後面貳隅分、但前同斷。

同石七百拾八本

長三尺 幅貳尺 厚壹尺五寸 押石。

是ハ前面後面共石垣方壹人ッ、引去持廻長平均三百五拾八間四尺四寸之處、間之貳本ッ。

同石六枚

長貳尺 幅貳尺 厚壹尺 船着波渡場石。

是ハ船着場上リ段ニ遣、但三繼ッ、貳側壹ヶ所分。

伊豆本割栗石千八百九拾九坪貳合壹勺九才

内

四百五拾四坪貳合三勺貳才

三百六拾九坪五合七勺八才

千七拾五坪三合七勺九才

同大栗石九拾九坪九合五勺九才

是ハ石垣裏込坪千九百九拾九坪壹合七勺八才之五分一三百九拾九坪八合三勺六才之内、凡四分一取交候積。

中栗砂利貳百九拾九坪八合七勺七才

是ハ右同斷三百九拾九坪八合三勺六才之内、凡四分一取交目潰之遺候積。

切込砂利貳百四拾坪

是ハ五方石垣下地形長平均三百六拾間平均幅三間深四尺此坪七百貳拾坪之處三分一三浦岩刻層へ取交干潮面迄埋立候積。

三浦岩層四百八拾坪

是ハ前同斷之處三分二切込砂利へ取交埋立候積。

松丸太七千三百貳拾本

末口五寸

地杭。

内貳千九百貳拾八本

長三間半

貳千九百貳拾八本

同三間

貳千四百六拾四本

同貳間半

是ハ五方折廻内外長平均三百六拾五間四尺四寸之處、間に送り三本ッ、拾通分。

同丸太七百三拾貳本

長壹丈
末口七八寸

十露盤木。

是ハ右同斷之處間之送り三本ッ、。

同木九百拾五挺

長貳間貳尺

土臺。

内、百八拾六挺

幅壹尺貳寸。
厚七寸。

七百貳拾九挺

幅壹尺。
厚七寸。

是ハ前面後面五方内外折廻長平均三百六拾五間四尺四寸之處、貳間之壹本ッ、五通分長之内貳尺ハ繼手。

同丸太七百四拾四本

長貳間半
末口四五寸

面杭。

是ハ五方折廻シ長三百七拾壹間貳尺八寸之處間之送り三本壹通り。

七寸鯨九千八百八拾貳挺

此鐵目六百九拾壹貫七百四拾目 但壹挺鐵目七拾目。

代永貳百貳拾四貫八百拾五文五分

但壹貫目之付永三百貳拾五文。

正線
四千三百九拾貳挺
手違
五千四百九拾挺

地杭方十露盤木へ繫壹ヶ所貳丁ツ、
貳千九拾六ヶ所分。
十露盤木方土臺へ繫壹ヶ所貳丁ツ、
手共貳千七百四拾五ヶ所分。

石工貳千九百七拾人九分

賃永三百九拾八貫六百九拾四文八分

但壹人永百三拾四文貳分。

是ハ前面貳方角石垣平均五百九拾四坪壹合七勺貳才之處、山取石之儘胴摺合
セ所々當リ鑿切りいたし築立裏込石入念築堅メ共一式平壹坪五人。

石工

手元手傳

賃永百七拾九貫貳百五拾文。

是ハ綠石押石合せ鑿切居付延長三百五拾八間半之處壹間賃永五百文ツ、。

大工貳千九拾人八分

賃永百七拾七貫百六拾三文六分

但壹人永八拾三文三分。

内

千九拾八人

地杭干潮面伐揃大小平均拾本之付壹人五分
沙間仕事之付懸増。

三百貳拾九人四分
六百六拾三人四分

四十露盤木面前付杭頭へ居付録懸堅メ拾本之付
土臺繼手合吹致十露盤木上へ居付録懸堅メ
拾挺之付七人貳分五厘前同斷。

人足七萬四千五百六拾九人八分

賃永四百三拾八貫六百貳拾三文四分

但壹人永五拾五文五分。

貳萬六千八百八拾九人五分

前面埋込野面石垣平均貳百九拾九坪
後面野面石垣平均九拾九坪
合坪七百九拾九坪
合坪七百九拾九坪
合坪七百九拾九坪

壹萬七千八百貳拾五人貳分

石工手傳並場所内石刻栗砂利共持運ハ築立井
籠組建足代懸渡取拂共平壹坪三拾人。

九百八拾八人貳分

十露盤木船積水揚場所持込大工手傳共拾本之
付拾三人五分沙間仕事之付懸多シ。

貳千四百人五分

土臺船積水揚場所持込居付大工手傳共拾挺之
付貳拾三人前同斷。

九千六百六拾貳人四分

三間半杭幅胴築之付取木船代人足通船共平均
壹本三人三分。

八千三百四拾四人八分

三間杭前同斷壹本貳人八分五厘。

五千貳百九拾九人貳分

貳間半杭同斷壹本之付貳人四分。

三千四百五拾六人

切込砂利三浦岩割層埋立築堅メ壹坪四人八分
合七百廿坪分。

傳馬船千五百六拾三艘貳分

賃永四百貳拾九貫八百八拾文

但壹艘永貳百七拾五文。

是ハ石工並人足往返石垣平壹坪ニ付壹艘ツ。

永三拾八貫四百三拾文

運賃

內 貳拾七貫四百五拾文

拾貫九百八拾文

土臺持込壹艘ニ付永三拾文ツ。
十露盤木同斷永拾五文ツ。
足代丸太損料繩代人足賃共。

永四百七拾壹貫五拾九文壹分

是ハ地杭面杭打建足代長平均三百六拾六間幅三間滿潮面方高三間壹尺五寸
此坪三千五百六拾八坪五合之内三分一千百八拾九坪五合引殘貳千三百七拾
七坪之處壹坪ニ付永百九拾八文三分。

永五貫八百三拾壹文

肝煎勤料。

是ハ壹日一人永八拾三文三分ツ、凡日數七拾日分。

永拾貫五百文

荷足船
雇切賃。

是ハ肝煎往返船一日壹艘ツ、七十日分但壹艘ニ付賃永百五拾文ツ。

小以永六千七拾壹貫貳百四拾七文九分

長拾五間四尺五寸ツ、

一入口兩脇石垣延長三拾壹間半

平均高貳間四尺五寸。

此平坪八拾六坪六合貳勺五才

右入用

伊豆間知石千三百五拾三本

拾貳三尺
面壹尺五寸

築石。

是ハ平均八拾六坪六合貳勺五才之内入口兩側隅石貳坪六合三才引殘八拾四
坪五合六勺二才之處平壹坪拾六本築。

同堅石九拾貳本

長貳尺
巾壹尺
ア八寸

緣石。

是ハ石垣延長三拾壹間半之處兩側壹尺ツ、裏石垣隅石垣隅石長サ引殘三拾
間半之處ニ三本ツ。

同本刻栗石四拾坪五合六勺貳才

是ハ石垣兩側平均八拾六坪六合貳勺五才之内五坪五合表石垣裏込坪共右引
殘平均八拾壹坪壹合貳勺五才之處平壹坪五合ツ、共飼込とも之遣。

中栗砂利拾六坪貳合貳勺五才

是ハ右同斷殘平均八拾壹坪壹合貳勺五才之處平均壹坪貳合ツ、裏込目潰之遣。

松丸太三百八拾四本

長貳間半
末口四五寸

地杭。

是ハ石垣兩側延長三拾壹間半之處間之送り四本四通分。

同丸太九拾六本

長四尺
末口六寸

十露盤木。

是ハ右同斷之處間之送り四本ツ。

同木三拾貳本

長貳間貳尺

巾壹尺
厚五寸

土臺

是ハ右同斷之處貳間ニ壹本ツ、貳通分長之内貳尺ニ繼手。

同丸太六拾四本

長貳間
末口四五寸

面杭

是ハ右同斷之處間ニ送り三本ツ、

七寸皆折釘三百八拾四本

但壹本鐵目三拾目。

此鐵目拾壹貫五百貳拾目

但壹貫目ニ付永三百貳拾五文。

代永三貫七百四拾四文

是ハ十露盤木ヲ臺ヘ打地杭壹本ニ付壹本ツ、

六寸手違録百九拾貳挺

但壹挺鐵目六拾目。

此鐵目拾壹貫五百貳拾目

代永三貫七百四拾四文

但壹貫目ニ付永三百貳拾五文。

是ハ十露盤木ヲ土臺ヘ繫十露盤木壹本ニ付貳挺ツ、九拾六本分。

内海御臺場御普請御用留

八月初旬○嘉永六年非常御手當品川海中へ大筒臺場十一夕所新規御築立仰せ出さる。御用掛御老中阿部伊勢守○正弘牧野備前守○忠雅松平和泉守○全乘松平伊賀守○忠若年寄遠藤但馬守○胤統本多越中守○忠徳松平河内守○直近川路左衛門尉○聖

御目付戸川中務少輔○安堀織部○利御勘定組頭岡田利喜太郎○忠養後藤一兵衛○時中村爲彌○時

御勘定吟味役竹内清太郎○保徳江川太郎左衛門○英龍原彌十郎○奥御右筆早川庄次郎○御勘定菅太郎○御勘定上川

傳一郎○御目付組頭格田中勘左衛門○御目付小田切清十郎○御目付平山謙次郎○敬山本文助○御少人目付天笠鉢太郎○堀

口六五郎○御目付石崎鐵二郎○御目付藤田幸藏○御目付吉岡源平○御目付

一、一番御臺場水中埋立深さ平均滿汐面上壹丈壹尺五寸、二萬六千二百四十七坪也。右積り高壹萬二千四百兩。海岸より二十八町程隔と云。

一、二番水中埋立滿汐面上九尺三寸、壹萬九千八百十八坪、四合、積り高金壹萬千六百二十兩。海岸より三十八町隔つ。

一、三番水中埋立汐面上深九尺、壹萬九千三百五十一坪、積り高金壹萬千三百九十兩と云。

右三夕所請負人ハ御大工棟梁平内大隅也。八月廿一日より御普請之じめ。

一、四番水中埋立深九尺六寸、壹萬三千五百七十三坪八合、積り高金六千六百九十五兩壹步。海岸より二十町程隔つ。

一、五番築立深七尺八寸、八千八十五坪六合、積り高金五千二百六十七兩。海岸より隔つ。

霸都時代ノ港灣

一、六番築立、深九尺六寸、壹萬三千五百七十三坪八合、積り高金 海岸より三十町。

一、七番築立、深六尺三寸、五千九百二十四坪壹合、積り高金三千五百七十六兩壹步。

一、八番築立、深七尺、六千五百四拾三坪壹合、積り高金未詳。

一、九番築立、深六尺三寸、五千九百二十四坪壹合、積り高金三千六百十八兩二步、濱御庭海岸より四十町餘と云。

一、十番十一番共築立、深六尺三寸、二萬七千五百五十四坪五合。

此二ヶ所請負人柴又村年寄五郎右衛門落札といへども未だ仰付られず。積金高不知。六番八番の平内大隅落札と云共未だ仰付られず。四五七九の四ヶ所受請人の御勘定所御用達岡田治助落札なり。

一、一番の三番まで翌寅年四月皆出来。但し土藏井戸等を穿つ。四番五番は翌年正月より御普請始めり。右御普請御入用に付、高輪泉岳寺境内の山、松平駿河守下屋敷山並御殿山等を堀崩し、海岸の船に積て海中の御場所へ運ぶ。右に付高輪通り往來留ま相成芝三田三丁目木戸際へ東海道往來の高札建つ

同所聖坂の二本榎通り、松平相模守大崎村下屋敷門前より、品川天王山下北馬場町より、品川宿橋手前へ出通行す。但暮六ツ時より明ヶ六ツ時まで夜中は、高輪通り往來苦しからず。

九月に至り御觸 今般江戸内海へ御臺場御普請に付、荷船等土取可相成候船は、御普請場所引請人共より、相對次第御普請所へ差出土砂運送可致し。尤相當の賃錢受取之、狼に賃錢引上ひ儀は、深く致間敷し。右之通り御料の御代官私領の領主地頭より、不洩様可被申渡候。 — 嘉永明治年間録

内海御臺場御普請中御觸書

追ふ、此觸書早々順達、承知之旨別紙添書相添、品川宿か加賀役所に可相返候。以上。

御勘定組頭 岡田 利喜次郎 養。○忠

人足貳人。馬四正。御用書物長持壹掉。此持人

人足貳人宛。御用書物長持一掉宛。此持人

御勘定 宮田管太郎 清水安太郎 大竹伊兵衛

御勘定吟味方改役並 野口鎌五郎 鈴木三平

支配勘定 日下部官之丞 上川傳一郎

御徒目付組頭 永井脇太 小田切清十郎 永持亨次郎

馬壹匹

畑 藤三郎 河津三郎太郎 平山鎌次郎

御普請役元ノ格壹人。御勘定吟味方下役貳人。

御普請役十七人。御小人目付十四人。

右者、内海御臺場御普請爲御用罷越候之付、書面之人馬銘々斷次第、上下共御用中幾度も差出可相勤者也。

丑〇嘉永 九月二日 加 賀御印 退出遠 江

江戸傳馬町
東海道品川宿
年問 寄屋

右者、嘉永六丑年九月二日大手御勘定所ノ御呼出之付、馬込代罷出候處、御勘定原田敬右衛門御渡之相成、無差支相勤可申、乍然存寄も有之候ハ、可申出旨關根主水様御立合之被仰渡候之付、御連印御下ケ相成候上ハ、子細無之乍去新規之儀之付、南傳馬町エも得与打合申上度、尤差掛り候御用向ハ、無御差支相勤可申旨、御答申上置候間、別段存意も有之候ハ、被申聞度旨、馬込方ノ問合申來候間、御觸書有之上ハ、存寄り無之旨、及返答置候處、同月十八日御答書左之通差出候旨、馬込氏ノ申來る。

今度、内海御警衛向爲御用、御用掛り様方御出立之付、御勘定御奉行様方御連印御證文御下ケ之相成候上ハ、御差支無之可相勤哉、新規之御用筋之付、有無難計候間、取調可申立旨、去ル二日被仰渡候得共、即刻御答難相成候間、兩傳馬町共篤与打合仕候處、新規之儀之御坐候共、御連印御觸書御下渡之相成候上考、聊無御差支相勤候様仕候、依之其節之爲御答、此段申上候。以上。

御傳馬役馬込勘解由代 良 助

嘉永六丑年九月十八日

御勘定所

一、丑十月十九日大手御勘定所ノ御使を以、道中御奉行様御連印、御觸書御渡相成、添觸致、品川宿ニ差出、馬込方エも右寫相廻置候事。

追及、此觸書早々順達承知之旨、別紙請書相添、品川宿ノ加賀御役所ニ可相返候。以上。

馬二疋。

御徒目付 榑原榮五郎

馬壹疋宛。

御小人目付二人

右者、内海御臺場御普請爲御用罷越候之付、書面之馬銘々斷次第、上下並御用中幾度も差出可相勤者也。

丑十月十九日 加賀御印 遠江御印

東江戶傳馬町宿
品川宿
年問寄屋中

一、丑十一月三日御觸書、左之通馬込方ニ御渡相成候旨申通來る。

追及、此觸書早々順達、承知之旨、別紙請書相添、品川宿方加賀御役所ニ可相返候。以上。

御勘定 鈴木大之進
支配勘定 露木兵助
人足二人。

馬二疋。
御用書物長持一掉。此持人足。

右者、内海御臺場御普請爲御用罷越候之付、書面之人馬、銘々斷次第、上下並御用中幾度も可差出もの也。

丑十一月三日 加賀御印 遠江同

右宿中

嘉永七寅年正月十六日御勘所方御觸書御渡、品川宿ニ繼送り候。

追及、此觸書早々順達、承知之旨、別紙請書相添、品川宿方加賀役所ニ可相返候。以上。
支配勘定 長坂庄八郎
人足二人。
馬二疋。

右者、内海御臺場御普請爲御用罷越候之付、書面之人馬斷次第、上下並御用中幾度後可差出者也。

寅正月十六日 加賀御印 煩遠江

東江戶傳馬町宿
品川宿
年問寄屋

寅正月十七日御勘定所方御觸書御渡、品川宿ニ繼送り候。

追及、此觸書早々相廻し、承知之旨、別紙請書相添、留り方宿村送を以、加賀御役所ニ可相返候。以上。

御小人目付 一人

馬一疋。

右者、内海御臺場御普請御用石切出し場所爲御見廻り罷越候之付、書面之馬、斷次第上下共御用中幾度も可差出者也。

寅正月十七日 伊豫印 左衛門

加賀印 河内同

土佐同 煩遠江

東江戶傳馬町宿
品川宿方豆州石切出場所迄

右宿村々問屋。年寄。名主。組頭。

——撰要永久錄

竣工ハ、

三日○安政元年五月。

一、海防掛役々、品川沖御臺場爲見分相越。御老中阿部伊勢守○正、牧野備前守○忠、松平和泉守○全、松平伊賀守○優、若年寄本多越中守○忠、遠藤但馬守○胤、本庄安藝守○貫、御側衆本郷丹後守○固、平岡丹波守○道、御勘定奉行松平河内守○直、近川路左衛門尉○聖、御目付岩瀬修理○震、御勘定吟味役竹内清太郎○保、同格御代官御鐵炮方兼帶江川太郎左衛門○英等也。

——溫恭院殿御實紀

七月廿一日(○安政元年)伊勢守殿御渡、翌廿二日、願。

大目付江

覺

内海御臺場三々所之分出來之付、布衣以上之御役人見置之儀相願候分之、勝手次第相越不苦候、尤日限之儀之、松平河内守、岩瀬修理へ承合候様可被致候

此段向々へ早々可被相達候事。

七月

——幕府沙汰書

十一月廿四日○安政元年。

御座間

御手自 備前國長義。
御刀 代金三十枚。
御刀 同 美濃國正廣。
御刀 同 代金十三枚。
時服六

阿部伊勢守○正
本多越中守○忠
遠藤但馬守○胤

右内海御臺場御普請御用相勤候之付、於御前拜領之。

金拾五枚。
時服四。
金七枚。
時服四。
金五枚。
時服三。

御勘定奉行 松平河内守○直、近川路左衛門尉○聖、箱館奉行 竹内下野守○保、名代 三好阿波守、堀織部正○利、名代山岡八郎左衛門、御目付 岩瀬修理○忠

御目付之節相勤候。

霸都時代ノ港灣

九六一

時服三。

御勘定吟味役
之節相勤候。

御留守居番
松井助左衛門直。○恭

金五枚。
時服三枚。

御勘定組頭ノ頭
引續相勤候。

御勘定吟味役
岡田利喜次郎。○忠

金七枚。
別段金貳枚。

同格御代官御鐵炮方兼帶
江川太郎左衛門龍。○英

内海御臺場御普請御用相勤候之付被下之。

右於芙蓉之間老中列座伊賀守忠優。○松平申渡之若年寄中侍座。

金三枚。

相當地ニ有
相勤候。

御勘定組頭
後藤一兵衛

金壹枚ツ。

同斷

同
中村爲彌。○時

同斷

同斷

高橋平作。○和

金貳拾兩。

御徒目付之
節相勤候。

箱館奉行支配調役並
河津三郎太郎。○

金三枚。
別段金壹枚。

御勘定

御勘定
宮田菅太郎

時服三枚。
金三枚。

露木兵助。清水安太郎。鈴木大之進

時服二枚。
金二枚ツ。

同
大竹伊兵衛

金壹枚。

當地ニ有相勤候

金五兩。

支配勘定格御代官
手附之節相勤候。

同
志賀六左衛門

金參拾兩。

同斷

箱館奉行支配調役並
富田類右衛門

別段同拾兩。

同斷

御勘定吟味方改役並
野口鎌五郎

同三十兩。

同斷

支配勘定
鈴木三平

同斷

同斷

長坂庄八郎

別段同十兩。

同斷

上川傳一郎

同斷之付被下之。

右於御右筆部屋縁頰伊勢守正弘。○阿部申渡之本多越中守侍座。

金參拾兩。
別段同十兩。

御徒目付組頭格
田中勘左衛門

同斷之付被下之。

右於躑躅之間若年寄中出座本多越中守德。○忠申渡之。

同斷ツ。

御徒目付
永井脇太

同
小田切清十郎

同貳十兩。

同
永持亨次郎

同十兩。

同
横田新之丞

同 畑藤三郎

同 榊原榮五郎

同 平山謙三郎○忠○敬

同 同貳十兩

同 同十兩

右於燒火之間、同人申渡之。

金壹枚。

西丸御裏門番之頭
黒澤正助

奧御右筆勤役中、同斷相勤ひ之付、被下之。

右於御右筆部屋縁頼、老中列座伊賀守申渡之。若年寄中侍座。

金壹枚。
時服二。

御代官
齋藤嘉兵衛

同斷之付、御入用金諸拂其外御用相勤ひ之付、被下之。

右於同席、同前、同人申渡之。

金三十兩。

御目見持格支配勘定
前原八十郎

同斷之付、御林伐出方等御用相勤ひ之付、被下之。

右於躑躅之間伊勢守申渡之。本多越中守侍座。

金三枚。
時服三。

奧御右筆組頭
竹村七左衛門
兩番格奧御右筆
立田録助

同。

金三枚ツ。

原彌十郎

奧御右筆
中村又兵衛

同貳枚。

内海御臺場御普請御用相勤ひ之付、被下之。

早川庄次郎
佐山八十次郎

右於奧相濟。

五月四日○安政二年。

御座間

外國事件書

時服十。

同六。

内海御臺場御普請並大筒鑄立之御用相勤ひ之付、被下之。

阿部伊勢守○弘○正
本多越中守○忠○德○忠

右於御前拜領之。

八丈島十反。

遠藤但馬守○胤○統

同斷御用取扱ひ之付、被下之。

右於奧拜領之。

金拾枚。
時服四。

川路左衛門尉○聖○謨

御勘定奉行
松平河内守○直○近
小普請奉行次席御目付
鵜殿民部少輔○長○鏡

箱館奉行 竹内下野守 德保 堀織部正利

御目付 岩瀬修理 震忠 岡田利喜太郎 忠

内海御臺場御普請並大筒鑄立車臺其外製造之御用相勤ルニ付被下之。右於芙蓉間老中列座伊賀守忠儼。申渡之。若年寄中侍座。

金三枚 時服二。

金一枚。

金一枚 時服二。

同格 宮田菅太郎 ○徒目付組頭一人、勘定五人、徒目付一人、勘定吟味方改役並二人、支配勘定一人、略。

御勘定組頭 後藤一兵衛

中村爲彌 萬時

内海御臺場御普請御用相勤ルニ付被下之。

右於御右筆部屋縁頼伊勢守申渡之。若年寄中侍座。勘定一人、小性組一人、松平大和守家來一人、阿部伊勢守家來一人、鳥居丹波守家來一人、本多越中守家來一人、勘定組頭三人、同格一人、徒目付組頭一人、勘定五人、徒目付二人、勘定吟味方改役並二人、支配勘定一人、徒目付三人、略。

金七枚 時服二。

御代官見習 江川保之丞

内海親規御臺場之儀考、不容易大業以處、其方父太郎左衛門の繩張より御

用被仰付、且大筒鑄立並車臺其外附屬之品等製造之儀をも、御實備専務ニ深く研究致格別入精相勤、此度御成功相成以段、莫大之骨折と被思召、其方儀後引續右御用相勤ルニ付、其方出格之拜領物被下之。

右於御右筆部屋縁頼伊勢守申渡之。若年寄

中侍座

柳營日次記

品川砲臺址

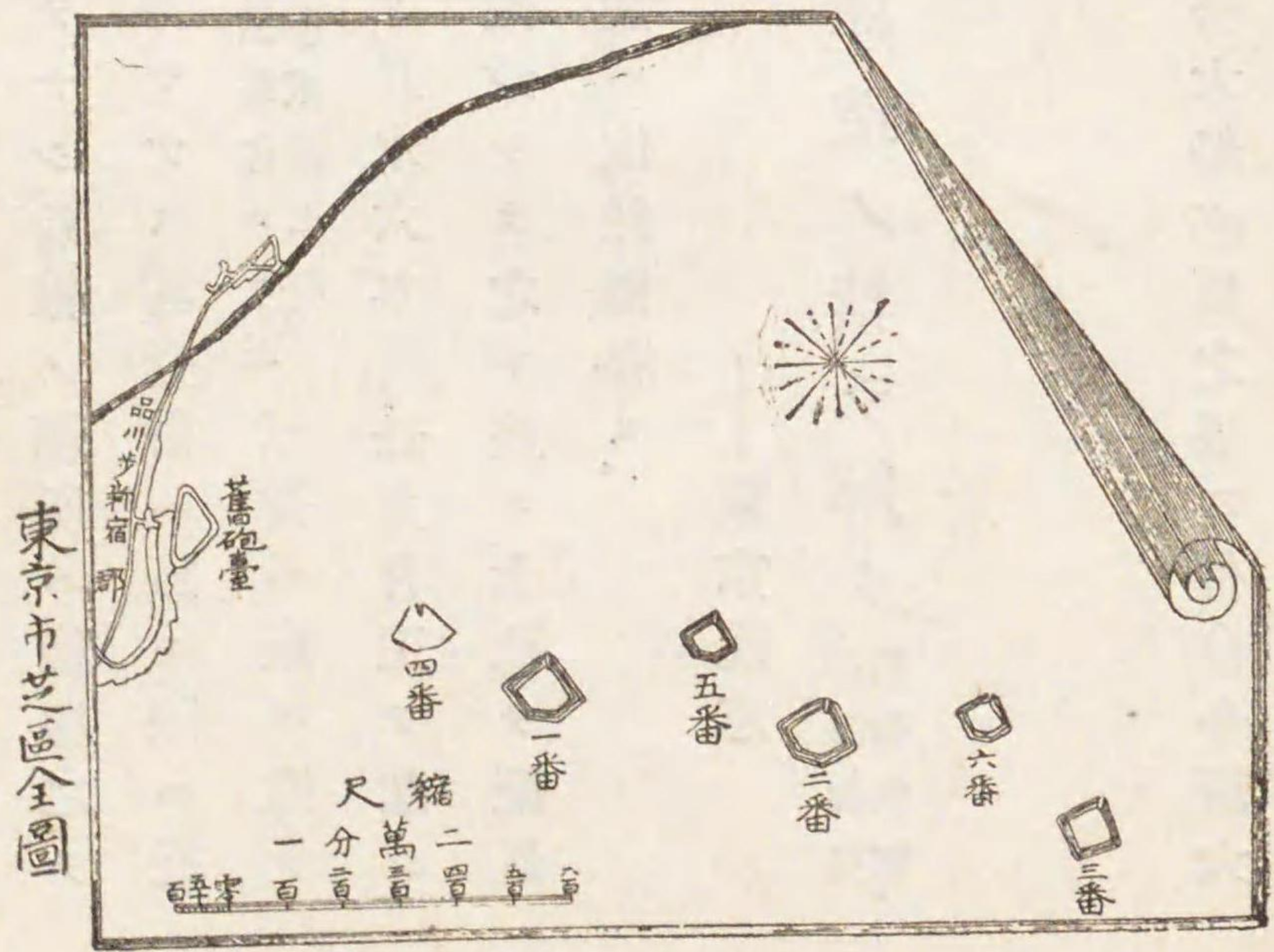
東京灣内ニアリ。芝區ノ東南ニ屬シ荏原郡南品川獵師町ノ北方ヨリ、東北斜ニ深川區越中島町ニ向ヒ、二線ヲナス。前線ニ

當ル者、南ヨリ壹番 方一町、十六間、面積凡一萬廿八坪七合六勺。

貳番 東西貳町拾間、南北貳町貳拾間、面積凡九千九百八拾六坪七勺。參番 東西壹町四拾參間、南北壹町四拾四間、面積凡八千八百九拾壹坪壹合壹勺。

霸都時代ノ港灣

九六七



トナシ後線亦南ヨリ四番成。五番東西壹町貳拾六間、南北壹町拾。六番東西廿七間、南北壹町廿參間、參尺、面積凡六千四百五拾壹坪。七番トナス。其四番七番ハ、未タ竣功セズシテ止ム。各相距ル壹町三拾間許ニシテ、連珠狀ヲナシ、前線ノ闕所ハ後線之ヲ承ク。外面周圍ニ提堡ヲ築ク。高八間許、各菱角ヲナス。其壹番ハ、冨モ陸ニ近ク、芝區車町大木戸址ヲ距ル東南拾八町三拾間濱離宮ヨリ正南貳拾七町。三番ハ、冨モ遠ク、車町ヲ距ル正東貳拾九町濱離宮ヨリ東ニアリ、南ニ拾壹町。嘉永六年癸丑九月工ヲ起シ、御殿山及泉岳寺邊ノ丘阜ヲ剷鑿シ、其土ヲ搬致シテ之ヲ築キ、大砲ヲ配置シ、諸侯ニ命シテ之ヲ成シム。後之ヲ廢シ、臺堡ハ依然猶存ス。

—東京通志

九月十五日丁巳

三〇嘉永六年(紀元二五〇一年)〇丁巳(三正綜覽)

大船建造ノ禁ヲ解ク

〇温恭院殿御實紀

大船建造解
禁事蹟

大船建造解禁

温恭院殿御實紀ニ據ル

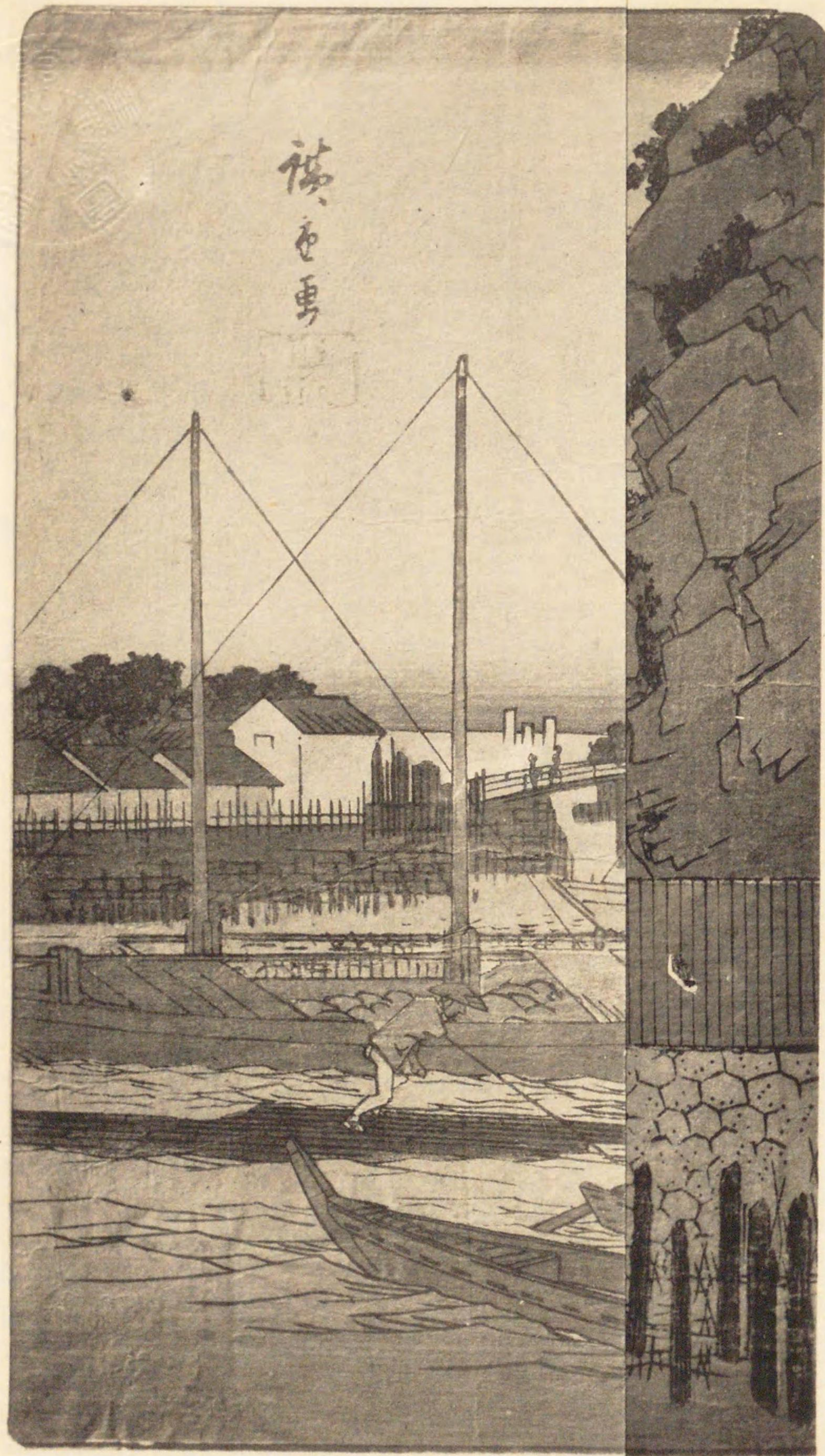
十五日〇嘉永六年(略)

一荷船之外、大船停止之御法令ハ處方今之時勢、大船必要之儀ニ付、自今諸大名大船製造致シハ儀御免被成ハ間、作用方並船數共、委細相伺、可受差圖旨、被仰出ハ、尤右様御制度御變通被遊ハ、畢竟御祖宗之御遺志御繼述之思召

江戸湊(一) 鐵炮洲

東京市役所所藏

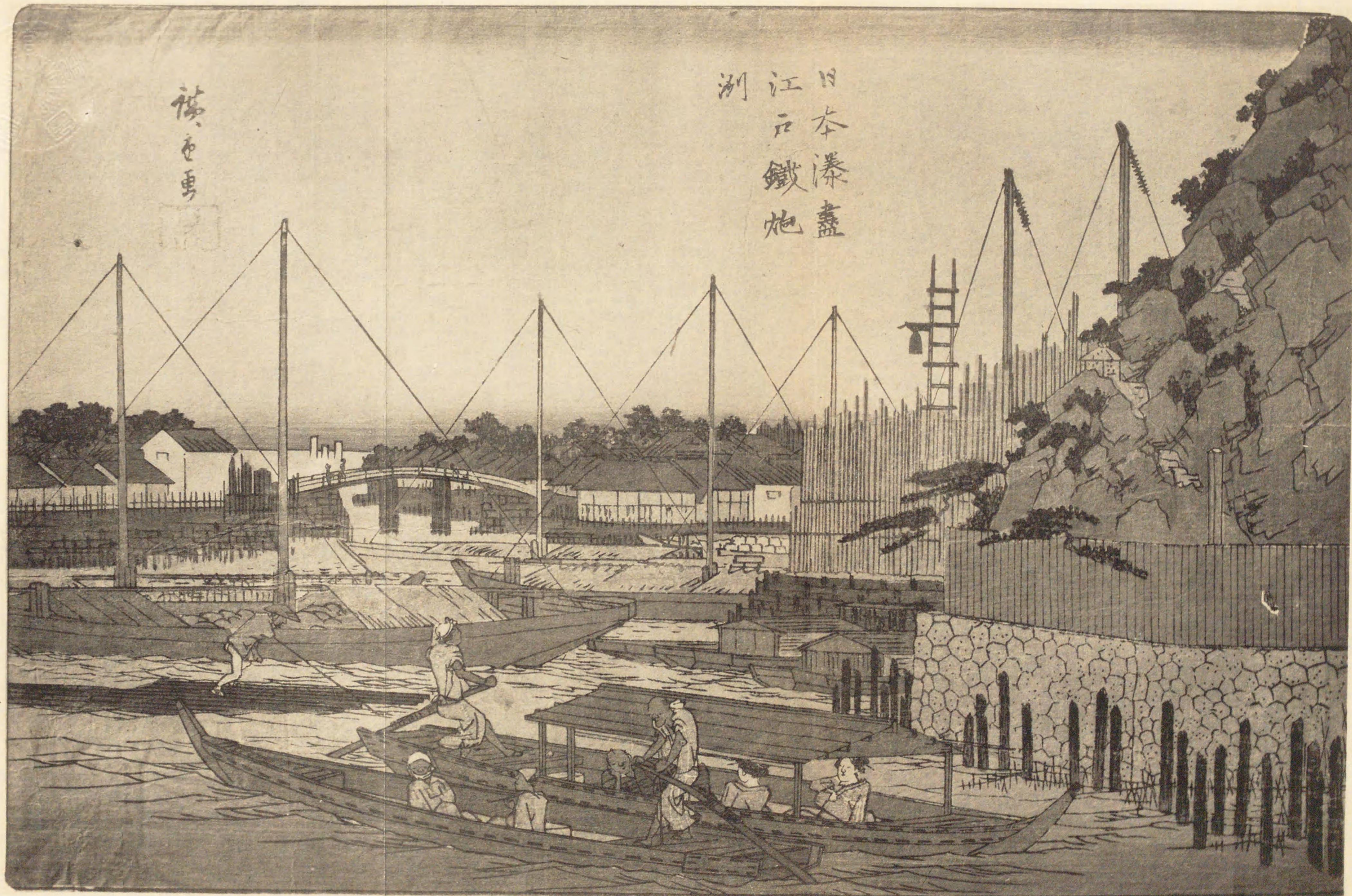
歌川廣重畫ク所。嘉永安政頃ノ實況ヲ見ル可シ。



横手町

日本漆
江口鐵
炮

廣
也
勇

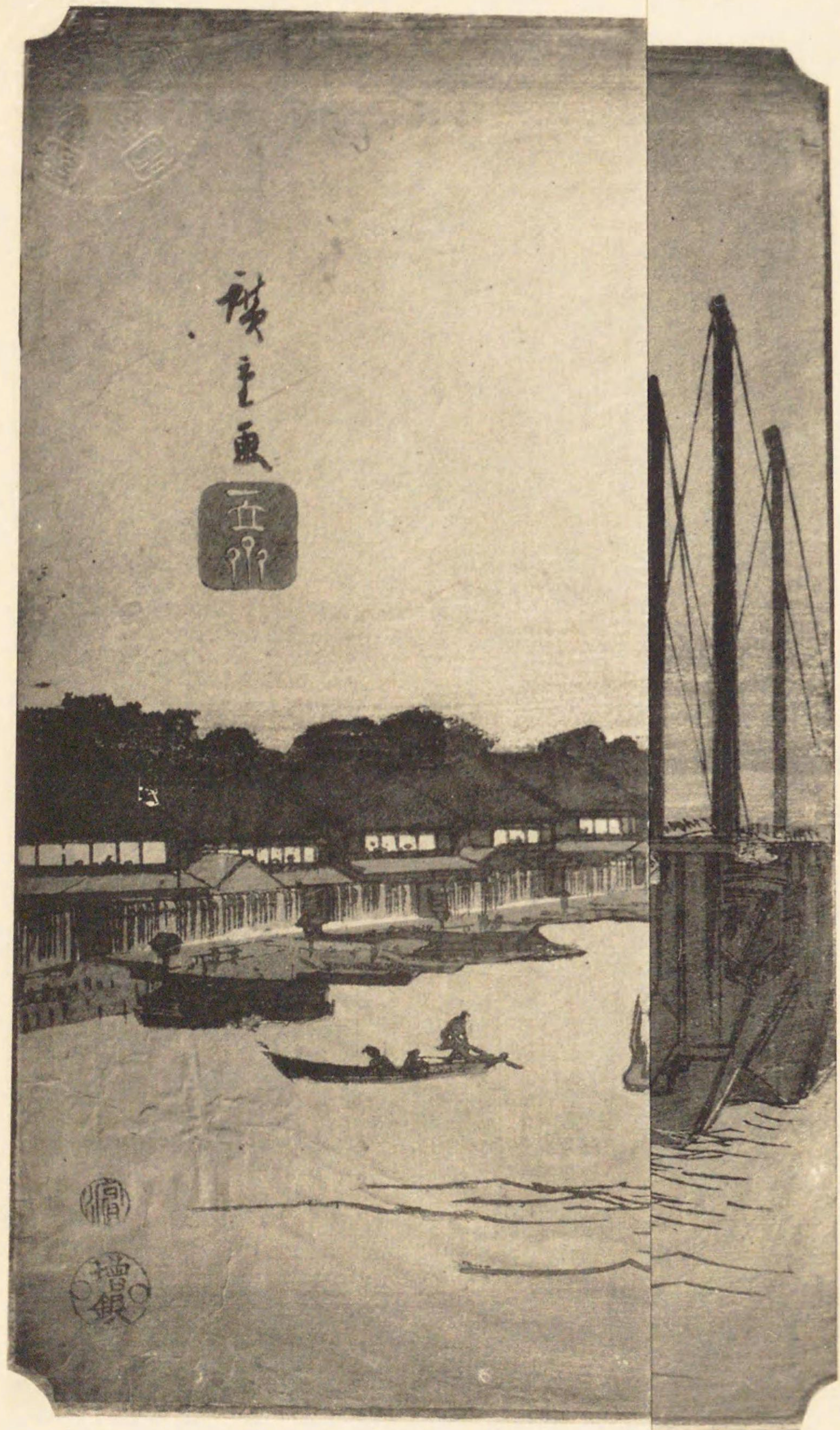


歌川廣重畫々所。

江戸湊(二)

佃島

東京市役所所藏



廣主魚

五州

偏

增銀

加銀

...

東都名西
佃嶋深川

廣主魚



海岸防禦令

海岸防禦令
事蹟

被仰出_レ事に_レ間邪宗門御制禁等之儀は彌以加先格相守取締向別て嚴重に可被相心得_レ也。

右之通萬石以上之面々被仰出_レ間萬石以下之面々にも爲心得可被達_レ也。

廿六日戊辰_年○嘉永六年(紀元二五一一)
○九月○戊辰三正綜覽。府内海岸ニ邸宅ヲ有スル者ニ

命シ、外寇防禦ノ手當ヲ爲サシム。○外國雜件。

海岸防禦令 外國雜件ニ據ル。

丑(○嘉永六年)九月廿六日阿部伊勢守殿御渡候御書付寫

大目付に

近來異國船度々近海に渡來致し、内海に乘入_レ儀も有_レ之に付而之、海岸通り屋敷有_レ之面々、地理之應、防禦手當之儀、銘々心一杯之被申付、場所之寄炮臺等取建_レ儀も、勝手次第可被取計_レ也。尤委細繪圖面等を以被相伺得差圖_レ上、取計可被申_レ也。

右之趣、海岸屋敷有_レ之面々に可被達_レ也。 九月

慎徳院殿御實紀ニハ、左ノ如ク見ユ。

一、年表是月_年○嘉永六年八月。より松平薩摩守_{○島津}齊彬。芝田町藏屋敷に願に依て海中に新

幕都時代ノ港灣

規築出す。

但、海防手當之爲臺場と云。

十一月二日癸卯

○嘉永六年(紀元二五一三年)○癸卯(三正綜覽)

大船建造用掛ヲ任命ス。○温恭院

殿御實紀。嘉永明治年間錄。日本海運史。

大船建造用掛任命 傳フ、

二日 ○嘉永六年十月

一、

御勘定奉行

石河土佐守

○政平

松平河内守直○近

御目付

堀織部

○利忠

竹内清太郎○保徳

御勘定吟味役

右大船並御製造御用被仰付之。

——温恭院殿御實紀

同 ○嘉永六年

十一月二日、大船御製造に付、用掛り左の通り仰付らる。御勘定奉行石河土佐守

松平河内守堀織部、竹内清太郎等あり。以下畧之。

廿二日 ○安政二年二月。御軍艦鳳凰丸品川海ニ著ス。

——嘉永明治年間錄

嘉永六年

覺

一、大船其外御船製造方之儀、大要左之通可被相心得也。

一、大船之儀、水戸殿家來に申達、雛形も出來之付、右之者に引請製造被仰付也。積且浦賀表之ありて、此節造立被仰付也。御船之儀も、出來之上、當地に取寄役々見分致し、是又數艘製造可被仰付也。

一、蒸氣船と、松平薩摩守○島津家來、江川太郎左衛門○英手ニ附、先づ御試之ため、壹艘造立被仰付也。間、右出來之上、數艘製造可被仰付也。

一、押送形御船之儀、是迄向井將監○正道御預、海船修行と唱ひ押送形一艘之外

無之、尤外組にも壹艘宛製造御預被仰付也。積、相達置也。得共、差向非常御備、且

大炮船打調練等之ため、堅實之御船、早速製造被仰付也。間、船形見込等御鐵炮

方打合、早々取調申聞也。様御船手は申渡也。之付、右申立之趣を以、數艘製造可

被仰付也。一體右蒸氣船等出來也。御手厚之儀也。得共、製造方も大造之

儀之付、時日も相懸り可申、其上乘馴也。間合も有之、急速相整申間、鋪夫迄更之

御備船無之也。如何にも御手薄之儀也。有之、押送形も早速之も出來、大炮

打方も相成也。趣之付、先づ押送形も堅材を以、丈夫之打立、差向御備相成

の様可被心得い。

一、異製端船之儀と、當時松平土佐守小人中濱萬次郎儀、異國より送越い節乗参りい船、長崎表より取寄、同所之罷在い。船大工をも呼寄い間、右船形之倣い、製造い様可被取計い。

一、内海御臺場附御船之儀と、何れ右場所御備向引請之者可被仰付い間、右之面々より申立い次第も可有之哉之付、船形等見込を以製造可被仰付い。右之通大小御船、向々に引分、一時之御製造被仰付い間、其方共儀と諸手之御用都引請相心得、向々申談、諸事差支之儀無之様厚く勘辨致し、可被取計い。且又惣體御船員數之儀と、海防懸一同いも申談、得と取調可被申聞事。

海禁雜記○通航一覽續輯收。

寅（考）○安政元年十一月廿六日、伊勢守殿御直御渡。

評定所一座

大目付

道中奉行

御目付

御勘定吟味役

石河土佐守（○政平）

松平河内守（○近直）

岡田利喜太郎（○忠養）

五拾間形大船御製造之儀之付ふと、去年來前中納言殿御直之御沙汰も有之、私共之において、是非御製造方可然と追々相糺、木積取調候處、帆柱を除き十六萬兩程も可相懸當り有之、御同家之被取調い方と、拾壹萬兩餘之を買上出來い由、尤楠材等と、寺社木之無之いふと、大材揃兼い間、相當之直段を以て、伐木差支無之様觸流有之い様にと之申立可有之、猶又此度町人共へ取調被御申付い由之、別冊御下之有之い得共、是又同様之趣意之、楠材之儀と、右様之も不仕いふと、相整申間敷候得共、右と寺社奉行進退、道中奉行掛り場よも御座い間、右を御尋之上、御勘辨御座い様仕度、私共限り觸流い難仕、右大船帆柱、帆桁、銅鐵諸色手間等之至る迄相束い得と、いづれ貳拾萬兩程之も可相成、昨年以來之場合、内海御臺場大筒鑄立大船製造等之儀と御急務之付、御出方之無御厭御國力を可被盡と勿論之事之有之、然る處、昨年右御船御製造御評議之頃と、御備筋而已、御取調之處、其以來京都之火災、依ふと、禁裏御造營向之御猶豫難相成、速之御普請被仰出、當夏上方筋地震、猶又此度之地震津浪共、一國一郡之事之無之、東海道上方中國筋甲信、其餘之國々いもおよひ候哉之、いまた確と之難相分候得共、駿府甲府御城廓御建物、久能御宮、其外御普

請之ク所破損夥敷、其上諸家多數城々も大破之趣ニ相聞、就テ御普請並、拜借宿村御救御手當、莫大之金高、右ニ何程ニ可至哉見留も無之、去年來臨時御出方之内ニも御代替内海御臺場大筒鑄立京都御造營等、いつれも一廉而已ニ亦も莫大之金高ニ有之、一體平常之御取賄御收納ニ亦も年々多分之御不足、彼是御繰合を以御差支無之様取計候折柄、一時ニ口々金高追日御出方次第ニ折重り、實以當節之處痛心仕候儀ニ有之、大船之儀も松平薩摩守へ引受製造被仰付候分貳艘、阿蘭陀より御取寄可相成分貳艘、是計ニ亦も餘程之御出方ニ亦御國內之儀ハ何様ニも差延、御備向相立候様仕度儀ニ候得共、何分難欠臨時口々差湊候事故、御勝手御繰合之取計方も無之、御備器御出來相成候とも、其事ニ臨み疲弊およひ候テ、徒法と相成可申、併近年打續候災變を以て勘辨仕候得テ、御平用筋之儀ニ、分外ニ御省略を被盡、御備筋之儀ニ、如何様とも精力を盡し、御全備相成候様仕度儀ニ付、五拾間御船之儀も、是非御出來相成候様仕度、此程中勘辨仕候得共、差向御入用筋御繰合見据附兼實々心配仕候。尤年割御普請と申こと、連々ニ木寄等致し、終ニ御製造相成候様御處置も相成候ハ、御繰合も出來可仕哉。夫是御出方之程、厚御賢考被

成下候様仕度於私共ニ、全御船御製造掛之場合を以申上候間、掛リニ無之同役吟味役へも、御出方之御繰合御尋之上、御英斷之程奉願上候。依之此段申上候。以上。

寅十一月

以書附奉願上候

今般大船御製造被遊候ニ付、楠材四萬本餘御入用ニ付、別紙之通取調申候。尤右楠材之儀、昨丑年中、從公邊伐木御停止被仰出候間、自力ニ亦伐出兼申候ニ付、御用向被仰付候ハ、何卒豆州相州駿州遠州右國々へ、寺社木ニ至る迄相當之直段を以て伐木ニ相成候様、其向々へ御觸被下置度奉願上候。寺社木ニ無之候テ、中々大材揃兼申候間、此段奉願上候。尤莫大之木數ニ付、精々御直段之儀ニ相働き、尺ハ壹本ニ付金貳兩三分貳朱ニ亦奉、上納度、且又先達亦申上候。楠木御入用ニ候ハ、是又出精仕、尺ハ壹本ニ付金壹兩壹分ニ奉、上納度、右兩様共被仰付候ハ、難有奉、存候。此段偏ニ奉願上候。以上。

嘉永七年寅七月

雲林院長右衛門 印

平岡伊兵衛 印

大船御製造御役所

— 外國事件書

嘉永六癸丑年九月十八日、從來荷物の外、大船停止なりしが、當今大船必用の時勢あるにより、諸大名に大船製造をゆるされ、かつ用法船數とも具に言上すべきむね、萬石以上の面々に令せらる。同年十月晦日、水戸前中納言齊昭卿異船の雛形を呈進せらる。同年十一月二日、御目付堀織部に大船製造の御用を命せられ、また製作の大意を令せらる。今年浦賀にをいて三本橋の大船を造らしめられ、鳳凰丸といふ。安政元年甲寅年この御用奉し輩に賜物あり。

— 通航一覽續輯

嘉永六年浦賀に於て大船を造らる。三本帆にして、凡長二十間幅五間といふ。大炮十挺、据、人數百人乗、帆は中黒、日の丸の大四半を立、船は赤くして中黒なり。翌年成つて御褒美あり。

政府邦製諸船一〇節

— 某漫筆一〇通航一覽續輯收。

船名	船形	幅	長	石	數	造年	造地
鳳凰丸	バルク					安政元年 五月	相模州 賀慶應二 號豐島形

年月於石川島改造、

— 海軍歴史

鳳凰丸

本圖略ハ、鳳凰丸ノ圖書ヨリ撮影シタルモノナリ。徳川幕府ハ、嘉永六年(西曆千八百五十三年)九月大船製造ノ禁ヲ解キ、安政元年(西曆千八百五十四年)五月相模國浦賀港ニ於テ、外國船ニ模擬シ、長二十二間幅五間二橋ノ巨船ヲ造ラシム。即チ鳳凰丸ニシテ、徳川氏カ大船製造ノ禁ヲ解キテ以來製造シタル西洋形船ノ嚆矢ナリ。

— 日本海運史

寅(○嘉永七年)正月廿六日御向前方被遣候。對馬守に便之節申遣。

寅正月廿六日 池田播磨守承之。

一覽仕候。 立田岩太郎

松越藤助

村垣與三郎

松井左衛門

石河内守

堀河内守

向井織將

櫻井清太郎

竹内太四郎

伊勢守殿

町奉行に御斷

幕府時代ノ港灣

海船造並押送船製造御用之付、深川安宅御船藏御構内小屋場取建ハ間萬一風烈敷出火之節、町人足消防之儀、町奉行ハ被仰渡可被下ハ以上。

寅正月

異國船渡來一件

内海警備部

十四日乙卯○嘉永六年(紀元二五三三)年十一月〇乙卯、三正綜覽。彦根江國近城主井伊直弼部頭掃ノ相摸國警衛ヲ免シテ、羽田大森武藏原郡ヲ防禦セシメ、若松代國城主松平容保肥後守ノ安房國上總國警衛ヲ免シテ、内海第二砲臺ヲ守備セシメ、忍武藏國城主松平忠國總守下ノ安房國警衛ヲ免シテ、内海第三砲臺ヲ守備セシメ、川越武藏國城主松平典則丸誠ノ相摸國警衛ヲ免シテ、内海第一砲臺ヲ守備セシム。同時ニ相摸國警衛ヲ熊本肥後國城主細川齊護越中守・萩長門國城主毛利慶親大膳ニ、安房國上總國警衛ヲ岡山前國備城主池田慶政藏頭内・柳河後國城主立花鑑寛左近將監ニ命ジ、武州本牧久良岐郡警衛ヲ鳥取因幡國城主池田慶徳相摸守ニ命ズ。外國事件書。

内海警備部

内海警備部署

内海砲臺築成ニ依リ、警備ノ部署ヲ定ム。

十一月十四日○嘉永六年。

井伊掃部頭直弼

異國船渡來之節、内海御警衛被仰付候間、羽田大森邊ハ人數差出防禦可被致候。依之相摸國御備場御用之御免被成候。爲代松平大膳大夫ハ被仰付候間、可被得其意候。尤場所代リ合相濟候迄ハ、諸事是迄之通可被相心得候。

松平肥後守保科容保

異國船爲防禦内海御臺場御取建之付、内海御警衛被仰付、二之御臺場其方ハ御預被遊候。右御臺場並据付ハ大炮共、西洋法之被仰付候間、右之心得を以、大炮打方其外兼不致習練候様可被申付候。且又松平下總守松平誠丸も内海御警衛被仰付候間、可被申合、依之安房上總國御備場御用之御免被成候。爲代立花左近將監ハ被仰付ハ間、可被得其意候。尤場所代リ合相濟ハ迄ハ、諸事是迄之通相心得、内海御臺場ハ當地居合之人數を以御警衛可被致ハ、右之付不之彼是用途も相嵩可爲難義旨被思召候之付、金壹萬兩被下、芝金杉松平相模守上ヶ地有來家作共御臺場附爲陣屋被下ハ、委細之義ハ、御臺場御普請掛リ之

幕府時代ノ港灣

面々へ可被談候。

松平下總守國〇忠

異國船爲防禦内海御臺場御取建之付、内海御警衛被仰付之、三之御臺場其方
に御預ヶ被遊候。右御臺場並据付に大炮共、西洋法被仰付候間、右之心得を以、
大炮打方、其外兼ち致習練候様可被申付候。且又松平肥後守松平誠丸も、内海
御警衛被仰付に間、可被申合ひ、依之安房國御備場御用、御免被成候。爲代松
平内藏頭に被仰付候間、可被得其意。尤場所代り合相濟候迄、諸事は迄之
通相心得、内海御臺場、當地居合之人數を以、御警衛可被致候。右之付、彼
是用途も相嵩可爲難義、被思召に付、金壹萬兩被下候。委細之義、御臺場
御普請掛り之面々へ可被談候。

別段達

松平下總守

内海御警衛被仰付候之付、御臺場附爲陣屋敷被下處、先年御備場御用被
相勤候之付、深川越中島中屋敷被替下候事之候間、此度、屋敷不被下候。
右於御黒書院溜、三度之和泉守申渡書付渡之、老中列座。

松平誠丸〇典
名代 松平日向守(〇直春)

異國船爲防禦、内海御臺場御取建之付、内海御警衛被仰付壹之御臺場、其方、
御預被遊候。右御臺場並据付に大炮共、西洋法之被仰付に間、右之心得を以、大
炮打方、其外兼ち習練致候様可被申付候。且又松平肥後守松平下總守も、内海
御警衛被仰付に間、可被申合ひ、依之相模國御備場御用、御免被成候。爲代細
川越中守に被仰付に間、可被得其意候。尤場所代り合相濟候迄、諸事は迄之
通相心得、内海御臺場、當地居合之人數を以、御警衛可被致候。右之付、彼
是用途も相嵩可爲難義、被思召候之付、金壹萬兩被下、高輪村松平駿河守〇定
保。
上ヶ地並抱屋敷有來家作共、御臺場付爲陣屋被下候。委細之義、御臺場御普
請掛り之面々へ可被談候。
右於御白書院縁、同人申渡書付渡之、列座無之。

細川越中守〇齊
護。

相模國御備場御用、井伊掃部頭松平誠丸兩手之、相勤に處、内海御警衛被仰
付に付、向後其方並松平大膳大夫兩手引請被仰付候。安房上總國之方も、松
平内藏頭立花左近將監兩手引請之被仰付に間、得其意、諸事可被申合ひ、依之

相模國之内村々御預所可被仰付候間、政事向私領同様可被申付候場所請取方、其外之儀ハ猶可被相伺候。

松平大膳大夫慶親○毛利

相模國御備場御用、井伊掃部頭松平誠丸兩手之ヲ相勤候處、内海御警衛被仰付之付、向後其方並細川越中守兩手引請之被仰付也。安房上總國之方も、松平内藏頭立花左近將監兩手引請被仰付候間、得其意、諸事可被申合也。依之相模國之内村々御預所可被仰付候間、政事向私領同様可被申付候。

松平内藏頭慶政○池田

安房上總國御備場御用、松平肥後守松平下總守兩手之ヲ相勤也處、内海御警衛被仰付候間、向後其方並立花左近將監兩手引受之被仰付也。相模國之方も、細川越中守松平大膳大夫兩手引請之被仰付也間、得其意、諸事可被申合候。依之安房上總國之内村々御預所可被仰付候間、政事向私領同様可被申付也。場所請取方、其外之儀ハ猶可被相伺也。

立花左近將監寬○鑑

安房上總國御備場御用、松平肥後守松平下總守兩手之ヲ相勤也處、内海御警

衛被仰付候間、向後其方並松平内藏頭兩手引請之被仰付候。相模國之方も、細川越中守松平大膳大夫兩手引請之被仰付也間、得其意、諸事可被申合也。依之安房上總國之内村々御預所可被仰付也間、政事向私領同様可被申付也。場所請取方、其外之儀ハ猶可被相伺候。

松平相摸守慶德○池田

異國船渡來之節、武州本牧御警衛被仰付候。防禦之手筭、兼之嚴重可被申付置也。右於御黒書院溜、列座同前、同人申渡、書付渡之。

細川越中守

相模國御備場之義、其方並松平大膳大夫兩手引請被仰付也之付也、持場割合等之儀ハ、追之可相達也。防禦筋之義ハ、萬端御委任被成也間、見込之趣も有之也、可被申立候。且又來寅年參勤、來々卯年御暇割合被仰付之外、三家同振合被仰渡候。

同人

相摸國御備場御用被仰付候之付、長崎御備向心得方之義、取調相伺様可被致事。

右於伊勢守宅家來呼出申渡之。

松平肥後守

安房上總國御備場御用御免被成之付、同國之内領知之分、追々村替被仰付之可有之。且又場所代り合ひ節、是迄据付有之候公儀御筒之分、其儘差置、自炮之分、勝手次第引取様可被致。其外之義、取調可被相伺候。

外國事件書 ○温恭院殿御實紀其他同。

十八日 ○嘉永六年十二月。

立花左近將監

此度御備場御用被仰付之付、彼是用途も相嵩可申、其方儀之同様御用被仰付之面々より、高低之儀、別可爲難儀、与被思召之付、格別之譯を以、金一萬兩拜借被仰付之。

十八日 ○安政元年三月。

一、金三枚。時服二。

御勘定組頭 高橋平 作 ○勘定一人、吟味方改役並一人、御目付一人、略。

右、相摸安房上總國御備場引渡爲御用罷越之付、被下之。

——温恭院殿御實紀

鑑寛 從四位上少將。左近將監。飛驒守。幼名淳次郎。次郎 ○立花。

十一月 ○嘉永六年。命安房上總沿海之警衛、且管轄上總國內一萬千石有餘之地。即發戍兵六隊屯營于上總富津。

——立花柳家譜

同年 ○嘉永六年。十一月十四日老中連名ノ奉書ニ付、名代登城セシメ、品川沖一ノ臺場ヲ預ケラレ、相摸國海防ハ免セラレ、用途モ嵩ミ難義タルヘキ旨ニテ、金一萬兩ヲ賜リ、臺場付トシテ高輪へ陣屋地ヲ賜ル。

——松平橋家譜

同年 ○嘉永七年。四月朔、相摸國觀音崎鳥ヶ崎龜ヶ崎猿島砲臺場ヲ掛リノ幕吏へ引渡ス。

十四日 ○嘉永六年十一月。彦根若松 松平肥後守容保。 川越忍四侯ノ相房總守衛ヲ止メ、熊本萩二侯ニ、安房上總ヲ岡山 松平内藏頭池田慶政。 柳川 立花飛驒守鑑寛。 二侯ニ、本牧ヲ鳥取侯 松平相摸守池田慶徳。 三ヲ忍侯ニ命シテ、守衛セシム。

——明治前記

〔参考〕 陸軍歴史ニ

松平肥後守外兩家々來共相伺候内海御臺場御引渡心得方之儀評議仕候趣申上候書付

先達被成御下候松平肥後守松平下總守松平誠九家來共申上候内海御警衛被仰付御臺場御渡被下候之付亦兼心御方相伺度旨之御條書を以相伺候趣一覽勘辨仕右三家共同様之申立之付箇條毎之取調左之申上候。

一、初ケ條近海之勿論遠洋之亦惣之異國船相見候節浦賀奉行並相房總御固の四家より御届出候ハ、急速御達可被下哉尤退帆の節も同様御達可被下哉之旨。

此儀浦賀奉行等より御届出候ハ、早々三家へ御達相成候可然右御達方の儀ハ御登城中之候ハ、御目付より相達御登城後之候ハ、御宅より御達御座候儀と奉存候。

一、二ケ條目異國船渡來之御達御座候ハ、其の節手船を以て御臺場へ注進ハ、たし候亦、時刻延引之相成候間陣屋より號炮又ハ打揚等之御相圖

いたし候亦不苦儀之可有御座哉之旨。

此儀號炮之格別打揚之儀之元來花法之御實用之御臺場請持之向之御相用候儀之相當とも難申號炮迎も風波烈敷節坏聞誤り之程も難計且五ケ條目打拂之節之合圖之御積取調候之付右と混雜いたし候亦不可然義之付渡來之注進之、手船を以通達いたし尤常之異り候船印相用夜分ハ蘭ッフトコッセルと唱候火を竿頭之焚船印之代り之相用候ハ、渡來注進と申義ハ、速之相分可然と奉存候。

一、三ケ條目内海へ乗入候節見掛次第壹貳三の御臺場互之號炮又ハ打揚を以相圖いたし陣屋之亦右相圖を受候て不苦儀之可有御座哉之旨。

此儀貳ケ條目之申上候通之次第之付號炮等ハ不相用御臺場より御臺場迄之船路僅之儀之付早船之亦互之注進いたし候方可然哉。

一、四ケ條目若御臺場近邊ハ乗付又ハ御臺場より内海へ乗入總て亂妨體之舉動之及ひ候節如何取計可申哉兼御標準と相成ハ様御條目御立被置被下度旨。

此儀御臺場近邊ハ近付候ハ、乘留船差出精々相諭引戻可申其上之御

も亂妨及候節ハ格別縦令御臺場より内之方へ乗入候共、彼より兵端を不、開内ハ御差圖無之打拂ハ候儀ハ見合、尤手後無之様打拂ハ之用意ハ可致置旨被仰達可然哉。

一、五ヶ條目、異國船之舉動ニ寄、若俄に打拂ハ被仰付候節ハ、出張之御役人より差圖可有御座哉。右ニ付、亦と號炮等ニ亦爲御知御座候哉。又ハ家來共御呼出之上、御差圖可有御座哉。左候ハ、彼是時刻延引ニ相成打拂之期も相後れ、御不都合ニ可有御座候間、兼亦出張之場所被御定置、右之場所ニ亦號炮を以打拂之御相圖御座候様仕度、其節と御臺場ニ亦御相圖を請候様仕度旨。

此儀打拂之場合ニも至リ候ハ、何れ持場々々へ監使として御目付御使番之内可被差遣候得共、俄ニ打拂と被仰付候節ハ、御差圖之場所濱御庭等へ御遣役置、同所ニ亦號炮放發いたし候へと、兼亦申合置候處へ大旗相立夜分ハ火を以相示し、御臺場ニ亦と發炮よて受不致、晝と旗夜と火ニ亦受いたし、尤早船ニ亦も通達いたし候方と奉存候。

一、六ヶ條目、漁船並ニ遊興之船不近付様爲取締、御臺場前左右岸より壹町程も相離、杭御打廻被下度旨。

此儀御臺場ニ寄、落筋ハ掛リ居リ候ニ付、壹町程も杭打渡候亦と、通船不便又と破船之憂も難計、右様ニ無之候とも、敢て取締ニ拘リ候程之儀も有之間敷遊興之船等御臺場近邊へ船繋いたし候儀も候ハ、相制し候迄ニ亦、差支も有之間敷と奉存候。

一、七ヶ條目、御臺場内ニ遠見番所並假之遠鏡臺成とも御組立、御渡被下候様相成間敷哉之旨。

此儀内海限リニ亦、大洋を見渡候場所も無之、遠見所望遠鏡臺等之儀ハ御取建無之積ニ候得共、銘々所持之遠眼鏡ニて遠を窺候儀ハ、勝手次第之事ニ候間、其段御達相成可然奉存候。

一、八ヶ條目、御臺場當番之もの兵糧持參可仕候へとも、萬一風波等之節、兵糧運送方差支候間、其節之用意迄ニ、小分ニ焚出し小屋御出來相成申間敷哉之旨。

此儀番士休憩所脇ハ手輕ニ焚出所御取建之積ニ付、其段被仰渡候方と奉存候。

一、九ヶ條目御臺場附御船御渡被下候事可有御座哉之旨。

此儀相房總御警衛被仰付候節も御渡無之。此度迎も同様之儀之付御渡無之積之可然奉存候。

一、十ヶ條目御臺場之可年々兩三度宛御筒拂仕不苦義可有御座哉。左候ハ其節々日限之御届仕候而已之可宜敷可有御座哉之旨。

此儀年々兩三度位御筒拂いたし候様之可打前修練も相届不申。左候迎玉込發炮度々いたし候ハ諸國之大船繋り居候場所其時々船拂いたし候ハ御府内諸色之響き之可相成候段差支之程も難計乍去御固め之家來共業前不熟之可御臺場御取建之詮も無之。不容易儀之付御筒拂之儀ハ諸廻船迷惑不仕仕法篤と勘辨之上猶取調可申上候間追テ御沙汰有之候積被仰渡可然哉。

一、十一ヶ條目大炮並車臺を始都御引渡之相成候個所諸色共損所出來候節ハ御修復可被成下哉之旨。

此儀大炮車臺等御道具の類ハ損候ハ御修復被成下其餘建物を始炮臺等ハ小破之分手限取繕。大破之節ハ御修復被成下候方可有御座哉。

右評議仕候趣を以て肥後守外二家家來被仰渡可然哉之奉存候。左候ハ御警衛向心得方等之儀ハ委細太郎左衛門より申談候様可仕候間其段も被仰渡可然奉存候。依之御下被成候書付之通返上仕此段申上候。以上。

寅○安政
元年七月

海防掛
大目付

御目付

松平肥後守外兩家々來共相伺候内海御臺場御引渡後心得方御評議之付存付之趣書取

一、貳ヶ條目號炮之儀左之申上候通之相成候ハ放發仕候とも左迄懸念有之間敷全ハ御臺場詰之者共陸地銘々屋敷之方之爲心付候迄之儀ハ候へ共御取調之趣之可も可然候。尤手船之可通達いたし候節兼テ申合常之異り候船印相用可申候。然る上御臺場へ通達船著岸不致内異船渡來之儀之顯然相分可申候。勿論夜分ハ船印之替り、リフトコトコルを竿頭之焚漁火と不紛様いたし可申事。

一、五ヶ條目俄之打拂之節號炮打揚を以て合圖いたし御臺場之可も同様號炮打揚を以受いたし候儀ハ可然候間打拂之御差圖之號炮放發仕兼

亦申合置候處へ大旗相立夜分の火を以て相示し、御臺場之亦、發炮之亦受不致、晝と旗夜分の火之亦受いたし候方可然、勿論、船之亦も可申通事。但、炮發而已之亦、萬一聞誤り之程も難計、旗と兩様相成候へ、其懸念も無之候。

甲下ケ札

御書面之趣可然哉之候へ共、霧深き節ハ、如何なる大旗之亦も見分り不申、夜分大火に候ハ、見へ可申候へ共、是以籌或も漁火之紛敷、炮發四五聲互之打放候ハ、懸念も有之間敷哉と存候。

乙下ケ札

御下ケ札之趣之亦も、大風波立等之節ハ、炮聲をも聞誤り可申、夫ゆへ舟之亦も可申通旨、本文之認置、且打揚と花法に齊しき品に付、實用專一御取建之御臺場之ハ甚相當不任様奉存候。火之儀漁火不紛仕方如何様之も出来いたし候。

一、七ヶ條目望遠鏡臺と、御取建と無之候得とも、銘々所持之遠鏡にて遠を窺候事ハ勿論之事之候。

一、十ヶ條目筒拂之儀、一ヶ月兩三度つゝ空炮打放候程之儀之亦、中々以

孰練仕間敷、中り打之儀と、大森町打場之亦も稽古出来譯之ハ得共、凡打狎候丁場と打心も宜く、自然中りも宜きものに付、平常御臺場之於て玉込稽古罷在ハ、萬一之節、格別耽と手覺有之可然ハ、暫之間ハ度々玉込稽古いたし、追ハ、度數相減ハ様御達之方と奉存ハ、勿論相詰ハ番士共ハ、打方手前稽古日々仕ハ様被仰渡ハ方と奉存ハ。

丙下ケ札

御書面之趣御尤之御座ハ、得共、品川沖之儀ハ、東都第一之湊之儀、諸國之大船繫居ハ場所之付、玉込炮發之度々船拂いたしハ、而も、御府内諸色之響とも相成、逆も難被行儀之付、玉込之儀も、一ヶ年兩三度之積、其餘ハ、御書面之通り之亦可然ハ。

丁下ケ札

御下ケ札之趣之亦も、玉込發炮度々いたしハ、諸國大船繫居ハ場所、其の時々船拂いたしハ、御府内諸色之響も相成、差支も難計との儀、右ハ船拂之いたし方之寄、敢る諸色之直段之響きハ程之儀も有之間敷哉と奉存ハ。且廣大之御入用相懸り、御臺場並之大筒玉藥等迄御出来ハ、とも、番士共炮術不熟之

あハ萬一之節御用立方甚だ懸念も仕ハ間、本文之通り申上ハ儀之御座ハ。

右と存付書面之通御座ハ以上。

寅○安政年七月

江川太郎左衛門○英

附記
警戒

〔附記〕警戒

十二月廿三日○嘉永六年

井伊掃部頭○直

長崎表ハ魯西亞船再渡之付萬一浦賀ハ渡來申間敷之淺無之其節ハ内海御警衛之義兼ハ相達置候義も有之ハ得共唯今之處之ハ羽田大森邊之差置是迄之御備場嚴重之御警衛可被致ハ事。

- 松平加賀守○前田 松平越後守○齊
- 松平越前守○慶 松平阿波守○賀
- 松平讃岐守○賴 松平隱岐守○定
- 堀田備中守○正 松平兵部大輔○慶
- 松平越中守○齋 酒井雅樂頭○忠

異國船近海ハ渡來之節時宜次第俄ニ内海御警衛之ヲ免當地有合之人數出張被仰付ハ儀も可有之ハ此段爲心得先内々申達ハ事。

右伊勢守宅ハ銘々家來呼出書付渡之

——外國雜件

廿七日○嘉永六年非常ノ時海岸近傍ノ市民ヲシテ立退シムヘキノ旨ヲ町名主ニ達ス。

異國船近海ハ渡來シ萬一羽田邊沖合御固の方烈シキ節ハ品川十八ヶ寺門前より芝金杉最寄迄海岸附の町々住居の者共可立退との御差圖の節ハ兼て所縁の者方へ立退ハ分ハ立退先承置其餘立退可申心當無之者ハ馬喰町小傳馬町三ヶ所旅人宿へ一先立退キ同所にて日數も相懸リハハ夫々御差圖の上可爲立退ハ但立退ハ砌雜作向取片付又は家作の内大道具持運び候てハ混雜致シハ間一町の内手明壯年 者は相殘シ置可立退ハ店々其日稼の者屋敷等相勤町内守り方に取掛リ其外都て夫食に差支ハものへハ町會所より握り飯を配リ被下ハ間食用懸念致間敷ハ右ハ海岸附町々名主限り極密相心得可罷在ハ萬々一小前の者共へ相洩レ猥に混雜恐怖不致様可相心得ハ

——嘉永明治年間錄

海岸防禦掛
増員

十二月廿八日戊戌○嘉永六年(紀元二五一年)○戊戌(三正綜覽)老中ノ海岸防禦掛ヲ増員ス。○御觸留。

海岸防禦掛
増員事蹟

海岸防禦掛増員 御觸留ニ、

嘉永六癸丑年十二月廿九日内藤紀伊守殿御渡

和泉守○松平乘全 伊賀守○松平忠優

海岸防禦筋之御用向近來多端相成ルニ付伊勢守備前守申合取扱ル様被仰出ル。右之趣相達可然向々之可被相達ル事。

嘉永六癸丑年十二月晦日同斷

海岸防禦筋之御用向近來多端相成ルニ付和泉守○松平乘全 伊賀守○松平忠優 儀向後伊勢守○阿部正弘 備前守○牧野忠雅 申合取扱ル様被仰出ルニ付月番順を立取扱ル間向後諸伺諸届等其心得ニ差出可申ル。尤來月ノ和泉守二月ノ伊賀守三月ノ伊勢守四月ノ備前守相心得ル事。十二月

右之通向々之可被相達ル事。

七年甲寅○嘉永七年(紀元二五二年)○甲寅(三正綜覽)正月十一日辛亥○辛亥(三正綜覽) 亞墨利加

日亞和親條
約締結

合衆國使節彼理再ヒ浦賀○相模國三浦郡ニ來ル。廿八日戊辰○嘉永七年(紀元二五一年)○戊辰(三正綜覽) 亞艦本牧○武藏國久良岐郡 沖ヲ過キテ進ム。二月十日己卯○嘉永七年(紀元二五二年)○己卯(三正綜覽) 彼理以下横濱○武藏國久良岐郡ニ上陸ス。大學頭林健江戶町

奉行井戸覺弘○對馬守 浦賀奉行伊澤政義○美作守 自付鵜殿長銳○民部少輔 儒員松崎滿太郎等命ヲ受ケテ出テ、之ニ接シ、三月三日壬寅

和親條約ヲ締結ス。十三日壬子○嘉永七年(紀元二五二年)○壬子(三正綜覽) 亞艦内海ヲ去テ下田港○伊豆國伊豆郡ニ移ル。五月廿二日庚申○嘉永七年(紀元二五二年)○庚申(三正綜覽) 條約附録ヲ作製ス。六月十日丁丑○嘉永七年(紀元二五二年)○丁丑(三正綜覽) 亞艦下田○伊豆國伊豆郡ヲ退帆ス。○異國船渡來一件。嘉永撰要類集。法規分類大。全。嘉永明治年間錄。温恭院殿御實紀。明治前記。

日亞和親條
約締結事蹟

日亞和親條約締結 外交篇ニ詳述ス。

寅○嘉永七年(紀元二五二年)○寅(三正綜覽)正月十二日向方へ差遣ス。

和泉守殿○松平乘全 越中守殿○伊藤忠實 右御兩人御宅へ同心兩人使ヲ以上ル。異國船渡來之儀ニ付申上候書付

池田播磨守○頼方

幕府時代ノ港灣

昨十一日未刻浦賀沖口二三里沖合に異國船五六艘渡來致し候旨、昨今廻船間屋共々注進之付、不取敢此段申上候。尤御注進船之儀、去丑年六月中之通手當申付置候以上。

正月十二日

池田播磨守方○賴

(奉)正月十五日夜○嘉永七年○石河土佐守方差越、即刻向方エ本紙爲持差遣ス。

和泉守殿

アメリカ船之儀之付申上候書付

戸田伊豆守○氏榮

伊澤美作守○政義

先刻申上候アメリカ船一艘小柴沖之碇溜ひし候之付、組與力近藤良次佐々倉求太郎並通詞共乗組相尋候處、アメリカワシントン仕立都合十艘内三艘の蒸氣船之有、去十月本國出帆唐國之罷在、同所十二月十六日出帆、今日着之由、右之付御國法申渡引戻可申与掛合候得共、將官之船渡來迄の當地之罷在候趣尤小船等乘廻の決り不仕、御國法に相守候段申置、乗組人數も寡く、大砲□挺据有之、船中一同穩之御座候。外一艘の鎌倉長井村沖龜木と申磯根に乘當候之付、組々之者差遣手當方取計番船其外等之儀の掃部頭方エ申談夫

々手當仕候。外二艘の未々城ヶ島を乗入不申、外船々も明十五日之一同渡來も可仕趣申聞候由、先此段御届申上候以上。

正月十四日

戸田伊豆守○氏榮

伊澤美作守○政義

正月十五日○嘉永七年御沙汰書寫

時服三羽織壹ツ。

林大學頭○健

井戸對馬守○弘覺

鵜殿民部少輔○長銳

松崎滿太郎

同二、同壹。

浦賀表に罷越ひ之付、御暇拜領物被仰付、御席無之ひ間御目見と不被仰付

右於芙蓉間、老中列座伊勢守○阿部弘申渡之。若年寄中侍座。

寅正月十六日和泉守殿御直

覺

林大學頭

井戸對馬守

鵜殿民部少輔

松崎滿太郎

霜都時代ノ港灣

明後十八 曉一同出立可被致事。

廻船問屋 福島屋新五郎 上乘代 瀧 助

右仕立船今廿七日明夕六時出帆本牧迄罷越候處今朝神奈川沖ニ乗留候蒸氣船三艘夕八時過生麥邊沖ニ徒込猶又跡異船二艘夕七半時頃迄徒込五艘共生麥方大師河原邊沖ニ乗留申候小船七艘ニ羽田沖測量致居候を見留御注進奉申上候。

右奉申上候以上。

正月廿七日夜九半時嘉永七年 名主 共

廻船問屋伊坂屋次兵衛代
上乘 次郎七
同 鳥居屋忠助代 幾右衛門

右者今廿八日朝五時過仕立船ニ出帆生麥沖方大師河原沖ニ罷越見張居候處昨日右邊ニ徒込候異船五艘ハ別條無之杉田沖異船一艘晝九時過同所ニ徒込滯船仕都合六艘ニ相成申候且右船々々小船六艘程おろし羽田沖東之方濬通測量いし罷在候を見留御注進申上候。

寅 正月廿八日夜五時過

名主 共

船問屋藤吉船同人代
上乘 政吉
同 佐原屋 惣助

右者昨廿八日九時頃仕立船ニ出帆本牧直ニ罷越候處猿島沖ニ異船一艘滯舟罷在大師河原沖方生麥沖ニ掛異船六艘都合七艘とも相替り候義無御座候尤右異船方小船七艘おろし羽田沖東之方濬通測量致罷在候ヲ見留御注進申上候。

右奉申上候以上。

名主 共

寅 正月廿九日明六時

伊賀守殿荒井甚之丞ヲ以御渡伊豫守受取。
三奉行 覺

年 番
當 番

此度渡來之亞墨利加船浦賀表おるて應接可致等之處浦賀沖ハ波荒ニ船

紺ウシサイ麁服

三十一人

一、音樂方

二十八艘

但十二ホンドカノン拾挺三貫目筒

惣人數四百四拾六人

外ニ解ニ殘ル水夫凡二百人

本牧之方ノ順ニ並船名

一、レキシングトン

ユルヘツト
主役ガラスソソ

但大炮二十六挺

蒸氣

二、スユスケハンナ

フレカツト
主役ブカナン

セチシインナ

但同六挺

同
三、ホウハタン

使節ベルリ居ル

但同八挺

船主エムセ、リユネイ

マセドニア
四、マストネン

船上アアポツト

但、同二十二挺

フレカツト

同
五、ミツセシヘン

主役レ

去丑六月末來ル

同

フアンダリア
六、ワシデリヤ

主役ポーベ

正月十六日入

コルヘツト

但、同二十挺

主役ワック

七、サラトカ

同

二月六日入

主役コンウスボイ

但、同二十挺

同

サウタンボン
八、シヨウツテン

同

正月十四日入

使節座駕船見

但、同六挺

二月廿五日
小府公役人同道一覽いたし候

蒸
一、ボウハタン船

二月廿九日奉行衆御出

二、マサドニアン船

二月廿九日奉行衆御出

三、シスクインネ船

アカナン乗組二月廿六日退帆

霸都時代ノ港灣

東京市史稿
四、サラトカ船

アーダムス乗組三月七日退帆。

二月廿五日 小府公役人同道一覽いたし候。

二月廿二日 下田行三月朔日乗戻ル。

二月廿五日 小府公役人同道いたし候。

二月廿二日 下田行三月朔日乗戻ル。

- 五、コアンデリヤ船
- 六、ミシ、ツピイ船
- 七、サウタンボン船
- 八、レキシト
- 九、レツアテイ

二月廿一日入津。

殘七艘。

魚船問屋

上總國金谷村孫右衛門船
藤屋善次代長

吉

右者昨廿四日朝仕立船ニ出帆仕候處、羽田鼻東之方ニ異船小船二艘參り
測量致居り候ヲ見受、夫々本牧迄罷越見張候處、神奈川異船七艘事替候義無
御座候之付、今朝五時過同所出帆乗戻し參候處、羽田鼻々川口ニ入候際印之
杭ニ白木綿長三尺幅二尺五寸程之幟ヲ高サ六尺程之棒ニ附右棒ニ結付有
之候ヲ見留參り、只今着船御注進申上候。

右奉申上候以上。

二月廿五日暮六時

名主共

魚船問屋

三河屋利右衛門船
上乘仙吉

右者一昨三日朝仕立船ニ出帆神奈川輪々内見張候處、異船八艘ノ事替候
義無御座、昨四日晝四時頃浦賀御印附候船二艘ニ松楨積入神奈川之方ニ寄
候異船二艘目之船ニ右楨御渡積入相成候様子、且又異船小船五六艘程ニ寄
同所地方ヲ測量致候ヲ見請、昨夕刻同所出帆、只今着船御注進申上候。

三月五日

名主共

附札
本文神奈川地方測量之儀ハ、晝時前方夕七時頃迄同所臺南之方里俗淺間下より
小安村邊迄海岸石垣ヲ、海面半道程隔り候處方沖之方ニ測量致し候趣ニ御座候。

伊勢守殿

亞墨利加船不殘退船之義ニ付御届申上ル書付

霸都時代ノ港灣

伊澤美太郎

鶴殿民部少輔

神奈川沖滞留亞墨利加船七艘共、明十三日五時頃出船、下田湊に罷越見置相濟、同所退帆仕、旨使節を申立、尤明日出船之上可申上、以得共先此段御届申上置、以上。

三月十二日

(卷) 寅(○嘉永七年)三月廿一日伊勢守殿御宅ニ以使者進達。寫。

伊勢守殿

小柴沖碇泊之亞墨利加船不殘退帆之儀御届申上候書付

伊澤美太郎

鶴殿民部少輔

小柴沖碇泊七艘之亞墨利加船浦賀表を追々御届申上候通去ル十四日分軍艦追々退帆仕、殘蒸氣船二艘今卯中刻退帆仕候旨、爲警衛差遣置候美作守組之もの見届注進申出候。尤浦賀表を右之趣御届可申上奉存候得共、小柴沖不殘退帆仕候儀を付不取敢此段御届申上候。以上。 三月廿一日

(卷) 寅(○嘉永七年)三月廿四日伊澤作守進達候旨、寫受取、翌廿五日鶴殿民部少輔ニ順達、林大學頭ニハ寫爲持遣ス。

伊勢守殿

亞墨利加船下田湊ニ着船之儀申上候書付

林大學頭

井戸對馬守
鶴殿民部少輔

去ル廿日小柴沖出船仕候亞墨利加船二艘、同廿一日辰刻下田湊ニ入津碇泊仕、同日未刻頃川津沖ニ蒸氣船二艘相見候旨、遠見之者届出、無程同所湊ニ致着船候之付、組與力並通詞乘組應接仕候處、至不穩ニ御坐候得共、尙又番船申付、大久保加賀守、太田攝津守、水野出羽守家來呼出、異船相増候間、其家々格ニ不警衛向無油斷心附候様申談候外、聊別條無之、平穩ニ候旨、昨廿三日夜亥中刻過支配組頭黑川嘉兵衛御徒目付中臺信太郎を申越候之付、此段御届申上候。已上。 三月廿四日

嘉永七寅年六月三日御當番に返之。

對馬守儀、下田表御用相濟、異國船不殘去月廿九日退帆致、以之付、彼地同日直ニ出立、道中無滯、以得之、明後五日着府被致、以旨、被申越、以事

霸都時代ノ港灣

寅○嘉永七年正月十六日松平和泉守殿御直御渡

覺

林大學頭健○井戸對馬守弘○覺

鵜殿民部少輔鏡○長松崎滿太郎

明後十八日曉一同出立可被致事。

嘉永七寅年二月九日松平伊賀守殿御渡の御覺書

町奉行衆
御勘定奉行衆

大目付に
覺

亞墨利加人の明十日應接有之に付船中にて祝炮數發打放し旨申立に付右炮聲承に共動搖致す間敷に併彼方事情も難計に付其心得を油斷之無之様可被致事。右之趣向々々早々可被相觸に事。二月九日

嘉永七寅年二月十六日松平伊賀守殿荒井甚之丞を以御渡

三奉行に
覺

此度渡來之亞墨利加船浦賀表ふるて應接可致筈之處浦賀沖の波荒る船繫難致旨申立に付本牧横濱にて應接有之に事。二月朔日

異船退帆之儀申上に書付

谷村源左衛門 秋山久藏

神奈川沖に碇泊致し異國船七艘今朝出帆申上刻小柴沖に碇泊仕に尤明日同所退帆可仕哉之趣に御座に。此段申上に以上。

三月十三日

谷村源左衛門 秋山久藏

嘉永七寅年三月廿四日阿部伊勢守殿早川庄次郎を以御渡井戸對馬守受取之。

林大學頭 井戸對馬守に
鵜殿民部少輔 松崎滿太郎に

覺

伊澤美作守事今廿四日下田奉行被仰付に處亞墨利加船渡來之儀に付之

霸都時代ノ港灣

御用筋と、美作守を元支配黒川嘉兵衛始に及差圖に間萬端美作守指揮を受相勤の様可被申渡の事。

右之通浦賀奉行に相達に間可被得其意の事。

三月廿四日

——嘉永撰要類集

日本國米利堅合衆國和親條約嘉永七年(安政元年)甲寅三月三日(西曆千八百五十四年)三月三十一日(於神奈川)調印。安政二年乙卯正月五日(西曆千八百五十五年)二月二十一日(於下田)批准書交換。

亞墨利加合衆國と帝國日本兩國の人民誠實不朽の親睦を取結ひ、兩國人民の交親を旨とし、向後可守固條相立候と免、合衆國より全權マッセウ、カルブレズ、ベルリ(人名)を日本に差越し、日本君主より全權林大學頭、井戸對馬守、伊澤美作守、鶴殿民部少輔を差遣し、勅諭を信して雙方左の通取極候。

第一條 日本と合衆國との其人民永世不朽の和親を取結ひ、場所人柄の差別無之事。

第二條 伊豆下田松前地箱館の兩港に、日本政府に於て亞墨利加船薪水食料石炭缺乏の品を、日本人にて調候丈に給し候爲め、渡來の儀差許し候。尤下田港の約條書面調印の上、即時相開き、箱館に來年三月より相始候事。

給すへき品物直段書の儀に、日本役人より相渡可申、右代料の金銀錢を以て可相辨候事。

第三條 合衆國の船日本海濱漂著の時、扶助致し、其漂民を下田又の箱館に護送致し、本國の者受取可申、所持の品物も、同様可致候。尤漂民諸雜費の、兩國互に同様の事故不及償候事。

第四條 漂著或の渡來の人民取扱の儀に、他國同様緩優に有之、閉籠候儀致間敷、乍併正直の法度より伏從致し候事。

第五條 合衆國の漂民其他の者共、當分下田箱館逗留中、長崎に於て唐和蘭人同様閉籠窮屈の取扱無之、下田港内の小島周り凡七里の内、勝手は徘徊いさし、箱館港の儀に追て取極候事。

第六條 必用の品物其外可相叶事、雙方談判の上取極候事。

第七條 合衆國の船右兩港に渡來の時、金銀錢並品物を以て、入用の品相調候を差免し候。尤日本政府の規定に相從可申、且合衆國の船より差出候品物を、日本人不好して差返候時に、受取可申事。

第八條 薪水食料石炭並缺乏の品求る時より、其地の役人にて取扱すべく、

私に取引をへらさる事。

第九條 日本政府外國人へ當節亞墨利加人へ不差許候廉相許し候節、亞墨利加人へも同様差許可申、右に付談判猶豫不致候事。

第十條 合衆國の船若し難風に逢さる時、下田箱館兩港の外猥に渡來不致候事。

第十一條 兩國政府に於て無據儀有之候時、模樣に寄り、合衆國官吏の者下田に差置候儀も可有之、尤約定調印より十八箇月後に無之候て、不及其儀候事。

第十二條 今般の約定相定候上、兩國の者堅く相守可申、尤合衆國主に於て、長公會大臣と評議一定の後、書を日本大君に致し、此事今より後十八箇月を過ぎずして、君主許容の約定取換せ候事。
右の條、日本亞墨利加兩國の全權調印せしむる者也。

嘉永七年三月三日、千八百五十四年三月三十日。

林大學 頭花押。 井戸對馬守花押。
伊澤美作守花押。 鶴殿民部少輔花押。

マツゼウ、カルブレズ、ベルリ手記。

——法規分類大全

安政元甲寅正月十一日伊豆國沖合に異國船七艘見えしが、同月十四日一艘相模國浦賀に渡來し、武藏國金澤沖に碇を卸せり。こは去年渡來の亞墨利加船にして、自餘類船三崎大津の海面に滯船せるむね、浦賀奉行及び海岸の諸家より言上あり。この日奉行町觸浦觸等をいたす。

同月十一日今度亞墨利加船渡來により、林大學頭浦賀に遣はさるへきむね、あらかじめ其用意を命せらる。かつ在府の浦賀奉行伊澤美作守には、直に暇賜りて、同所に赴くへきよし命せらる。同月十五日林大學頭、町奉行井戸對馬守、御目付鶴殿民部少輔、儒者松崎滿太郎等暇賜りて、また遣はさる。この日渡來の亞墨利加船穩あるにより、動搖すべからさるむね、及び警衛の諸士着具の事を令せらる。この日御使番三人、増泊を命ぜらる。

同月十六日、また六艘渡來して小柴沖に繫留す。去る十四日渡來の船とあわせて七艘なり。よて去バ、奉行及び海岸の諸家より言上あり。此日江戸にては小笠原左京大夫忠徵、真田信濃守幸教に應接所警衛のこと、及び内海守備の場所を大名に達せ

らる。同十七日寄場出張のもの月俸の事により、御目付達書をいたす。同十八日諸大名に出張の用意をあらかじめ令せられ、また御府内取締の事御使番及び番衆等に達せらるゝむねあり。

安政元甲寅年正月十九日、林大學頭等役々浦賀に到着す。暇賜りしは十五日なり。同廿日浦賀奉行支配組頭黒川嘉兵衛、御徒目付通詞等を小柴村沖碇泊の異船にいたらしめ、浦賀港館浦に於て應接すべきにより、この地に戻るべきむね諭せしか、かれ承伏せず、江戸にいたり對談せんといふ。此日江戸にては御目付御使察せし。よて同廿一日その形勢を言上し、同廿二日まゝ江戸海に乘入ることを禁す。志かるにかれ肯はずして、その應接所を覽んことを乞ひ、同廿四日上陸あるべきよしなり。廿五日船中祝炮の事により役々言上あり。

同月廿二日、江戸にては海岸の屋敷にあらかしめ、武器を備へしめ、異變のこ
とあらば盤木の合圖に及ふべきよし令せらる。同廿三日、松平越後守齊民、松
平越前守慶永に人數出張のことを令せられ、御代官江川太郎左衛門も命
せらるゝむねあり。この日松平相摸守慶徳より言上の事あり。

同月廿四日、異人館浦應接所一覽のこと、風雨により延引す。此日江戸にては

寄合の向々に板橋、千住、内藤、岩淵等の宿々警固を命せられ、かつ明日かの國
王生誕日なるよしをもて、祝炮を發せんとす、よて御固の面々に達せらる。

この日、本牧の警衛松平相摸守慶徳、異人非禮の振舞あらわ捕ふべき旨伺ひ
に及びしが、伺ひの如く下知せらる。よて同月廿七日應接掛りの役々より言
上あり。

安政元甲寅年正月廿五日、副將アイダムスその他十四人館浦應接所に上陸
し、浦賀奉行伊澤美作守、御目付鶴殿民部少輔、儒者松崎滿太郎等應接するに、
漢文一通を出す。四月廿七日和解を附して言上あり。時に異人には茶菓酒肴を賜る。この日江
戸よては下知次第府内を巡察すべきむね、御使番に達せらる。

同月廿六日、きのふ副將アイダムス應接所を一覽ありしに、狭小よして献貢
物をつらねかふきよし白す。此日浦賀與力に横文字を贈れり。同廿七日應接所の事により役
々漢文の一書を贈りしかは、かれ肯はずして、七艘とも大師河原沖に入船す。
この日江戸にては、兩御番の面々に濱御庭の警衛を命せられ、御使番にも同
出張を命せらる。小普請の輩にも、異船の動靜に、より出張のむねを命せらる。

安政元甲寅年正月廿八日、亞墨利加船羽田沖に乗入る。よて同廿九日林大學

頭等浦賀より神奈川に出張す。

同月廿八日、江戸にては細川越中守齊護、松平毛利大膳大夫慶親、松平池田内藏頭慶政、立花飛騨守鑑寛に、時宜により近海に人數出張のことを命せらる。かつ三奉行及び海防掛の面々に達せらるゝむねあり。まゝ異人不法の振舞あらは、後訴ふべき旨、及び寄場出張のもの人馬のことにより御目付の達書をいたす。

同年二月朔日、これまで應接の場所定らざりしか、遂に神奈川横濱に決す。この事御固の面々に達せらる。この日、江戸にては、海岸見廻りのことを御使番に達せられ、小笠原左京大夫忠徵、眞田信濃守幸教には、横濱應接所の警衛を命せられ、この事により同日左京大夫忠徵より伺ふむねあり。立花飛騨守鑑寛手には、池上新田の固を命せらる。同三日、異船見物を禁せられ、また御目付より御賦請取の場所を達す。

同月四日、きのふめしによて大學頭對馬守江戸にいふり、同六日まゝ出張す。この日類船一艘渡來あり。あはせて八艘となる。同七日、使節白すむねあるにより、同九日證書をもて示す。

同月八日、大學頭等横濱應接所を見分す。異人も上陸して一覽あり。此日江戸にては令せらるゝ旨ありて、士氣を勵まし給ふ。

安政元甲寅年二月九日、明十日とじて、應接あるべきにより、彼此これを談す。まゝ江戸にては、此事によて御書付を出さる。同十日、林大學頭、井戸對馬守、伊澤美作守、鶴殿民部少輔、松崎滿太郎等、横濱に出張し、使節以下士官三十人上陸して、凡人數六百といふ。應答せるに、かれ漢文洋文の書翰を出す。此刻、異人に飲食を給ひ、役々四名の書付を渡す。時に陸地の警衛は、小笠原大膳大夫忠徵、眞田信濃守幸教、海面は松平相模守慶徳、これを役す。

安政元甲寅年二月十日、本日應答の後、かれ約條書を出せしか、貿易和好の事なるにより採用せず。

同月十一日、きのふ應答ありて、本日御徒目付浦賀與力等立會ひ、死亡の異人一人、横濱村増徳院に埋葬あり。

安政元甲寅年二月十二日、かれ方物献上を願ひしか、同十三日これを許容せらる。此日、かれ願望の趣意、漢文洋文の二通を出せり。

同月十五日、異人横濱に上陸して、貢物を献す。時に役々同所に出張あり、かつ

老中以下應接掛の輩にも贈物差あり。

同月十六日かれ薪水石炭等賜はるべき場所を定めんかため、近日應答せんことを乞へり。此月十九日に至り應答あり。この日去る十三日かれ願望の書翰を贈りしにより、咨文及びその事により條約書を贈りしかども返答のことなし。

安政元甲寅年二月十九日、かねて約せし如く、役々横濱にいさり、使節ヘルリ等凡貳百人以上陸し應答あり。時に開港の願望ききりなるにより、嚴に國法を諭すといへども、かれ承伏せざるにより、同廿一日林大學頭、井戸對馬守參府して、これを伺ひ、此日亞墨利加船一艘神奈川に渡來し、すべて九艘となる。同廿三日、まゝ神奈川に出張す。

同廿五日漢文の短書を賜れり。

同月廿六日、軍艦一艘出帆す。この日本國大統領及び使節等に御投惠物數品あり、まゝ老中及び役々よりも贈物をのく差あり。かつ開港のことは下田箱館の兩所に定むべきむね、返答ありしかは、かれまゝ下田の地形を一覽せんことを乞へり。よてこれを許容す。

此月廿七日、江戸にては亞墨利加船穩なるにより、海岸屋敷の警衛を引拂はしめ、まゝ兩番の面々にも濱御庭の固めをゆるさる。横濱應接所警衛のものは、改めて達せらるゝむねに

りあ

二月廿九日、大學頭はじめ異船に到る。時にかれ役々を饗す。同晦日開港の事によて應接あり。

安政元甲寅年三月朔日、伊豆國下田港上陸の里數を定む。同二日約條書書法のことにより應答あり。此事によりかれ書面を出せり。かつ對馬守美戸にては、松前伊豆守崇廣にあらかじめ達せらるゝむねあり。

同月三日大學頭はじめ横濱にいたりて應答あり。よて十二ヶ條の約條を定む。この日下田開港のことにより、彼此下田に會して商議せんことを乞ふ。よて役々出張のことは、自今五十日の猶豫あるよし答へしかば、かれ此間に箱館港を一覽せんといふ。まゝこれを許容す。こゝの地形を見んが爲にして、上陸等のことを見んが爲にして、上

同月四日、かれ大學頭に書翰を贈れり。同五日對馬守美作守に大統領一門を贈る。此日使節江戸に赴んことを強て乞ひしか、國法を諭し、つるに横濱近傍の徘徊を許容す。

安政元甲寅年三月七日、軍艦一艘退帆す。同九日使節横濱に上陸して、近傍を

徘徊す。時に役々附添あり。同十一日召によて林大學頭井戸對馬守江戶に歸る。同十三日七艘の船神奈川を退帆して小柴村沖に滯船し、今度使節かれて江戶に至るへき旨、大統領の命あるにより、さなくして歸國する時は、使命全からずとて、この日出帆の刻、大師河原沖に乘入り、こゝにて江戶は見えたりとて、士官の輩に示し、穩に退帆せり。其實は江戸にいたらんと望み再三なりしか、敢て許さるにより、かれ同廿一日にいたり皆出帆す。小柴退帆の後下田にいたり、それより箱館よて御備場平常に復すべき旨、浦賀奉行達せり。

同月十八日、きのふ小柴村沖を出帆せし異船二艘伊豆國下田に入港す。小柴の二艘のみならず、小柴出帆の後、皆下田に著船ありしなるべし。同年四月八日軍艦一艘同所を退帆す。同月十日三艘出帆して、松前領箱館に赴く。同十七日まゝ二艘同所に出帆す。この他一艘は下田に滯泊せり。この事によりベルリ及びポットメンより書翰を出す。其毎時大久保加賀守忠愨言上あり。

同年四月九日、亞墨利加人願ひによて、下田箱館の兩港を開かせられ、航海來往のもの御撫恤あるべきよし書付を出さる。同月廿九日異船嚮に内海を退帆せしにより盤木の合圖を止められ、平常に復すべき旨なり。○中略。安政元甲寅年四月下田奉行伊澤美作守、都筑駿河守、御勘定吟味役竹内清太郎等に暇賜りて下田に赴かしめ給ふ。同年五月まゝ林大學頭をよじめ應接掛の面々も同所に發行ありて、此月八日より十日にいたりをのゝ參着す。

こは約のことく近日亞墨利加船箱館より再渡あるへきによりてなり。同月十二日蒸氣船二艘下田に再渡す。箱館帆せしは此月八日なり。同月十三日役々了仙寺に會し、使節ベルリ等上陸して應答あり。同十四日また應接す。此日先にかれ大炮を對馬守美作守に贈りしにより答禮あり。大學頭等より投物各差あり。

安政元甲寅年五月十五日箱館出帆の亞墨利加船一艘下田に入津す。よて大久保加賀守忠愨届あり。此日使節ベルリ了仙寺に上陸して應答あり。同月十六日、まゝ箱館より再渡の船一艘入津す。同十七日役々了仙寺に出會異人も上陸して應答あり。時に上陸の波戸場三所を定む。この他大島一覽及び狩獵のことにより願望あり、されども許しかたきを諭し遂に承伏せしむ。同月十八日、まゝ應接あり。この刻箱館港上陸里數のことをかれ強て乞ふむねあるにより、地方五里に定む。自餘漂民の事により白す旨あり。よて書付を與ふ。

安政元甲寅年五月廿一日、役々かの船に到る。時に饗應あり。同廿二日了仙寺に會して、條約附録十三條の案を定め、同廿五日此事畢ぬ。この日ベルリ病により上陸せず。書付をもて白すむねあるにより、翌廿六日返書を贈る。

同月廿六日了仙寺に相會し別を告げ、饗應あり。同廿八日井戸對馬守、同年六月朔日林大學頭、同二日下田奉行をはじめ相次で江戸に赴く。異船はきのふより本日に及び退帆す。よて同九日令せらるゝむねあり。

同年十月廿日亞墨利加船渡來中掛り諸役人に御褒美を賜る。同廿四日町奉行池田播磨守には、江戸市中取締一人にて骨折しむね時服を賜る。

——通航一覽續輯

去年書翰ノ回音ヲ得ンガ爲ニ亞船浦賀港ニ來ル。

此日○安政元年正月十一日亞米利加船浦賀港内へ乗入る。但蒸氣船三艘、軍艦三艘追て運送船二艘増加し、都合八艘に成る。依之浦賀奉行及海岸守衛諸藩より注進櫛の齒を挽か如し。

廿八日○安政元年正月相州浦賀ヨリ亞船内海ニ入ルノ旨ヲ報ス。

林大學頭、井戸對馬守、伊澤美作守、鶴殿民部少輔、松崎滿太郎より申上ルア

メリカ船の義蒸氣船三艘、軍艦三艘本牧迄乗越ひし付、香山榮左衛門御小人目付立會通詞召連引戻し方嚴重申諭ひ處、何分大切の船荒波よて浦賀表船繫致し兼、夷人共儀ハ江戸表へ罷越す決心の様子よて、彼是仕はてハ彌應接手間取ひ故、兼て御下知の趣も御座ひ間、大學頭一同申合、明廿九日浦賀出立神奈川表へ出張仕り、伊豆守儀ハ浦賀表よ残り罷在ひ積談判仕ひ。此段申上候。猶此上應接の儀、神奈川より可申上ひ。

二月十日○安政元年武州横濱へ亞人上陸ノ次第

亞國使節ベルリ、副將アカメン、參將アイダムス、其外の官人ナイス、チース、レス、ユールス、ハラシ、モレト、スヘイテン、ハルレス、ユルレリツ、ハイ等也。フナルツン、メイストレ、ムリロムレ、ソノイクレ、インマキス、ヘウツ、以上六人醫官なり。畫工ハ、日本通詞ウツアムス、此者の元日本薩州鹿兒島の漁人の由、去る戌年漂流してアメリカ人よ救はれ、當時彼國にて日本人十七人養はるゝ内の一人と云。面色白く丈高く肥肉にて、四十歳程よ相見えし由。和蘭通詞ホツテメン、赤白布交旗持一人、赤旗持三人、音樂方三十一人、惣人數四百四十六人なり。解よ残る人數凡二百人計り、アイダム

ス乗船の赤き筋有之船長四十二間四尺五寸幅七間一尺五寸深七間一尺、但上敷板より鐵敷板迄五間なり。ヤセシ筒三挺、大礮九挺、但十八ホントヘキサンス一挺、長一尺六寸口通七寸四分餘。使節將官ハツテラヘ乗時、本船にて空炮十七發、上陸の時に同二十發、應接場へ入る時小舟にて同十七發と云。應接所に、林大學頭、井戸對馬守、伊澤美作守、鵜殿民部少輔、松崎滿太郎、其外待受、應接有之、其席にて使節ヘルリ書翰二通、林大學頭へ渡し、夫々挨拶終り、御料理下さる。

三日○安政元 亞國ト和親交際條約書成ル。○條約文、略。

十三日○安政元 亞墨利加船内海ヲ去ル。

此日アメリカ船内海退帆の節、火輪をかけ退帆仕べく旨申出ゆ、付見分として御目付永井岩之丞、御使番松平源太夫高輪如來寺邊まで相越す。此日夷船出帆の節、蒸氣船二艘、羽田沖を乗廻し、を彼國献上の遠目鏡にて御櫓より上覽といふ。又御休息所、御山より右目鏡にて御覽の處、品川御臺場先、乗居の者の着服、縞模様迄、明かならざるのよし。

廿二日○安政元 亞國ト和親交際條約書ノ附録成ル。

當三月三日於武州横濱村條約書成。

今日於豆州下田條約附録成。

日本へ合衆國より使節提督ヘルリと日本大君の全權、林大學頭、井戸對馬守、伊澤美作守、都筑駿河守、鵜殿民部少輔、竹内清太郎、松崎滿太郎と、兩國政府の爲取極置の條約附録。

○第一箇條 下田鎮臺支配所の境を定め、る爲關所を設る、其意の儘たるべし。然れ共亞墨利加人も亦既よ約せし日本里數七里堺關所出入するに障ある事なし。但日本法度よ悖る者あらハ番兵是を捕へ、其船よ送るべし。○第二箇條 此港よ來る商船、鯨漁船の爲め、上陸場三箇所定め置、其一、下田、其一、柿崎、其一、港内の中央なる小島の東南よ當る澤邊に設くべし。合衆國の人民必ず日本官吏よ對し丁寧を盡すべし。○第三箇條 上陸の亞墨利加人、免許を受ずして民家町家に一切立寄べからざ。但寺院店見物の勝手次第たるべし。○第四箇條 徘徊の者、休息所、追て其爲旅店設る迄、下田了仙寺、柿崎玉泉寺二箇寺と定むべし。○第五箇條 柿崎玉泉寺境内に、アメリカ人埋葬所を設け、簡略ある事なし。○第六箇條 神奈

川にての條約に、函館に於て石炭を得べきとあれども、其地にて渡し難き趣は提督ヘルリ承諾致し、函館にて石炭用意に及ばざる様其政府に告べし。○第七箇條 向後兩國政府に於て公顯の示告に蘭語譯司居合ざる時、外の漢文譯書を取用する事なし。○第八箇條 港取締役一人、港内案内者三人定め置べし。○第九箇條 市店の品を撰むに、買主の名と品の價を記し、御用所に送り、其價は日本官吏より渡しべし。○第十箇條 鳥獸遊獵は、都て日本に於て禁ずる所なれば、亞墨利加人も此制度に伏すべし。○第十一箇條 此度函館の堺日本里數五里を定め置、其他の作法も此條約第一箇條に載る所の規則に倣ふべし。○第十二箇條 神奈川よての條約取極の書翰を得、是に答ふるよ、日本君主に於て誰より委任あるとも意の儘たるべし。○第十三箇條 茲に取極置所の規定は何事によらざ若神奈川の條約より違ふ事有とも、又は是を變ざる事なし。

右條約附録エグレス語日本語に取認、名判致し、蘭語に翻譯して、其書面を合衆國並日本全權双方取替すものなり。

十日○安政元 亞船豆州下田港ヲ退ク。

六月十日、亞墨利加船殘らず退帆の趣、翌十一日諸向へ觸達有之。

——嘉永明治年間録

廿日 ○安政元十月。

一、金七枚。 町奉行 井戸對馬守○覺
 時服三。 御勘定奉行次席西丸御留守居 戸田伊豆守○榮
 時服三。 下田奉行 伊澤美作守○政
 金七枚。 御目付 鵜殿民部少輔○長
 時服三。 同三。 儒者 松崎滿太郎
 同三。 同二。

右浦賀表亞墨利加船渡來之節、御用取扱ひに付被下之旨、伊勢守申渡之。
 時服二。 下田奉行 都筑駿河守○峰
 同二。 箱館奉行 竹内下野守○保
 右下田表亞墨利加船渡來之節、御用取扱ひに付被下之旨、同人申渡之。
 時服三。 二丸御留守居 下曾根金三郎

右浦賀表亞墨利加船渡來之節、御固筋等之御用取扱ひに付被下旨、同人申渡之。

霸都時代ノ港灣

右同斷之節、最初、神奈川下田表に罷越、骨折ゆに付被下旨、同人申渡之。
但、同斷に付、屬吏に賜白銀有差。

——溫恭院殿御實紀

六日○安政元年正月。米國軍艦前月ヨリ琉球ニ來ルモノ十隻、是日「ヘルリ」等、王城ニ至リ、歲首ヲ賀ス。尋テ艦ヲ發シテ江戸ニ赴ク。

同日○安政元年正月十四日。米國軍艦一隻浦賀ニ來リ、進テ本牧ニ入ル。明日軍艦十隻來ル旨ヲ云フ。

十五日米艦來リシ旨ヲ令シ物情ヲ鎮シ、消防火夫屯集等ノ約束ヲ頒ツ。

同日林大學頭儒井戸對馬守町奉等ニ命シテ、浦賀ニ往キ、去年十一月朔日令セシ所ノ旨意○按クルニ諸侯建議和戰相半シ、一ニ決シ難キヲ以テ、明ヲ以テ、

米人ニ應接セシム。

同日○安政元年正月十六日。「ヘルリ」軍艦六隻ヲ以テ浦賀ニ來リ、進テ本牧ニ入ル。伊澤美作守浦賀之ヲ浦賀ニ還ラシメ、鎌倉或ハ屋形浦ニ延見セントス。「ヘルリ」聽カズ。

十九日は夜林大學頭等浦賀ニ至ル。

二十一日令シテ、米國船變ヲ生セハ、早柳ヲ以テ相報セシム。因テ柳ヲ以テ火災ヲ報スルヲ停ム。

二十五日「ヘルリ」病ト稱シ、副將「アイダムス」ヲシテ、浦賀ニ來ラシム。戸田伊豆守等之ヲ屋形浦ニ延見シ、「ヘルリ」來會ヲ諭ス。聽カズ。

二十七日「ヘルリ」進テ神奈川ニ入ル。林井戸等神奈川ニ退キ、横濱ヲ定テ應接ノ地ト爲シ、假館ヲ設ク。

同日○安政元年正月廿八日。遼ニ溜詰諸侯ヲ登營セシメ、米船處分ノ事ヲ議ス。或云、是時諸侯唯無事平穩ヲ談セシノミナリト

二日○安政元年二月。松平河内守勘定奉行神奈川ニ往キ、老中ノ密旨ヲ林大學頭等ニ傳フ。或云、是頃、偷安ノ徒、水戸老侯及ヒ福山侯ヲ黜ケテ無事ヲ謀ラントス。上田侯等陰ニ之ヲ慫慂ス。河内守ノ事、人皆之ヲ怪メリト。

四日林大學頭等ヲ江戸ニ召シ、決シテ交易ヲ許ス可ラサル旨ヲ命ス。六日、大學頭等神奈川ニ行ク。

同日米艦一隻浦賀ニ來リ、六日神奈川ニ入ル。

十日林大學頭等「ベルリ」ト横濱ニ應接シ漂民撫恤、石炭給與ノ二事ヲ許ス。「ベルリ」書ヲ出シテ、和親交易ヲ許スヲ謝シ、又船中ノ死人ヲ葬ル地ヲ借ント請フ。之ヲ許ス。或云、交易ヲ許スヲ謝スルノ事ハ「ベルリ」ノ權謀ナリ、故ニ其書ヲ出サントシテ止ル數回、後チ終ニ斷シテ之ヲ出セシニ、大學頭等變ヲ激スルヲ怖レテ、之ヲ爭フコト能ハサリシト。

十三日米人は日ヨリ連日江戸海ヲ測量ス。

十五日「ベルリ」火輪車傳信機及ヒ農具兵器書冊布帛ヲ献シ、又老中等ニ物ヲ贈ル。

十九日林大學頭等「ベルリ」ト應接シ、長崎ヲ以テ石炭ヲ給シ漂民ヲ撫恤スルノ地トナシ、其他ハ五年ヲ期シテ之ヲ議セントス。「ベルリ」聽カズ。南海ニテ一港ヲ開クノ議起ル。二十二日米人下田ニ行キ地形ヲ檢ス。或云、是時「ベルリ」盛ニ「メキシコ」ノ戰功ヲ誇リ、若シ請フ所ヲ許サ、レハ、江戸ヲ蹂躪スル氣勢ヲ示シ、十日應接ノ状態ト全ク相反ス。大學頭等益怖レシト。

二十日米艦一隻浦賀ニ來リ、明日神奈川ニ入ル。

二十二日筒井肥前守、川路左衛門尉長崎ヨリ歸リ至ル。或云、肥前守等、去年十

一月令スル所ノ旨趣ヲ奉シテ魯船ヲ退ク、未タ江戸ニ歸ラサルニ、江戸諸有司恐怖シテ、前日ノ言議ヲ守ルコト能ハズ、忽チ開港ヲ米人ニ許ス。是ニ由テ、内ハ諸有司ノ沸議アリ、外ハ國ノ威信ヲ失ヒ、挽回ス可ラサルコトニ至リシト。

二十六日林大學頭等「ベルリ」ト應接シ、下田箱館ヲ開ク。又米國大統領ニ物ヲ贈リ「ベルリ」等ヲ饗シ、船中ノ人ニ米ヲ賜ヒ、角力ヲ觀セシム。

同日「ベルリ」副將「ブカナ」ヲシテ米國ニ歸ラシム。和成ルコトヲ告グシナリト云。

二十九日「ベルリ」林大學頭等ヲ船中ニ饗ス。

三日○安政元年三月林大學頭等「ベルリ」ト條約ヲ結ブ。

十三日米艦羽田ニ來ル。暫クアッテ去ル。

二十一日米艦總テ江戸海ヲ去リ、下田ニ入ル。

十二日是日ヨリ米艦逐次箱館ニ赴キ、十五日箱館ニ入ル。

十二日○安政元年六月是日ヨリ米艦逐次箱館ヨリ下田ニ返リ來ル。

二十二日下田ニテ林大學頭等、米人ト條約附録ヲ定ム。

二十八日は日ヨリ米艦逐次下田ヲ去ル。

九日○安政元年十二月米國船下田ニ入ル。アダムス「來ル」大統領ノ條約書ヲ上リ、將軍ノ鈐印ヲ請フ。正月五日之ヲ許ス。同七日去ル。

——明治前記

附記
英魯蘭條約

〔附記〕英魯蘭條約

日本國大不列顛國約定嘉永七年甲寅八月二十三日(西曆千八百五十四年十月十四日)於長崎調印。安政二年乙卯八月二十九日(西曆千八百五十五年十月九日)於同所本書交換。

日本大君の命を請たる長崎奉行水野筑後守○忠 御目付永井岩之丞○尙志 和東印度及び其近海の英國軍艦を指揮する第三等水師提督ナイト名爵 名爵ゼームス、スチルリングと同意約定する條々、左の如し。○下

日本國魯西亞國通好條約安政元年甲寅十二月廿一日(西曆千八百五十四年十二月廿七日)於下田調印。安政三年十一月十日(西曆千八百五十六年十二月七日)於同所本書交換。

日本國と魯西亞國と、今より後懇切にして無事ならん事を欲して、條約を定めんが爲め、魯西亞ケイヅルは、全權アヂュタント・ゼネラル・フィリス・アドミラル、ユフイミユス・プーチャチンを差越し、日本大君は、重臣筒井肥前守○政 川路左衛門尉○聖 に任して、左の條々を定む。○下

日本國魯西亞國條約附錄安政元年甲寅十二月二十一日(西曆千八百五十四年十二月廿七日)魯曆十一月二十六日)於下田調印。
魯西亞國全權ゼネラル・アヂュタント・フィリス・アドミラル、ユフイミユス・プーチャチンと、日本國委任の重臣筒井肥前守○政 川路左衛門尉○聖 相定むる所の條約附錄。○下

日本國魯西亞國追加條約安政四年丁巳九月七日(一千八百五十七年十月二十四日)於長崎調印。
安政元年十二月二十一日即一千八百五十四年第一月二十六日下田に於て日本國と魯西亞國と取結たる條約の追加として、日本全權勘定奉行兼長崎奉行水野筑後守○忠 長崎奉行荒尾石見守○成 御目付岩瀬伊賀守○忠 と魯西亞全國皇帝陛下の副水師提督兼エード、デ、カムプ、ゼネラル、コロント、ユーフキミユス、プーチャチンと會議同意し、以て定むる所の條々の如し。○下

日本國和蘭國條約安政二年乙卯十二月廿三日(千八百五十五年一月三十日)於長崎調印。安政四年丁巳八月廿九日(千八百五十七年十月十六日)本書交換。

日本和蘭兩國往古よりの通誼強固からしめん爲、御國初に和蘭國へ賜りし信牌も有之に據り、長崎奉行荒尾石見守○成 川村對馬守○修 御目付永

井岩之丞志。淺野一學氏和蘭國王の大全權於日本和蘭領事官リツドル、デル、オルデ、ファン、ネー、ドルラン、ツゼン、レーウ、メー、ストル、ヤン、ヘン、デ、リツキ、ドンクル、キユルシユスと決着の取極書略。下

日本和蘭兩國全權追加條約安政四年丁巳八月廿九日西曆千八百五十七年十月十六日於長崎調印。

於日本和蘭領事官ドンクル、キユルシユスと日本國御勘定奉行兼長崎奉行水野筑後守長崎奉行荒尾石見守御目付岩瀬肥後守と長崎に於て定むる所の條約略。下

阿蘭國日本國高官双方談判之上治定せし條約添書安政四年丁巳八月二十九日略。

——法規分類大全

十三日安政元年八月。長崎ニテ、是日ヨリ水野筑後守嘆人ト應接シ、廿三日條約ヲ結ヒ、長崎箱館二港ヲ開ク。二十九日嘆船去ル。

十日安政元年十月。蘭人ニ船ヲ下田箱館ニ繫クヲ許セシ旨ヲ令ス。

二十一日安政元年十二月。魯人ト條約ヲ結ヒ、下田長崎箱館ヲ開ク。

十三日安政二年八月。令シテ、米魯英三國ノ條約ヲ頒示ス。

二十三日安政二年十二月。長崎ニテ蘭人ト條約ヲ結ブ。

——明治前記

十二日壬子嘉永七年正月。紀元二五一四。幕府列藩ニ命シテ、江戸近海及

街口市ヲ守備セシム。○異國船渡來一件。温恭院殿御實紀。小笠原家譜。立花家譜。嘉永明治年間錄。眞田家譜。明治前記。

江戸近海街口守備 亞船渡來ニ由リ、諸侯ニ命シテ江戸近海及街口ヲ守備セ

シムルコト、左ノ如シ。

寅○嘉永七年正月廿三日御向方々差越、右々昨年之節も御達無之、殿中御沙汰書ニも出不申難分、故、昨年々對馬守方御右筆衆に問合申、例を、御向様に申上、い處、早速御問合被仰遣之儀ニ、表向御達書ニ、亦々無之候。對馬守に、便之節申遣す。

御當番方 年番方 非常取締掛 晝夜廻り 三廻ニ爲心得相廻ス。

近海御固大名名前書

芝邊

高輪邊

品川御殿山邊

羽田大森邊

不入斗村大井村

松平加賀守前田

松平越後守齊

松平越前守慶

松平阿波守賀

松平讃岐守胤

江戸近海街口守備

江戸近海街口守備事蹟

神奈川邊

松平兵部大輔憲○慶

深川洲崎邊

松平越中守猷○

鐵炮洲佃島邊

酒井雅樂頭顯○忠

右之通

(卷)關東取締方渡邊園十郎向方用人中ニ申候由向方留記寫

別紙浦賀邊風聞並及見聞ハ義御覽置迄ニ奉申上ル。右之書物多別紙之下書之儘差出奉恐入ル。宜御取捨奉願ル。以上。

正月廿五日

西浦賀廻リ先
渡邊園十郎

竹村俊治様

安井錦作様

富田小源太様

此程品川宿ハ海邊通神奈川本牧金澤浦賀邊右最寄とも都多人氣穩相替義無之同所米直段六斗壹貳升位是又差支無御座由且異船碇泊場所ハ矢張夏島本牧小柴三ヶ所沖合之七艘罷在ル。ハッテイラ之日々元船近邊又之沖合海岸を乗廻リ深淺ヲ量且地方之様子及見ル體之相聞扱又浦賀ハ異船之度々掛合最初之鎌倉光明寺へ異人上陸於同所應接可致旨申談ル由之處副

使ナヒアダムツ申答ル之御返翰御渡相成ルハ可罷出左も無之ルハ唯今碇泊之場所ニ罷在御返答可相待若又強テ上陸被仰付候ハ小柴本牧又之品川邊に被仰付度夫之亦も御返答御座無之ルハ江戸表迄も可罷出旨申居ル由正使マッテセヘルリ之病氣之由之未浦賀手ハ面會不致由都多是迄之應答副使之答ニ御座ル由尤異船に乘込ル得之船中ニ勿論蒸氣船車仕懸等ニ至迄夫々掛リ異人案内致シ聊取隠シなく念頃ニ見せ且應對も至極神妙ニ有之船中部屋之手道具等取出し見せ或之茶菓子銘酒杯差出折々雜話も致シ都多親しく相成ル。

一昨廿四日七艘之内壹艘浦賀御番所外屋形浦に引出し上陸爲致一先應接可有之筈一昨日ハ再應申諭承伏致昨廿四日晝時頃御番所前迄壹艘乗出ル處南風烈敷上陸難成無餘義元場所ニ乗戻今廿五日ハ參ル由之ハ共如何可有之哉之御座ル上陸之上之異人とも御料理被下ル筈尤正使之參り申間敷哉中官之もハ哉。

一今廿五日之アメリカ國主誕生日ニ付七艘共右之祝ひとして空炮拾六七發宛相放ル間心配致間敷旨昨日浦賀御役所ハ浦觸相廻申ル昨年之違ハ

陸手も事馴ひ哉都亦穩異人も同様平和之御座也。
諸家御固凡左之、

大井村	土州人數
鈴ヶ森方	隱州人數
八幡入村	阿州人數
大森	明石同
羽田	因州四手同
神奈川	米倉丹後守
本牧邊	川越同
野島	三浦邊
大津邊	彦根同

右之何れも海岸野陳嚴重之相見申也。

右場所風聞及先聞の様荒増奉申上以以上。

寅正月廿五日

下ヶ札
本文相認い處、昨日引戻い異船壹艘、今已中刻頃浦賀御番所前迄乗出申也。然
ル上も、今日應接之 成可申也哉。

去月廿七日夜、佃島鐵炮洲御固、酒井雅樂頭様人數出張有之候處、異國船平穩之付、人數引拂候様、御沙汰御座候趣之、今廿八日一旦引拂相成申候。此段爲御届奉申上候。以上。

二月廿八日 嘉永七年

右町々
名主 共

異國船碇泊中、諸家様方御固之内、本牧神奈川大師河原大島村邊に是迄之通り、羽田浦松平阿波守様御固に人數を減相備罷在、夫の内海大森松平隱岐守様、品川松平越前守様、高輪松平越後守様、芝松平加賀守様、深川松平越中守様御人數、一先引拂被仰付候旨、高輪町名主權左衛門申來候間、此段奉申上候。以上。

二月廿八日

名主 共
異國船渡來一件

正月十七日 嘉永七年

御殿山
高輪邊
芝邊

松平加賀守 齊前田
松平越後守 民齊
松平越前守 永慶

羽田邊

生麥鶴見

遊軍

大森邊

深川洲崎

鐵炮洲佃島

異國船渡來之付、内海御固場所被仰付、旨、人數出張之儀、未御達無之。

正月十九日

一、御固替大井不入斗村松平隱岐守、羽田大森邊松平阿波守、御殿山松平越前守、増上寺松平加賀守。

右和泉守殿宅へ家來呼出、被仰付之。

十二日○嘉永七年正月。江戸近海及街口守衛ヲ列藩ニ命ス。

武州本牧松平相模守、神奈川生麥鶴見邊松平兵部大輔、羽田松平阿波

守、大森邊松平隱岐守、品川御殿山松平越前守、芝高輪邊松平越後守、

芝邊松平加賀守、但増上寺地中、鐵炮洲佃島酒井雅樂頭、深川洲先松平

松平阿波守○賀齊須。

松平兵部大輔○慶實。

松平讚岐守○賴胤。

松平隱岐守○定毅。

松平越中守○顯。

酒井雅樂守○忠顯。

——高麗環雜記

越中守、濱御殿松平讚岐守、清光院宿陣、板橋宿、寄合酒井仁之助、松平

甲次郎、千住宿、本多寛司堀金十郎、内藤新宿、大森勇三郎、龜井勇之助、

岩淵宿、宮城甚左衛門、土屋求馬、應接場御警衛、小笠原左京大夫、眞田信濃

守等へ仰付らる。

——嘉永明治年間錄

廿八日○安政元年正月。

一、三奉行、大目付、御目付、海防掛、江川太郎左衛門に

異國大船壹艘にあり、羽田越は注進有之は、海防掛之面々、三奉行、大目付、

御目付、直に追々登城。

但、バツテイラ而已之あり、登城不致事。

一、右之面々之内、兩三人も登城は、申談之上、同列登城之儀、海防掛月番に

案内申越は、右案内次第、一同登城之積に事。

廿八日○安政元年三月。御座間

松平加賀守

此度異國船渡來に付、固之儀相達は、處、早速人數及出張は、段、兼申付方宜故、之儀、殊に家來共之數日相詰、一同骨折は、段、御懇之上、意有之。

井伊掃部頭 松平肥後守 松平下總守

同斷に付、御備場其外御警衛向之儀、精入申付家來共數日骨折ハ段、御懇之上意有之。

松平越後守 松平越前守 松平阿波守

松平隱岐守 松平相模守 松平兵部大輔

松平越中守 立花左近將監 酒井雅樂頭

同斷に付、固之儀相達ハ處、早速及出張ハ段、兼テ申付方宜故之儀、殊に家來共數日相詰、骨折ハ段、御懇之上意有之。

小笠原左京大夫 眞田信濃守

同文言。

右御目見。

松平誠丸
名代 松平日向守

同斷に付、御備場其外御警衛向之儀、精入申付家來共數日骨折ハ段、御懇之上意有之。

右於御白書院緣、頼老中列座、備前守申渡之。

九日○安政元年
四月。○中略。

松平阿波守

異國船渡來之節、羽田大森御警衛被仰付ハ防禦之手筈、兼テ嚴重に可被申付置ハ。

——溫恭院殿御實紀

十六日○安政元年
正月。金澤等ノ九藩ニ命シテ、江戸沿海ヲ守ラシム。芝及ヒ増上寺
ヲ金澤、高輪ヲ

津山、殿山ヲ福井、鐵炮洲ヲ姫路、洲崎ヲ桑名、濱殿
ヲ高松、生麥鶴見ヲ明石、羽田ヲ德島、大森ヲ松山。又仙臺久留米、金澤三藩ニ、内外

郭門ヲ守ラシメ、其他ノ諸藩兵ヲ整テ命ヲ待タシム。

二十七日○安政元年
二月。令シテ、神奈川横濱ヲ除キ、其他ノ沿海守備ヲ撤セシム。

同日○安政元年
四月九日。彦根侯ニ京師守護ヲ命シ、其羽田大森ノ守衛ヲ止メ、德島侯

ニ命シテ代リ守ラシム。
——明治前記

忠徵○小笠原。

嘉永七年甲寅、亞墨利加船來於武州横濱、依將軍家之命、出兵五百六拾餘人、警備之。同年三月十三日揚兵凱陣。同月廿八日蒙褒言。

——小笠原家譜

鑑寬從四位上少將。左近將監。飛驒守。幼名淳次郎。次郎。
○立花。

霜都時代ノ港灣

安政元年甲寅二月、亞墨利加船再來。朔日命武州池上新田稻荷新田附近之警衛、即時出戍兵三隊、屯大師河原平間寺。三月二十三日撤戍。

——立花家譜

幸教 始幸孝。右京大夫ト稱ス。始メ伊豆守、又信濃守。

安政元年甲寅二月朔日、亞墨利加國軍艦渡來、幕府官吏應接アルニ依テ、警衛ノ爲メ、武藏國本牧横濱邊へ人數差出ス可キ旨幕命アリ。同月六日人數差出シ、同十四日引取ル。

——真田家譜

同永 嘉七年甲寅正月十四日、相模國浦賀へ亞墨利加船十餘艘渡來ニ付、大津鴨居兩陣屋ノ人數シリ出シ、同所へ出陣セシム。同廿四日右ノ亞墨利加船武藏國羽田邊マテ乘込、江戸近海防禦專務ノ折柄、誠丸出陣致スヘキノ所、眼病中ニ付、家老名代トシテ三番手人數川越ヨリ繰リ出引圓ヒ、江戸高輪陣屋へ出張、内海ヲ警衛セシム。

同年三月十四日迄ニ、右渡來ノ黑船追々退帆ス。

同月廿八日老中連名ノ奉書ニ付、名代登城セシメ、今度異國船渡來ニ付テハ、備場其外警衛向ノ義精入レ申付満足、家來共モ數日骨折、太義ノ旨、幕命

アリ。

——松平家譜

〔參考〕 江戸名家詩選ニ、

浦賀雜詩

大槻清崇

松輪磯對竹岡灣、幾處行營備遠蠻、矛戟相摩兵隊肅、旌旗不動砲臺間、潮聲晴怒三崎浦、雲影秋高七島山、誰道海門無鎖鑰、雄藩鎮衛是重關。

是日 一〇嘉永七年(紀元二五 若年寄中海岸防禦掛ヲ増員シ、八月十一

日丁未 四年〇嘉永七年(紀元二五 一ニ至リ、老中若年寄全員ヲ以テ之ニ充

ツ。〇御觸留。

海岸防禦掛再増員 御觸留ニ據ル。

安政元年甲寅年正月十二日和泉守殿御渡ハ御書付

本庄安藝守 〇道貫。

海岸防禦筋之御用向、近來多端相成ハニ付、本多越中守遠藤但馬守申合、取

扱ハ様相達ハ。

右之趣、相達可然向ハ可被達ハ事。

海岸防禦筋之御用向、近來多端相成ハニ付、本庄安藝守 〇道貫。 儀、向後本多越

霸都時代ノ港灣

一〇四七

海岸防禦掛再増員

海岸防禦掛再増員事蹟

中守○忠遠藤但馬守○胤申合取扱ハ様被仰出ハ付月番順を立取扱ハ間向々諸伺諸届等其心得を以差出可申ハ尤當月之本多越中守來月ハ遠藤但馬守三月之本庄安藝守相心得ハ事。右之趣相達可然向ハ可被達ハ事。

正月

同年八月十一日同斷

海岸防禦筋之御用向、向後老中若年寄中一同ニて取扱ハ。尤是迄之通月番順を立取扱ハ間向々諸伺諸届等其心得ニて差出ハ様可被致ハ事。右之趣向々ハ可相達ハ事。 八月

〔附記〕 江戸湊入船數

- 正月四日○嘉永七年同廿二日迄入津 一廻船五拾七艘
- 正月廿三日○同二十五日迄入津 一、同二百拾六艘
- 正月廿六日○同二十九日迄入津 一、同三拾三艘
- 二月朔日○同三日迄入津 一、同三拾八艘

ノ三百六艘

但積合荷物

附記
江戸湊入
船數

御城米御用石武家米町人米酒荒物木綿操綿油材木類其外諸品

右之通廻船入津船數奉申上候。已上。

二月四日○嘉永七年

名主共

——異國船渡來一件

三月廿四日癸亥嘉永七年紀元二五〇三○癸亥三正綜覽。三タビ下田奉行ヲ置ク。○柳營日次記。

柳營
補任。

下田奉行三
置事蹟

下田奉行三置 下田奉行ハ元和二年五月八日置ク所以テ江戸湊ノ前衛ト爲シタル也。享保六年六月二日浦賀ヲ江戸湊ノ前衛ニ充ツルニ及ヒテ之ヲ廢シ、天保十三年十二月廿四日再ヒ之ヲ置キ、十五年二月八日之ヲ廢ス。嘉永七年ニ至リ下田開港ト共ニ三タヒ之ヲ置クニ至ル。

三月廿四日○安政元年

御座間

下田奉行

浦賀奉行
伊澤美作守○政

右於御前被仰付之。

——柳營日次記

下田奉行○中

嘉永七甲寅年三月廿四日再々下田奉行被仰付、二千石高御役料千俵諸大夫
霸都時代ノ港灣

場被仰付、席順之儀ハ、浦賀奉行之次も可相心得旨被仰出。同年四月より二人
柳營補任

附記
下田奉行
廢止

〔附記〕 下田奉行廢止

下田湊之儀安政六未年十二月御鎖港相成、依之同月廿二日彼地引拂、萬延
元申年閏三月十五日中村石見守時萬轉役被仰付、跡役不被仰付、支配向ハ、
外國奉行神奈川奉行之支配向ハ轉、右ニ付再下田奉行相止ハ事。

柳營補任

亞船小柴沖
來泊

六月十七日甲申○嘉永七年(紀元二五〇一)甲申、三正綜覽。亞墨利加合衆國商船一艘、我

カ漂民ヲ送リテ相州小柴村○浦郡。沖ニ來ル。○通航一覽續輯。

亞船小柴沖來泊 通航一覽續輯ヲ抄ス。

安政元甲寅年六月十七日、異國船一艘相模國千駄崎沖に見えしか迅速に内
海に乗入り、小柴村沖に碇泊す。よて浦賀奉行松平伊豫守及ひ松平利大膳大
夫慶親等より届あり。

同日、奉行伊豫守かの異船に與力通詞を遣し、その事情を尋るに、北亞墨利加
カリホルニヤの商船にて、嘉永五壬子年越後國持久村岩船郡に屬す。善太郎船十三

人乗組、松前沖にて難風に逢ひ、十二人死失、一人助命せるを、かれ護送し來れ
るなり。よてその始末を言上あり。同月十九日漂民は伊豆國下田に於て請取
るへき旨、浦賀下田兩奉行に下知あり。この日異船、浦賀に退き、同月廿二日下
田に出帆す。

七月九日丙午○嘉永七年(紀元二五〇一)丙午、三正綜覽。幕府船標ヲ定ム。○温恭院殿御實紀。

船標設定
船標設定事蹟

船標設定 日章旗ハ、關原役家康、足利學校田代三喜之ヲ用ヒシメタリト傳へ、

大坂役遠藤隆慶嘗テ之ヲ用フトモ云フ。相傳ヘテ

於御陣中○大坂役。遠藤隆慶○ハ、日ノ丸御旗、廿本御立置被成ル處、保科肥後守殿光。正

カ、御旗日ノ丸ハ、如何様之御由緒ニテ御用被成ル哉、御聞被成度ト、以御使者
被仰越ル。高林勘兵衛取次申上ルハ、御返答ニ、陣中之系圖改不謂儀、日之丸
之旗ハ、平親王將門カ代々相傳之由申ルハと被仰ル。

遠藤家舊記

ト爲ス者是也。寛文延寶ノ交、幕府河村瑞賢ヲシテ東海北海ノ航路ヲ開カシム。
是時航標ヲ定メテ

一、御城米出船より江戸着迄、自今以後と、白地四半ニ大成朱丸有之船印建置

幕府時代ノ港灣

の様申觸は間、略。○下

ト合シタルコト、已ニ之ヲ記ス。是ニ至テ日章ヲ定メテ皇國ノ船標ト爲ス。

九日○安政元年七月○通航一覽
續輯海軍歴史皆十一日トス。

覺。○中

一、大船製造に付、其外國船に不紛様、日本惣船印は、白地日之丸幟相用は様、被仰出は、且又公儀御船之儀は、白紺布交之吹貫帆中柱に相建、帆之儀は、白地中黒被仰付は條、諸家におるても、白帆は不相用、遠方におも見分は帆印、銘々勝手次第に相用可申は、尤帆印並其家之船印をも、兼書出置は様、可被致は、右大船之儀、平常廻米其外運漕に相用は共勝手次第には得共出來之上は、乗組人數並海陸乗筋運漕方等、猶取調可被相伺は。

右之通、可被相觸は。七月

——溫恭院殿御實紀

〔參考〕 通航一覽續輯ニ據レハ、嘉永六年大船製造ノ令出ル、鹿兒島侯島津齋彬軍船製造ノ免許ヲ請ヒ、十一月廿六日幕府其請ヲ許シテ、船數用法等更ニ稟議スル所有ル可シト命スルヤ、十二月六日左ノ伺書ヲ呈ス。内船標ニ關スル條有リ。

同年(○嘉永六年)十二月十六日同人(○島津齋彬)伺書並附札。

覺

大船拾貳艘

内三艘

長サ三拾間。横七間。炮壹尺八寸。深五間貳尺。炮數三十八挺。炮門三十八。但し貳段。

内三艘

長サ貳拾七間。横六間。炮三尺六寸。深さ四間五尺五寸。炮三十四挺。炮門三十四。但し貳段。

内三艘

長サ貳拾四間。横五間五尺三寸六分。深さ四間壹尺二分五厘。炮十四挺。炮門十四。但し壹段。

蒸氣船三艘

内壹艘

長サ貳拾五間。横四間貳尺九寸。深さ貳間五尺貳寸。炮門拾貳車。炮數拾貳挺。

内壹艘

長サ貳拾間。横三間四尺四寸五分。深さ貳間壹尺五寸六分。炮門八車。炮八挺。

内壹艘

霸都時代ノ港灣

長サ拾八間。横三間。尺五寸三分。深貳間。壹尺。炮門六車。炮六挺。

右之通追々致製造度異國船之不相紛ため、白帆殊之朱之赤日の丸相印小旗吹貫、別紙繪圖面之通造立ひと、異國船之趣之取立、如圖白木之赤左右之欄板取立申度、伺之通被仰付ひと、日本海岸乘筋淺深等兼多相測置不申ひふと、非常之場合難致辨利趣、依之平常運送船之相用、人數要用之分、乘付爲致習熱度、此段得御差圖ひ以上。

附札

可爲何之通ひ。尤帆印共、御國之惣印取極、追多可被仰出ひ間、可被得其意候。

海軍歴史ニハ左ノ文書見ユ。

傳習教示方並軍艦記旗船將心附之儀申出候横文字和解差上候儀申上候書付

荒尾石見守〇成允

和蘭國王より蒸氣船獻貢仕候付、傳習受候者被遣候儀之御座候ひ、惣督之一船之指揮致、船上之事共無殘心得居不申候ふ、不相成職務多端之趣之付、相當之者貳人撰可被遣候段、並乘組人數之儀と、先便申上置候處、此節

右船御受納相成候段申達候之付、教示方並軍艦記旗船將心附之儀申出候書面、カヒタンより差出候間、和解申付候處、昨年同人渡來之節、教示致し候義は、唯大概耳之ふ、當節之至候ふ、順序を立教示可仕就ふ、乗組人數立相定、銘々手を分け、別人交替不致様無之候ふ、修業速成不仕就中指揮役共可相成者、天文算學等研究致し、船中諸般之事無殘心得居可申第一等士官と、右之差續候者之ふ、同様諸事心得可罷在事共、委細申立候趣、此度傳習受候爲被遣候惣督初士官之可相成者、御人撰之御見合之可相成、且右書面之趣惣督之者之御達相成、當人義職務之大意兼ふ辨居候ひ、着崎之上、教示受候心得之可相成と奉存候。軍艦記旗之儀と、追々大船御製造有之候之付ふ、御當國之船印、蒸氣船將へも申聞置候方可然旨、昨年御沙汰御座候得共、和蘭之勿論、外國之ふも承知致し居候由、船將噂有之候間、改ふ不申達候處、此度船印之儀申出候之付ふ、昨年被仰付候通、御當國惣船印は白地日ノ丸幟相用、公儀御船は白紺布交吹貫帆中柱に相立帆、白地中黒御定之趣、委細可申達處、船將此度申出候外國軍艦記旗と、振合違居候故、申達候ひ、必定異存可申出と存ひ。當時船將も氣乗能出精教示致居不

遠傳習受候者も可被遣折柄蒸氣船御受納相成候初發より右一儀ニ付萬一論柄を生し彼之氣を挫候様之儀も有之候あり、不宜候ニ付、船印之儀も先其儘ニ差置様子見計、追々談判仕候方可然奉存候。右之趣永井岩之丞にも申談候處、同意ニ付、依之右和解四冊相添、此段申上候。尤横文字は追便宿次を以差上可申候。此外傳教之蘭人士官滯崎中取扱振、並一ヶ年給料之儀共、追々申出候間、取調猶追便可申上候。以上。

卯○安政八月

荒尾石見守

記旗之儀ニ付、船將次官ヨリ加比丹へ申出候書面和解

一、毎々書面並口上ヲ以テモ申述候ハ、海軍御取立之爲、日本御奉行所不取敢乗組之者御申付之儀、肝要ニ有之候トノ義ニ候。右ハスームピングニ於テ日々習熟致シ置候テ、此後來着ノ船々へ御配付相成可申、此乗組ヲ以テ日本海軍ノ基ト被成、修行練磨可有之爲ニ候。

一、猶又申立置候ハ、教示之仕方、如何様ニ規定相立可申トノ儀ニ候。

一、國王之蒸氣船スームピング、既ニ國帝之モイト相成、御請取ニ相成候上ハ、武器全備之蒸氣軍艦御所得ト相成、今ヨリハ實ニ日本海軍ノ御備有之候。右ニ付、一昨日之書面ニテ教示方並乗組御申付方之義申立候。未外ニモ申上ヘキ肝要之事有之候ヲ存付申候。

一、右ニ付先一廉申述、此書面之主意ヲ相達可申義ハ、則日本記旗之義ニ有之候。

一、世界中諸之國々ニ於テ、各其國其外屬地軍勢海軍並商船等之記旗有之候ニ付、外國人民平常尊敬イタシ候。

一、記旗相建候軍艦、若記旗無之、或ハ不分明之記旗相建、武備イタシ候船ニ出逢候節ハ、逆妨イタシ、海賊ニハ無之哉、遂吟味候上、奪取候規定ニ付、右記旗ハ最肝要ノモノニ有之候。

一、依之、每船就中武備イタシ候船ハ記旗可有之事ニテ、船之後方ニ引揚候旗ハ、國旗ト相稱、何レノ國民ニ屬シ候トノ儀ヲ示シ申候。

一、軍艦ニ於テハ、右後方ノ記旗ノ外ニ、尙檣之内一本ニ一箇之徽有之、其船軍艦タル事並主役之位階ヲ示シ候。右徽ハ毎モ同様ニハ無之、長旗或ハ將旗ニテ、不斷檣ノ頂上ニ引揚有之候。

一、和蘭海軍用辨別記徽之繪圖致附屬候。

一、大橋之頂上ニ引揚有之候長旗ハ、唯軍艦之徴ニテ、商船ハ右旗相用儀不相成事ニ候。

一、將旗ヲ大橋之頂上ニ引揚有之候ヘハ、其船之指揮役アドミラルニハ無之、乍併重キ將士ニテ、其下知一艘ヨリ數多之船々ニ傳ヘ可申徴ニ有之候。

一、艦橋之頂上ニ引揚有之候國旗ハ、スコートベイナクト乗船ニテ、數艘之會長フラグオフシールノ徴ニ有之候。

一、表橋之頂上ニ國旗引揚有之候ハ、其船ニフイースアドミラル罷在候徴ニ有之、右ハスコートベイナクトヨリ高官之フラグオフシール一手之大將ニ有之候。

一、大橋之頂上ニ有之候國旗ハ、海軍極官ノフラグオフシールナルロイテナンドアドミラル罷在候徴ニテ、海軍一組之大將ニ有之候。

一、國帝或ハ國王之記旗ニ、國王之紋アルヲ大橋之頂國旗之上ニ引揚タルハ、其船ニ國主罷在ノ徴ニ有之候。

一、フレグオフシール船中ニ罷在其記旗一ツ之頂ニ引揚有之候節、長旗ハ

引揚無之候。

一、右之次第ニ付、軍艦ニハ第一記旗要用ニ有之候、其譯ハ、右記旗ニテ何國之船ト申義、尙橋之一本ニ建有之候旗ニテ、其主役之位階ヲ徴候義ニ有之候。

一、洋中ニ於テ軍艦、商船ニ出會候節ハ、下賤ヨリ高位ニ對シ、恭敬之爲、商船其記旗ヲ引揚禮儀ヲ盡シ候義ニ有之候。

一、若商船記旗ヲ建不申候節ハ、軍艦襲ヒ候テ不苦候。

一、各外國ノ人乗組居候貳艘之軍艦、洋中ニテ行會候節、右一艘之方ヨリ記旗引揚候モ、外一艘ヨリ不相答時ハ、兩國人平和ヲ破候徴トシテ、石火矢之備ヲ立、其船ニ近寄鬪戰之用意ヲ成シ、記旗引揚不申謂ハレヲ糺明致候一、港内ニ繫居勤務ニ預リ候軍艦ハ、其記旗ヲ朝引揚、日ノ入ヲ限トシテ卸申候。

一、港内ニ繫居、記旗ヲ引揚、又ハ卸候節ハ、武家之作法トシテ、音樂ヲ奏シ、或ハ太鼓ヲ打申候。此時當番並小銃ヲ携候者ハ、其銃ニテ禮義ノ手前ヲ致其記旗ヲ國民且國主ニ擬ヘ、恭敬イタシ候義ニ有之候。

一、右ニ付諸國民共國旗ヲ極肝要ノモノトイタシ候義顯然ニ有之候。

一、帝國日本モ國旗有之候哉相知不申候。

一、未タ無其儀候ハ、日本國ニモ最早海軍備ニ可相成候ニ付國旗拵ニ相成候事至極肝要ト存候。

一、右之通ニ相成候ヘハ記旗ヲ拵ヘ或ハ變改イタシ候國ハ何レモ各判之證據書ヲ以テ外國政府ニ掛合候風儀ニ有之右ハ混雜ヲ防キ候爲ニ候。

一、右日本記旗之義相濟候上ハ引續キ帝國日本海軍士官並乘組之裝束之義ニ付可申述候。

一、右之拵々貴君無御心置日本政府之聽ニ達候様恭敬ヲ以テ御申立有之度存候。

卯〇安政 七月

船將次官
日本へ差越候指揮役
クフアヒユス

後左ノ諸令有リ。

軍船諸帆白地中黒之制甚タ不便ヲ感ス。且船印吹貫ノ制日本小船ニ用ユ可シト雖モ大船ニシテ如斯ハ實ニ無用之長物タリ。當時實際其不便ヲ覺フ。終ニ改定之發令ニ及フ。是安政六己未正月廿日也。

大艦御國總標日の丸の旗相立公儀にては、中帆へ白紺吹貫引揚帆は中黒を用ひ積、先年相達置ひ處、向後御國總印は、白地之日の丸之旗艦綱へ引揚帆は白布相用ひ。公儀御軍艦は、中黒の細旗中帆柱へ引揚ひ間、諸家ニ於ても、大艦出來次第家々の船印、公儀御船印ニ不紛様取調、雛形を以て可被相伺ひ。

——海軍歴史

六日〇萬延元

年十一月。

一、大目付に

大艦には御國惣印日の丸幟相立、公儀に於ては、中帆之柱に白紺布吹貫引揚帆中黒相用ひ積、先年相達置ひ處、向後御國惣印は、白地日の丸之旗艦綱に引揚帆は白相用、公儀御軍艦は、中黒の細旗を、中帆柱に引揚ひ間、諸家に於ても、大艦出來次第家々の船印、公儀御船印に不紛様取調、雛形を以て可被相伺ひ。右之通、去未年相觸ひ處、向後帆は白布、又は帆中其家々の印、或紋付に共不苦ひ。尤御國惣印白地日の丸之旗艦綱に引揚ひ儀、並家々船印等之儀は、先達を相觸ひ通、可被心得ひ。

——昭徳院殿御實紀

七日〇文久三 軍艦ノ國標ヲ定ム。

周防守殿御渡 御軍艦印白地日の丸の外、白地中黒旗常の大橋上へ引揚置間、此段面々へ可被觸ひ。 嘉永明治年間録

船打砲術親

八月廿五日辛酉

○嘉永七年紀元二五一四年○辛酉三正綜覽。

將軍家定

濱庭○市内橋區。 二臨

ミテ、船打砲術ヲ觀ル。

○温恭院殿御實紀。柳營日記。通航一覽續輯。藤岡屋日記。

船打砲術親

船打砲術親閱

左ノ如シ。

廿五日

○安政元年八月。

一、今五時之御供揃之、濱御庭に被爲成、船打砲術上覽有之。

——温恭院殿御實紀

八月二十五日

○安政元年。

一、今五ツ時之御供揃之、濱御庭に被爲成、於同所海手船打砲術上覽有之。

——藤岡屋日記

嘉永六癸丑年九月廿五日、大坂御鐵炮方坂本弦之助參府ありて、大筒船打を命せらる。安政元年甲寅年四月六日若年寄本多越中守忠徳船打調練の事扱ふへきむね命せらる。同年八月廿五日將軍家濱御庭にをいて鐵炮船打御覽あり。御鐵炮方井上左太夫田付四郎兵衛二丸御留守居下曾根金三郎○信等組

子及び門弟を率ゐて是を勤む。同年十月廿二日御鐵炮方御船手御目付等に賜物あり。

嘉永六癸丑年九月廿五日

大坂御鐵炮方坂本弦之助

出府中大筒船打可被仰付ひ間、御船並水主場所等之儀考、御目付承合ひ様可致し。

安政元年甲寅年四月六日御書付

本多越中守○忠

大筒船打調練之儀、取扱可し申ひ。御書付留。

安政元年八月廿五日

一、今辰上刻濱御庭に被爲成同所於海手、砲術船打被遊上覽。安政元年錄。

井上左太夫船打業

凡拾町場

目當幕三間四方。星九尺。

壹番、中形押送船。